

東北学院大学論集

歴史と文化

(旧歴史学・地理学)

第50号

〔特集〕 新時代における日中韓周縁社会の宗教文化構造研究プロジェクト

前言	谷口 満	1
シンポジウム記録「日中韓周縁域史研究ことはじめ」		
I 「重慶の歴史と文化」	管 維良：著、水盛 涼一：訳	5
II 「資料からみた先秦期三峡地域の東西文化交流について」	蔣 剛：著、周 曉萌・趙 力傑：共訳	15
III 「古代蝦夷論の再構築に向けて」	熊谷 公男	(1)
IV 「栄山江流域の最近の考古学的調査の成果について」	金 容民：著、崔 英姫・佐川 正敏：共訳	33
V 「6世紀中葉（泗泚期百濟）以後の韓国栄山江流域」	佐川 正敏・崔 英姫	53

2013年

東北学院大学学術研究会

THE TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY REVIEW

HISTORY AND CULTURE

(Formerly HISTORY AND GEOGRAPHY)

No. 50

March, 2013

Special Edition

Research Project on Religious Cultures in the Peripheral Societies of Japan, China, and Korea
in the New Age

Preface..... Mitsuru Taniguchi 1

Record of Symposium

Research of History in the Peripheral Region of Japan, china, and Korea

History and Culture of Chongqing (重慶)..... Guan Weiliang 5

Cultural Exchange between the East and the West Observed from Archaeological

Materials in the Sanxia (三峡) Region during the Pre-Qin (先秦) PeriodJiang Gang 15

For the Reconstruction of the Theory about Ancient Emishi (蝦夷)..... Kimio Kumagai (1)

Achievements of Recent Archaeological Investigations along the Yongsangang

River Basin in South Korea Kim Yong-min 33

Yongsangan River Basin after the Relocation of the Capital to Sabi of Baekje in

the Middle of the 6th Century, Ancient Korea Masatoshi Sagawa, Choi Yeong-hee 53

The Reserach Association
Tohoku Gakuin University
Sendai, Japan

前 言

プロジェクト研究代表者：東北学院大学文学部教授

谷 口 満

東北学院大学アジア流域文化研究所は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業による研究事業、「新時代における日中韓周縁域社会の宗教文化構造研究プロジェクト」を、平成24年度から開始した。課題名の通り、研究環境の大きな変貌、研究者意識の大きな変化、地域住民歴史意識の大きな変質という新しい時代様相に応じて、日本においては東北地方、中国においては長江上流域、韓国においては半島西南部及び島嶼部を主な対象地域に取り上げ、その文化と民俗を、三地域の比較を考慮にいれつつ歴史的に考察しようとするものである。当然さまざまな歴史事象が問題とされることになろうが、周縁域の歴史構造がもつ真の意味での自立性・自律性というものは、おそらく宗教事象にこそより強く表現されているであろうとの想定のもとに、その点をとくに強く意識して研究を進めるつもりであり、課題名に“宗教文化構造”という一語を入れたのは、そのためである。

初年度である本年度は、プロジェクトの準備期間もかねて、次のような研究プログラムを展開した。

- 一．周縁域史研究の、現在における研究動向・資料状況などの調査を、上記三地域はもとより、九州北部及び中部、山陰地区、紀伊半島西部、中国西北部、ベトナム中部、韓国中南部といった周縁域のそれらについて実施し、周縁域史研究の問題点を把握することに務めた。この調査には、本学アジア文化史専攻の院生を積極的に参加させ、研究能力の向上に資することができた（出張記録などは、本研究所の年報『アジア流域文化研究 IX』に掲載する）。
 - 二．重慶師範大学歴史与社会学院・韓国国立扶余文化財研究所などとの研究連携を本格的に開始し、周縁域史研究の問題点とその対処策を相互に確認した上で、今後の共同研究の基礎的組織を構築した。
 - 三．4回にわたる研究会・シンポジウムを開催して、研究成果を広く公開した。
 - 四．大震災によって被災した、東北沿岸部の研究組織の復旧に対する協力と、流亡・散逸した歴史資料・考古資料・民俗資料の収集と保存は、本プログラムの重要な課題の一つであり、在地自治体・在地研究機関と連携しつつ、その作業を鋭意推進した。
- これらの成果は、各種の媒体によって逐次公表していくつもりであるが、本誌本号には、そのうちから、下記要項によって開催した「公開国際シンポジウム・日中韓周縁域史研究ことはじめ」をとりあげて、その記録を掲載することにした。東北地方・長江上流域・韓

国西南栄山江流域を対象としてその歴史と考古を論じている通り、本研究プログラムの文字通りの出発点となるシンポジウムに他ならないからである。

本シンポジウムは東北学院大学博物館「日中歴史研究交流推進・交流拠点形成事業」(文化庁：文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業。研究代表者辻秀人東北学院大学教授)との共催によるものであり、諸事務において協力をおしまれなかった辻教授及びスタッフの皆さんにあつく御礼申し上げたい。

また当日の通訳、提出原稿の翻訳・整理については、東北大学大学院教育研究支援者の水盛涼一氏・東北大学院生の周曉萌さんと趙力傑君(中国語)、韓国江陵原州大学の崔英姫さん・本学佐川正敏教授(韓国語)に全面的に担当していただいた。その周到的な通訳・翻訳・整理がなかったならば、本誌本号へのこの記録の掲載は、おそらくかなわなかったであろう。五名の方々にあつく御礼申し上げたいと思う。

さらに、本誌本号への掲載が可能になったのは、本誌の編集主体である東北学院大学文学部歴史学科の格別のご配慮によるものであり、学科長渡辺昭一教授をはじめ、関係各位に、深い感謝の意を表さねばならない。

平成25年度には、重慶師範大学に日・中・韓三国の研究者が集っての、国際シンポジウムの開催を計画している。どのような議論が展開されるか、今から楽しみはつきないが、その記録もできれば本誌に掲載して公表したいと考えている。

本プログラムに今後とも、一層のご支援・ご協力を賜うよう読者諸賢にお願いして、前言之としたいと思う。

— 東北学院大学アジア流域文化研究所・博物館共催 公開国際シンポジウム —

《日中韓周縁域史研究ことはじめ》

日時 平成24年12月15日(土) 12時30分～

会場 東北学院大学土樋キャンパス8号館5階 押川記念ホール
(プログラム)

主旨説明 谷口 満(東北学院大学アジア流域文化研究所所長)

基調講演 「重慶の歴史と文化」

管 維良(重慶師範大学博物館館長)

講演Ⅰ 「考古資料からみた先秦三峡地区の東西文化交流」

蔣 剛(重慶師範大学歴史与社会学院)

講演Ⅱ 「古代蝦夷研究の歩み」

熊谷公男(東北学院大学文学部)

座 談 「韓国栄山江流域の考古発掘成果をめぐって」

崔 英姫(江陵原州大学校人文学部)

佐川正敏（東北学院大学文学部）

金 容民（国立扶余文化財研究所・資料提供）

閉会講話 辻 秀人（東北学院大学博物館館長）

重慶の歴史と文化

管 維 良：著
水 盛 涼 一：訳⁽¹⁾

人がいればそこには歴史が存在する。人類の歴史はまさに人類の誕生からはじまるのである。重慶にはいつごろから人類が活動していたのだろうか。1985年から1986年にかけて、古人類学〔paleoanthropology〕の学者と考古学調査発掘隊は、重慶市の巫山県でアジアそして中国における最古の人類化石を発見した。科学的測定によれば、その年代は今から200万年ほど前のもので、「直立人巫山亜種」〔*Homo erectus wushanensis*、ホモ・エレクトス・ウシャネンシス、巫山原人〕と命名された。略称を「巫山人」という。

どうして長江の三峡地域が中国そしてアジアにおける人類の発祥の地となったのであろうか。その原因には色々考えることができるが、かの地が人類の最も必要とする塩を生産したところこそ主要な要因といえるだろう。現在の〔重慶市〕巫溪県の寧廠鎮にある宝源山の塩泉には、人類の祖先すなわち古代の類人猿が集まり、塩泉を味わい、少しずつ人類へと進化していったことであろう。新石器時代に入ると、人々は陶器を発明して塩水を煮沸し塩を生産するようになった。そして民族共同体が広く分布し、考古遺跡が数多く残されることとなった。これは同時代のその他の地域では見られないことである。その状況を文献が反映したものだろう、『山海経』には巫山の十巫、あるいは巫山の六巫の名がみえる⁽²⁾。濃厚な巫術の文化の存在は、彼の地に人類の早期の文化があったことを反映しているのである。

各巫の文化のなかで⁽³⁾、ひとつの偉大な氏族が育まれた。それが巴族である。『山海経』第十八「海内経」には以下のような記載がある。

西南には巴国がある。太皞は咸鳥を生み、咸鳥は乗螯を生み、乗螯は後照を生んだ。後照は巴の人の祖先である。

この文言は巴についての歴史の謎を解明する鍵であり、後の巴族誕生の歴史と塩とが密接な関係にあることをあらわしている。太皞〔すなわち中国神話における始祖神の伏羲〕

⁽¹⁾ 本稿の（丸括弧）は原著者による注、また〔亀甲括弧〕および脚注は訳者による補注である。

⁽²⁾ 『山海経』第十六「大荒西経」には巫咸、巫即、巫冊、巫彭、巫姑、巫真、巫禮、巫抵、巫謝、巫羅の十巫が、また『山海経』第十一「海内西経」崑崙には巫彭、巫抵、巫陽、巫履、巫凡、巫相の六巫がみえる。

⁽³⁾ 巫咸や巫載といった氏族共同体を諸巫部落盟などと呼称する場合がある。屈小強・任麗潔「巫載文化帶的形成及其歷史地位」（『重慶三峡学院学報』一九九四年第四期）、管維良・林艷「三峡巫文化初探」（『三峡大学学报（人文社会科学版）』二〇〇五年第一期）、滕新才・楊用超「当代巫山歷史文化研究評述」上・下（『重慶三峡学院学報』二〇一二年第一・第二期）などを参照のこと。

が咸鳥を生んだわけだが、これは太皞と咸鳥とが同時代の非常に古い存在であり、今より五千年もの時間を距てることをあらわす。古代の「咸」〔鹹〕の字は「塩」の字と通じるのであるから、咸鳥とは塩鳥すなわち塩を運ぶ鳥であろう。巴人は〔鳥がはばたくように〕二本の櫂を漕いで長江に巫山の塩を運搬したであろう。それが文献にあらわれる巴族の歴史の最初期の姿である。また、咸鳥が乗鰲を生んだというが、乗とは登載するという、運搬をあらわすだろうし、鰲とは管理の意である。運搬するものは上述のとおり塩なわけであるから、これは巴族が「咸鳥」時代からすでに結束して塩を運搬しており、また「乗鰲」時代に至って塩を広く販売していたことを象徴しているといえよう。そして乗鰲が后照〔后昭とも〕を生むわけだが、后とは君主であり、照とは灶〔かまど〕の謬語である⁽⁴⁾。巴族はすでに塩を買い販売する事に比べ、自らカマドを造り塩を煮沸した上で供給と販売をともに行うほうが遥かに利益率が高いことを認識していたことであろう。ここから、「后照」時代には〔塩を生産するかまどを支配する人物が咸鳥・乗鰲として販売も行い〕巴族が自ら生産し販売するに至っていたことをうかがうことができる。巴族が塩泉で塩を生産し販売するなか、その力はいよいよ強大となり、「后照は巴の人の祖先」となったのであった。こうして、巫山の諸部族は〔塩の販売を行う〕巴族を大巫山の部族集団の一員と認め、〔重慶方面に住む部族の総称としての〕巴族が誕生したのであった。

巴族は強大になるにつれ、四方へ異動していった。そのうち一支は南のかた巫山を越え夷水に到った。夷水とは現在の湖北省西部の清江である。そして大巫山より来た四姓と連合し⁽⁵⁾、巴氏の務相を廩君なる名の首領とする部族を結成し、また付近を流れる〔清江の支流の〕塩水の女神を崇める部族を併呑し、夷城を首府としたのであった⁽⁶⁾。しかも〔長江支流の烏江のさらに支流である〕郁水〔郁江とも〕のほとりにあった豳国をほろぼし、〔重慶市の彭水苗族土家族自治州にある〕郁山の塩泉を奪取した。また巫山から北上し、枳邑（今の重慶市涪陵区）を制圧、東のかた鬼国を滅亡させ、また西のかた江州を占領した。そして川を濠として山の上に城を築き、江州（いまの重慶市渝中区）を都として巴国を建設したのであった。周の武王による殷の紂王討伐の戦争へ参加してその先鋒となり、〔勇猛な近衛兵である〕「虎賁の師」と号し、戦いの歌や戦いの踊りにより敵の士気を威圧したため、殷側の兵を造反せしめ、殷を滅亡させるという大功をあげることとなり、子爵に封ぜられ、姫姓の宗室がおさめる〔子爵の巴の国という意味の〕巴子国とまでなったので

⁽⁴⁾ 現行の『山海経』はもとより『太平御覧』巻一六八「州郡部十四」「山南道下」「渝州」に引用される『山海経』等でも「乗鰲有后照」とする。ただし南宋の羅泌『路史』巻十「後紀一」「禪通紀」「太昊紀上」には「伏羲生咸鳥。咸鳥生乗鰲、是司水土、生后昭。后昭生顧相、斧处于巴。是生巴人」とあり、また王象之は「巴国考」（周復俊編『全蜀藝文志』巻四十八）において「山海経云、西南有巴国、又云昔太皞生咸鳥、咸鳥生乗鰲、乗鰲生后昭、是為巴人」と述べ、后昭や后昭といった表記を伝えている。

⁽⁵⁾ 『後漢書』列伝第七十六「南蛮西南夷列伝」によれば、廩君となった務相は樊氏、暉氏、相氏、鄭氏の四姓を臣下としたという。

⁽⁶⁾ 管維良「郁山塩泉与巴国興衰」（『三峡論壇（三峡文学・理論版）』二〇一〇年第三期）を参照のこと。

あった⁽⁷⁾。

巴国は江州を首都としていた他、平都（今の重慶市宝都県）、墊江（今の重慶市合川区）、閬中〔四川省南充市閬中市〕を副都としており、最盛期には東のかた奉節〔今の重慶市奉節県〕、北のかた漢中〔今の陝西省南部の漢中市〕、西のかた宜賓〔四川省東南部の宜賓市〕、南のかた黔北〔今の貴州省北部で現在の遵義市を中心とする地域〕を版図とするに至った。そして西暦紀元前 316 年に秦に滅ぼされたのである。〔蘇秦とともに縦横家として知られ合従連衡をともに演出した〕張儀ひきいる軍により巴国が滅亡したのち、巴国の故地には巴郡が設置され、江州に巴郡そして江州県の首府が置かれ、〔長江と嘉陵江が鋭角に交わるため渝中半島とも称される〕半島状の地形の突端に江州城が建設されたのである。これが重慶での初めての築城となった。巴族の文化内容は豊富で、独自の言語があり、独自の絵文字があり、独自の戦いの歌や戦いの踊りがあり、独自の祭祀や歌舞があり、独自の居住形式——高床式建築⁽⁸⁾——があり、独自の頭髪である「弮頭」があり⁽⁹⁾、独自の青銅兵器——〔刀身中央がやや膨らみ柳の葉のような〕柳葉式剣、〔中国伝統の巾着袋のように寸詰まりで刀身が大きく膨らむ〕巾着様鉞、〔木製器具に差し込むソケット様の「駮」が短い〕短駮矛、〔刀身が張り出して後方に展開する〕双翼式戈、〔刀身が二等辺三角形のような〕三角形戈、そして楽器の〔虎のツマミが溶接された銅製鼓楽器である〕虎鈕錡干など——があった。

巴族は尚武の気風を持ち、勇猛に戦い、秦に加勢し楚を討伐し、また漢を助けて項羽の楚を滅ぼした。六朝時代〔222 年～589 年〕から隋〔581 年～618 年〕、唐〔618 年～907 年〕の時代には西晉を助けて呉を滅ぼし、隋を助けて陳を滅ぼし、唐を助けて〔隋末の群雄の一人で現在の湖北省荆州市を中心に梁を再興した〕蕭銑を滅ぼしている。こうした歴代の統一戦争のなかではみな抜群の功績を挙げたのである。

三国時代の蜀漢の時〔建興四年春〕には都護の李嚴が江州に「大城」を築いたが、その「周囲は十六里」であった。西暦 583 年には隋の文帝が明清の重慶城の前身を渝州と名付けた。唐代には〔渝州城のある現在の重慶市渝中区に対し長江を超えた南岸にあたる〕現在の重慶市南岸区に南城を建設し、また今の嘉陵江の〔渝中区から見て〕対岸において漢

⁽⁷⁾ 『華陽国志』卷一「巴志」には「周武王伐紂、実得巴蜀之師、著乎『尚書』。巴師勇銳、歌舞以凌殷人倒戈。故世称之曰「武王伐紂、前歌後舞」也。武王既克殷、以其宗姬封於巴、爵之以子。古者遠國雖大、爵不過子。故吳楚及巴皆曰子」とある。

⁽⁸⁾ 藍慶元「也談“干欄”的語源」（『民族語文』二〇一〇年第四期）によれば、原文の「干欄式建築」とはタイ・カダイ語族の言葉で部屋を表わすという。

⁽⁹⁾ 常璩『華陽国志』卷一「巴志」第六「夷人安之。漢興、亦從高祖定秦有功、高祖因復之、專以射白虎為事、戶歲出寶錢口四十。故世号白虎復夷。一曰板楯蛮。今所謂弮頭虎子者也」について任乃強は『華陽国志校補図注』（上海古籍出版社、一九八七年十月）において板楯蛮が平らな楯しか製造できない拙劣な技術力でありながらも勇猛で知られたこと、また「弮」が強弓を指し「𪔑」などとも記載され、現地に強姓のものが多くことから「弮頭」を強力の意に解している。なお四川省徳陽市広漢市の三星堆博物館に所蔵される三星堆二号祭祀坑より出土した青銅跪坐人像は太い直毛を後上方へ梳きあげる特殊な頭髪様式をとる。

代に建設された北府城を保存して継続的に使用することとし、渝中半島の渝州の主城とあわせ〔川をはさみ南北に並ぶ〕三城が支え合う体制を形成したのであった。偉大な詩人である王維〔701年～761年〕は「明け方に巴の峡谷を行く」において渝州の大城を描写し以下のように歌う⁽¹⁰⁾。

水郷では舟の中で市場が立ち、山中の橋は樹々の梢の上を行く。高みに登ると村々の家が見え、遙か彼方には二筋の流れが光る。

一幅の山城の光景が紙上にありありとあらわれるようではないか。

中国の唐王朝の時代とは詩歌の時代であり、渝州もまたよく詠じられた。〔劍南道梓州〕射洪県〔現在の四川省遂寧市射洪県〕出身の才子であった陳子昂〔661年～702年〕は、〔現在の重慶市北碚区にある〕嘉陵江小三峡を過ぎたとき、佳句を残した⁽¹¹⁾。

風景は眺めることができるが歌声は殷々とこだまして聞き取れない。河をうねうねと下ると青山があわさり、峰々が交互にあらわれ陽も隠れる。

大詩人の李白〔701年～762年〕は「巴女のうた」で歌う⁽¹²⁾。

巴の川の流れは矢の如く、巴の船は飛ぶが如く、十ヶ月も離れ三千里の彼方にいるあなたは一体いつになったらお帰りになるの。

有名な詩人の司空曙〔720年ごろ～790年ごろ〕は詩歌をもって渝州の繁栄を下のように描き出した⁽¹³⁾。

紅の提灯をかかげた渡し場で君に会う。管弦がテンポ良く鳴り響き雨が降るようだ。明け方に別れて静寂とした川を行けば、ただ猿の声のみが嘯々と水面にこだまする。

また偉大な詩人の白居易〔772年～846年〕は〔山南道に属し現在の重慶市忠県にあたる〕忠州の刺史として赴任していたとき、渝州城に到り南岸の塗山寺を訪問したときに⁽¹⁴⁾、

野の道を一人の伴もなく行く。僧坊に宿をとることひとしきり。塗山の往来には慣れたもの、ただ馬の蹄のみがそれを知る。

と歌っている。李商隱〔813年～858年ごろ〕の「夜雨に北に寄せる」は人口に膾炙した名編であるが⁽¹⁵⁾、そこでは

何時お帰りますの、とお前は尋ねるが、まだ何時のあてはない。巴山では夜の雨が降り続いて秋の池を漲らせている。あの西向きの窓でお前と二人夜更けまで灯心を切りつつ語りあうことが出来るのは何時のことか。その時こそ巴山に雨が降っている今の私の心を語りあえるのだが。

⁽¹⁰⁾ 王維『王右丞集』巻十二「近体詩十六首」「曉行巴峽」。

⁽¹¹⁾ 陳子昂『陳伯玉文集』巻一「詩賦」「入東陽峽与李明府舟前後不相及」。

⁽¹²⁾ 李白『李太白詩』巻二十五「閨情」「巴女詞」。

⁽¹³⁾ 司空曙『司空文明詩集』「發渝州却寄韋判官」。

⁽¹⁴⁾ 白居易『白氏長慶集』巻五十五「律詩凡一百首」「塗山寺独遊」。

⁽¹⁵⁾ 李商隱『李義山詩集』巻六「七言絶詩」。なお、余金龍「李商隱〈夜雨寄北〉詩考」（『育達研究叢刊』第四期、二〇〇三年三月）は大中六年（852年）のことであろうと推測する。

と歌っている。これは重慶一体の風物詩を詠み込んだものである。

長江三峡〔いわゆる三峡を指す〕はその雄偉にして際立つ美しさで人を圧倒してきており、道すがら三峡を通るものは多くの詩歌を謳ってきた。その中でも最も著名なものといえば李白の「朝に白帝城を発つ」を超えるものはなかろう⁽¹⁶⁾。そこでは

朝早くに美しい色の雲がたなびいている〔重慶市奉節県の長江三峡に位置する〕白帝城を出発し、千里の江陵を一日にして還ってきた。兩岸で啼いている猿の声がまだ耳に残っているうちに、軽やかな小舟は幾万に重なる山々の間を一気に通過してしまった。

とうとう。また杜甫は西暦 766 年に〔山南道で現在の重慶市奉節県にあたる〕夔州に住んだとき、夔州の山水、風土や人情に詩想を刺激され、430 首以上の詩歌を執筆した。これは現存する杜甫の詩のうち三分の一にあたる。その著名な詩句「白帝城」では⁽¹⁷⁾、

白帝城の城門から雲が湧き出している。城下では雨がお盆を返したように降りしきる。高い山や急な谷には雷霆がとどろいている。古木が立ち枯れ蒼藤が茂り日月も暗くなっている。戦馬などより戦闘から帰耕した馬こそが楽しかろう。以前は千戸もあった集落は今では百戸ばかり。哀しげな未亡人が税に苦しんで秋の野に慟哭しているが何処の村のものだろう。

と歌い、また「夔州のうた十首」では⁽¹⁸⁾、

巴国のなかほど東部の巴東山、川の水はその間を開いて流れ下る。白帝城ははるか高みで三峡に鎮座し、夔州の険は〔現在の陝西省漢中市勉県の西南にある〕百牢関まで打ち続く。

と歌い、「八陣図」では⁽¹⁹⁾、

〔諸葛孔明の〕功績は魏呉蜀の三国すべてを覆い、その名も八陣図を練り上げ〔て呉の陸遜を退け〕た。しかしなおその流れは石を動かすにはいたらず、遺恨なるは呉を併せられなかったこと。

と歌っている。

西暦 1102 年、北宋の徽宗は渝州を恭州とあらため、1189 年には南宋の光宗が恭州を重慶府として昇格させた。宋代には重慶の経済は一躍発展しており、棚田が大規模に建築修理され、水を溜めて田を潤し、水稻を植え、ときには二期作が行われた。〔川峡路の夔州路にある〕南平軍（いまの重慶市綦江区）で生産された茶葉は〔チベット系の青唐の馬と中国の茶とを交換する〕茶馬交易の重要拠点となった。南岸区〔で渝中半島の東側にあたる〕塗山窯で生産された黒釉葉の磁器は当時の著名な磁窯として知られ、〔川峡路の潼川

⁽¹⁶⁾ 李白『李太白詩』卷二十二「行役」「朝発白帝城」。

⁽¹⁷⁾ 杜甫『杜工部詩』卷一「雨雪」「白帝城」。

⁽¹⁸⁾ 杜甫『杜工部詩』卷四「都邑」「夔州歌十絶句」。

⁽¹⁹⁾ 杜甫『杜工部詩』卷十五「軍旅」「八陣図」。

府路で現在の重慶市合川区にあたる)合州は宋代において造船業の一大中心となっていた。経済的發展は商品經濟の發展をうながし、「〔長江と嘉陵江の〕二江の商業はまことに盛んで、船の楫がたびたび交錯するほどである」と言われる盛況を形成したのである⁽²⁰⁾。時の人は渝州を「商人が往来し、貨幣が行き交い、水系を上下するものは数知れず」と称えている⁽²¹⁾。

南宋の後期には政治腐敗が発生し、またモンゴル帝国が大挙して南方へ進出してきた。こうして四川は重要拠点となり、重慶はその重要拠点の重点となったのである。これがために、四川制置副使で重慶府の知事であった彭大雅は戦間期に重慶府城を増築し、防御能力を向上させることに心を砕き、重慶を対モンゴル戦の指揮を執る中軸とし、また流れに逆らって毅然と立つ精神的支柱としたのであった。1241年に余玠が四川安撫制置使となると四川方面の防衛を行う上で制置使府を〔成都府より〕重慶府へと遷したのである。余玠は山城による防御体系を採用し、20あまりの山城を交通の要衝に設置して、相互に呼応する体制を作り上げたため、モンゴル軍の進出に対して有効に対処することが出来た。〔重慶市合川区にあたる〕合州釣魚城は釣魚山の上に設置され、大小およそ二百回あまりの戦闘に、なお宋側の拠点として巍然と屹立したのである。西暦1258年にモンゴル帝国の大ハーンであるモンケが三方より宋に攻め寄せたが、みずからは主力の四万を率いて四川へ侵攻し、1259年2月には釣魚城のもとに到着、組織的に釣魚城を囲んだのであった。しかも7月には〔重慶市合川区の〕脳頂坪にて釣魚城の守将であった王堅が砲撃によりモンケへ重傷を負わせ、モンケは〔重慶市北碚区の〕温湯峡にある温泉寺で死亡した。こうして釣魚城は対モンゴル戦線において偉大な勝利を獲得したのである。

宋代もまた同様に詩歌が流行した時代であった。三蘇〔現在の四川省眉山市東坡区の出身である父の老蘇すなわち蘇洵、兄の大蘇すなわち蘇軾、弟の小蘇すなわち蘇轍を指す〕は何度も三峡へ足を運び、多くの詩を作成している。蘇洵は「題白帝廟」として⁽²²⁾、

〔『太平広記』巻五十六「雲華夫人」には『集仙伝』を引き夏の禹王が切り開いたというが〕誰が三峡をこのように堅固に切り開いたものか、〔杜甫が『杜工部詩』巻六「蜀相」で歌うように〕とこしえに群雄を苦難に導く。〔春秋戦国の楚王国の王族である〕熊氏はもう凋落しその他の名門もいなくなり、〔後漢初期に〕国を建てた公孫述はひっそりと空城を放棄した。〔白帝城を改名した〕永安宮に〔呉軍と荊州の覇権をめぐる〕戦い敗北して〕死んだ劉玄徳を悲しみ、石兵八陣を練り上げ精根尽き果て〔ながらも陸遜を追い払うに過ぎなかった〕諸葛孔明を残念に思う。白帝には靈驗あって莞爾と笑うばかり、諸公はどうして兵事だけで敗れたものか。

と歌っている。また南宋の詩人である范成大は四川で官途についたとき、当時恭州と呼ぶ

⁽²⁰⁾ 王象之『輿地紀勝』巻一七五「重慶府」〔旧題名記〕。

⁽²¹⁾ 『宋代蜀文輯存』巻七十八が『四川通志』巻五十に掲載される南宋の冉木「心舟亭記」を引く。

⁽²²⁾ 現行の蘇洵『嘉祐集』には無く、宋版『類編増広老蘇先生大全集』にのみ見られる。

れていた今の重慶に到り、「夜に恭州に宿る」の一首を詠んで⁽²³⁾、

草山は瘦地で田畑もしぜん固くなるが、村落はよろこんで粟や豆を収穫する。竹林や川のほとりの村は〔四川の雅称である〕錦里というほどではないけれど、清いせせらぎに夜月がのほり私は渝州に到着する。小さい楼閣が盤石の高いところにあれば鱸網〔ともづな〕は東に西に急流と戦っている。峡に入ればすぐに風物が変わりゆき、布のスカートをはいた裸足の婦人がみなコブをたれる。

と重慶の風物を描写している。また四川安撫制置使の余玠は、

〔重慶城東方の〕望龍門から東へいけば河水は天と和し、渡河を待つ旅人はしばらく息を休める。これから夕暮れになれば往来は忙しげとなり、水面に争うは夕陽の船。

という「黄桷晩渡」を歌っている⁽²⁴⁾。

〔重慶市大足区の〕大足石刻は南北宋の代表作で、中国後期石窟のひとつの到達点となっており、世界文化遺産にも登録されている。主要な石刻はおおむね大足北山と宝頂山にある。大足北山には石刻彫刻のある小型の摩崖石窟が264基存在し、その多くは観音、地藏、阿弥陀仏が彫られており、なかでも136号窟は最も優美である。宝頂山の大仏湾〔という名の地域〕は規模が最大で、馬蹄形の長さ500メートル、高さ15から30メートルの断崖に31組の大型彫像が彫り込まれている。内容は前後が関連しており、經典の文言を配置して彫像を説明している。その中の華嚴三聖像〔毘盧遮那仏、普賢菩薩、文殊菩薩の三像〕は氣勢も雄偉で高さは7メートルに達する。また千手観音像は壯麗を極め、1007の手を孔雀の翼のように上方、左右の三方から展開している。涅槃仏の長さは31メートルで、上半身のみが彫られ、下半身は岩の中に隠れているようで、参観者へ思いを馳せさせ仏陀の偉大さをあきらかにしている。宝頂山の石刻には濃厚な生活の気風もあり、たとえば鶏飼い女、笛吹き女、また〔牛を脇に牧童二人が肩を抱きあう〕牧牛風景などがあり、なかでも父母恩重経変相は父母が子女を養育した苦しい過程を生き生きと描き出しており、民間風情を伝える一幅の絵となっている。

明朝初年の1371年（洪武四年）、重慶の指揮使であった戴鼎は、もともとの城の基礎の上に重慶城を修築した。〔清朝の〕乾隆『巴県志』には以下のような記載がみられる。

明朝の洪武初年に指揮の戴鼎が以前の基礎により石城を建設した。高さは十丈、周囲は二千六百七十七丈七尺、周囲の川を濠とし、門は十七、九門をひらき八門を閉じて九宮八卦〔天の領域を井形に分けた九区域すなわち九宮を『易経』の八卦に配当する考え。奇門遁甲にも援用され、水滸伝には九宮八卦陣が登場する〕をかたどったのである。

⁽²³⁾ 范成大『石湖居士詩集』卷十九「恭州夜泊」。日本では随分と流行したようで、江戸時代に訓点を施した『石湖先生詩鈔』、『石湖詩』、『石湖詩』（詩詞雑俎本）、『蜀中詩』などが刊行されている（すべて長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』十五「宋詩五」汲古書院、一九九二年二月に収録）。本詩も『蜀中詩』卷下に載る。

⁽²⁴⁾ 『蜀中広記』卷十七「重慶府巴県附郭」「黄桷晩渡」。

その開かれる九門のうち、朝天門、東水門、太平門、儲奇門、金紫門、南紀門は長江に面しており、臨江門と千厩門の二門は嘉陵江に面し、通遠門のみが西側より陸路へと接続している。

明末清初には重慶も長期の戦乱に巻き込まれ、土地は荒廃し人口は激減することとなった。順治年間〔1644年～1661年〕には四川には僅か耕地が一万頃あまりとなってしまう、明朝時代の十分の一にも及ばない状態であった。しかも、たとえこの状況であっても、「耕せる田があるものの耕す民がない」のであった。政府統計によれば康熙二十四年（1685年）にあってなお戸数は18,000戸であり、人口は九万人たらずであった。そこで四川の経済を回復するため、清朝政府は移民の導入を企図し、外地へ逃げ延びていた四川人を本籍地へ帰還させるとともに、とくに四川省以外の出身の人間を募集して四川で「挿占落業」〔入植者が耕せるだけの土地を思うがままに占有して草を挿して目印とし自己の不動産とすること⁽²⁵⁾〕させて開墾を行い、官吏にも民衆を募集しての開墾を奨励したのであった。移民のなかでは湖広地方（今の湖北省や湖南省）の出身者が最多であり、また他の省の出身であっても湖広地方を経由して四川へ入植してきたのであった。ゆえに史上ではこの人口移動を「湖広填四川」〔湖北省・湖南省が四川省を填める〕と言うのである。こうして大量の人口が移入してきたため、労働力が増加、土地も開墾され、結果として経済が発展していったのである。そして重慶の経済的な地位も迅速に上昇し、重慶を紐帯とする商業貿易網が形成されていった。長江の主要な支流である嘉陵江、岷江、沱江流域で生産される穀物、棉、塩、糖は川を下り〔長江上流域にあたる〕重慶に集中し、そして〔中流域の〕漢口へ運ばれ、そして〔下流域の〕蘇州へといたるのである。この長江ラインこそが米、木材、塩、棉、布、西洋産品運搬の大動脈であり、重慶は長江東西貿易の起点であり、長江上流商品の集散地なのである。

清代の80%の四川人は全国各地からの移民である。各地の多様な声色の芸術が移民を通して四川に流入し、四川にもともと存在した声色の芸術と一体となり、「川劇」〔四川風劇〕を産み出した。高腔〔高い調子〕の川劇は江西の弋陽腔〔現在の江西省上饒市にある弋陽県に発祥した高い調子の歌の節回し〕が発展して成立したものであるし、江蘇省の崑曲〔現在の江蘇省蘇州市にある崑山市出身の魏良輔が完成した歌曲および節回し〕が四川に流入して「川崑」〔四川風崑曲〕となり、西皮〔音が大きく跳躍する旋律で複雑なリズムを持ち、感情の高ぶりを表現する〕や二黄〔ゆっくりとしたテンポで、叙情や悲哀を表現する〕の節回しを持つ川劇胡琴戲〔胡弓伴奏を伴う四川風劇〕をも包括するのだが、この調子は湖北漢調〔湖北省の武漢を中心とする節回し〕が発展して流入したのもでもあり、また川劇の乱弾〔格律に厳格な崑曲や弋陽腔以外の伝統劇の総称〕は陝西省の秦腔〔柏子木を入れて調子を高めたり胡弓や梆笛を伴奏楽器とする劇調〕が四川に入って変容したも

⁽²⁵⁾ 詳細は孫和平「“落担”、“挿占”——“湖広填四川”的早期民俗記憶」(『成都大学学报(社会科学版)』二〇〇八年第四期)を参照のこと。

のである。ただ灯戯〔旧正月や灯節といった祝祭に四川で行われる伝統演劇〕のみが四川省独自のものである。ここからみれば、川劇とは移民の文化の産物といえることができるだろう。

1891年には重慶海関〔税関〕が成立し、関税の徴収を開始し、重慶は諸外国に開港したのであった。開港の後には中国産品が大量に輸出され、また西洋の産品が多く入ってくることとなり、四川の木造船舶による運輸業が反映することとなった。また〔1892年の時点で⁽²⁶⁾〕民間船舶1,800艘あまりが合計4.3万トンもの貨物を搭載して入港しており、また1899年には2,900艘あまりが10万トンもの貨物を搭載して入港したのであった。20世紀初頭にいたると、重慶は毎年民間船舶が二万艘入港し、貨物はなんと50万トンにも達した。宣統年間の統計によれば、四川で〔船舶が川を上るときに両岸より〕船曳をする人夫は200万人を超え、周囲より重慶を経由して輸出される貿易活動や水上運輸の発展により、重慶は長江上流で最大の水上・陸上の商業拠点となったのであった。こうした商業拠点の文化を明確に体現しているのが、現今の「火鍋」料理〔中国風の寄せ鍋〕の出現である。

200万人にも及ぶ船曳人夫や数十万人にも及ぶ埠頭労働者は収入も少なく、ボロを着て街頭や道ばたで貧しい食事をするのみであった。20世紀初頭になると港湾地区に棒天振が出現し、ある大衆的な軽食を販売し始めた。その原料は牛の下水〔中国では内臓を指す〕約七、八種で、「水八塊」〔八種類の「下水」の意〕なる名前であり、南紀門の宰房街あたりから出される値段のつかないような牛の蹄や内臓を利用したため価格もきわめて安く、しびれるように辛い塩味のスープに入れて提供され、スープあるいは食事として飲食されたが、まさにこの料理は機運に応じて生まれたものといえよう。1926年の前後には宰房街の町角にいたイスラム教徒の馬氏の兄弟が、市井の「水八塊」の製法に芝麻醬〔ゴマを炒ってすりつぶしたみそ状の調味料〕や蒜泥〔ニンニクをすりつぶしたもの〕を入れて味をまろやかにし、牛の胃袋を中心に四季の野菜を入れ、ちゃんとした台所を持つ店舗を出店し看板を掲げた。こうして中国の飲食史上に人々の食欲を誘う重慶毛肚火鍋〔毛肚とは牛の第三胃であるセンマイ〕が卓越したものとして世にあらわれたのであった。

⁽²⁶⁾ 1892年としたのは雍希宏・朱培麟『重慶文化与交通簡史』（二〇〇三年六月）第二節「重慶開埠与近代重慶交通運輸的發端」第二小節「近代交通運輸的發端」による。

資料からみた先秦期三峡地域の 東西文化交流について

蒋 剛：著
周 晓 萌：訳
趙 力 傑：訳⁽¹⁾

本文で述べる峡江地域とは、現在の重慶市東部および湖北省西部を包括する地域となる。この地域は主に〔四川・重慶地域東部の〕川東褶曲帯〔the east sichuan fold belt〕と四川省・湖北省・湖南省・貴州省にかけての隆起帯によって構成され、長江がこの地域を南西から北東方向にむかって流れている。峡江地域は〔重慶市〕奉節県を境界として東西の二つの大きな地理的ブロックに分かれており、東は大巴山山脈から巫山山脈にかけての山岳地帯であり、また長江により浸食された地域では中低山や峡谷が続く。また西は浸食を受けた四川・重慶地域東部の低山や丘陵を主とする地域であり、また〔東北から西南に向けて何本も〕平行に嶺谷が走る地域でもある。

古代の人々は主に長江とその支流の兩岸の〔浸食によって形成され最下段から第一級、第二級と高くなる〕各級の台地で生き、人口を増やしていった。現在の考古学的発見から見ると、この地には200万年前にもさかのぼる巫山猿人〔200万年前と推定された「直立人巫山亜種」(Homo erectus wushanensis、ホモ・エレクトス・ウシャネンシス、巫山原人)を指す〕の残した遺跡があり、以降も古代の四川盆地と湖北省地域および中原地域とが交流する十字路となったのであった。

この地域はただ自然地理によって〔東西の〕二つの異なる地理的ブロックに分かたれており、しかも先秦期〔秦によって統一された紀元前221年より以前の時期を指す〕の考古学的発掘により判明した各種文化においても東と西とで明確な文化の相違があったにもかかわらず、それでも同時に幅広く文化交流を行ってきたのである。近年、三峡ダムで発掘された文物が相次いで公表され、研究者はこの地域に関する先秦時代の文化的系譜の構築や古代文化の変容・交流といった分野で、比較的多くの研究成果をうみだし⁽²⁾、既存の研

⁽¹⁾ 本稿の(丸括弧)および脚注は原著者による注、また〔亀甲括弧〕は訳者による補注である。

⁽²⁾ 孫華『四川盆地の青銅時代』(科学出版社、二〇〇〇年)。余西雲「巴史——以三峡考古為証」(科学出版社、二〇一〇年)。于孟洲『峡江地区夏商時期考古学文化研究』(科学出版社、二〇一〇年)。白九江『重慶地区的新石器文化——以三峡地区為中心』(四川出版集团巴蜀書社、二〇一〇年)。高星・裴樹文『三峡遠古人類の足跡——三峡庫区旧石器時代考古的發見和研究』(四川出版集团巴蜀書社、二〇一〇年)。朱萍『楚文化的西漸——楚国經營西部的考古学觀察』(四川出版集团巴蜀書社、二〇一〇年)。楊華『三峡遠古時代考古文化』(重慶出版社、二〇〇七年)。郭立新・夏寒『峡江地区古代族群互動与文化變遷』(科学出版社、

究を大いに乗り越える認識を得たのであった。本稿はこれまでの研究成果を総合し、現在までに獲得された考古学的発見から先秦時期の峡江地域における東西文化の交流状況について巨視的な整理を行い、読者へ提供するものである。

— 「鋭稜砸撃法」の登場—— 旧石器時代

峡江地域は東アジア地域における旧石器時代の遺跡や古人類の化石が豊富に出土しており、旧石器時代早期から旧石器時代晩期までにかけての全ての時期を欠けることなく発掘できている。この地域で豊富に発見される古人類の化石は古人類の起源を探索するうえで非常に重要な意味を持つものだろう⁽³⁾。現在までに峡江地域で発見された旧石器時代早期の遺跡としては、〔重慶市〕巫山県の龍骨坡、〔重慶市〕豊都県の煙墩堡、〔湖北省宜昌市〕秭歸県の孫家棟などを挙げることができる。また旧石器中期の遺跡としては、豊都県の高家鎮、以下おなじく豊都県の冉家路口、井水湾、棗子坪、範家河、池壩嶺などがある。さらに旧石器晩期の遺跡としては、〔重慶市〕忠県の烏楊、〔重慶市〕雲陽県の大地坪などが存在する。

これまでの研究によって⁽⁴⁾、峡江地域では旧石器時代に明確な文化的共通性を持っていたことが分かっている。たとえば石器の原料を収集するにあたっては、その土地の状況に応じた対応をしており、材料を現地で調達している。おおむね附近の河川が上流よりもたらし豊富な河卵石〔河流で丸まった石、river-run gravel。日本では川砂利、河流礫などと呼称する〕を原料としていた。石器の打製方法は、錘撃法〔直接打法、hammering method〕、碰砧法〔台石打法〕、また摔碰法〔投擲法、Throwing against anvil technique〕（すなわち鋭稜砸撃法〔ridged-hammer bipolar flaking。砸撃法とはBipolar methodすなわち両極打法・双極打法を指す。それによって鋭角な先端部を作成する方法〕でもある）である。そして旧石器時代中期に至ると、この地域での石器の打製方法は主に摔碰法となり、この地域で最も特色ある剥片生成技術が形成された〔剥片flakeとは、原石（母岩）を打ち欠いてつくった薄いかげらを指す。原石は大きすぎ小石器をつくる上で不向きであり、剥片を製作した後にそれを素材として打製石器などをつくる場合が多い。これを特に剥片石器と呼ぶ〕。毛坯〔石器製造段階での半加工状態の剥片〕は主に片状毛坯〔半加工状態にする過程ではカタマリ状の塊状毛坯を好む技法とシャープな片状毛坯の技法といった傾向があらわれる〕を選択していた。加工技術はずっと硬錘法〔硬質ハンマーによる直接打撃法〕

二〇一〇年）。江章華「川東長江沿岸先秦考古学文化的初步分析」（『四川文物』二〇〇二年第五期）。鄒后曦・袁東山「重慶峡江地区的新石器文化」（『重慶二〇〇一三峡文物保護學術研討會論文集』科学出版社、二〇〇三年）。白九江「從三峡地区的考古發見看楚文化的西進」（『江漢考古』二〇〇六年第一期）。余静「從近年來三峡考古新發見看楚文化的西漸」（『江漢考古』二〇〇五年第一期）。

⁽³⁾ 武仙竹・裴樹文・鄒后曦・侯江・王運輔「中国山峡地区人類化石的發見与研究」（『考古』二〇〇九年第三期）。

⁽⁴⁾ 高星・裴樹文『三峡遠古人類的足跡——峡江地区旧石器時代考古的發見与研究』（巴蜀書社、二〇一〇年）。

が用いられており、軟錘法〔軟質ハンマーによる直撃加工〕は見られない。道具は砍砸器〔斧〕と刮削器〔スクレイパー、物質の外表面をこそげとる刃状・ヘラ状の器具〕で、晩期になると刮削器が主要な地位を占めた。

全体から見ると、旧石器時代、峡江地域の東西には明確な相違は無く、全て中国南方に共通する旧石器時代の礫石石器〔graveltool、礫石器とも〕の製作系統に属していたものであると思われる。ただ晩期になると刮削器が増加し、小型の道具が比較的多くなっていく。あるいはこれは華北地域の旧石器時代の製作系統との文化交流の結果であるのかもしれない。

鋭稜砸撃法〔鋭角両極打法〕は、峡江地域の新石器時代の石器打製方法のなかで最も特色あふれる方法であり、この地域の打製石器の象徴的ともいえる技術である。この技術は峡江地域にいつ頃誕生したのであろうか。この地域のこの技術は、旧石器時代中期に遡ることが出来るものであろうか。この技術はこの地域で独自に発生したものなのであろうか。学界ではこれら諸問題について多くの意見が出されている。例えば余西雲氏は旧石器時代から峡江地域で発展したものなどではなく、あくまで外来の技術だとしている⁽⁵⁾。李英華氏の研究では、この種の技術は最早期のものとして貴州省〔六盤水市水城県の〕硝灰洞、〔貴州省遵義市普定県の〕白岩脚洞、〔貴州省黔西南布依族苗族自治州興義市の〕猫猫洞や川洞などといった更新世〔Pleistocene、地質時代の区分の一つで、約258万年前から約1万年前までの期間。その時代のほとんどは氷河時代であった〕の晩期の遺物から見られるもので〔湖南省常德市澧県の彭頭山遺跡で発見され文化類型となった〕彭頭山文化でも発見されているという⁽⁶⁾。もしこの研究が確かであるとすれば、峡江地域のこの技術は東から西に伝播したものと考えることができよう。

二 「釜文化」の形成と発展——新石器時代中早期

およそ紀元前5600年から紀元前5000年ごろ、〔湖北省の〕江漢平原の西辺部は〔湖北省宜昌市宜都市の城背溪遺跡から発掘され文化類型となった〕城背溪文化が独占状態にあった。城背溪文化は陶器が〔焼成のあいだに陶器が破裂しないように細砂や石屑あるいは炭を混ぜる〕夾炭の陶器が主であり、一部に〔細砂を混ぜた〕夾砂の陶器と〔中砂性粘土そのままの〕泥質の陶器がある。陶器の表面色は赤や黒であるが、主には紅褐色である。陶器の多くには紋様があり、縄紋が主である。器物はおおむね圈底〔丸底〕である。いくつかは〔円状の足のつく〕圈足器であるが、だいたいは〔口がすぼまり丸底の〕束口圓底釜、罐、〔容器部分の浅い丸底の〕浅腹圓底盤、〔湾曲した台である〕弯身支座、そして圈

⁽⁵⁾ 余西雲『巴史——以三峡考古為証』（科学出版社、二〇一〇年）。

⁽⁶⁾ 李英華・余西雲・侯重梅「關於三峡地区石器工業中的鋭稜砸撃製品」（『第十届中国古脊椎動物学術年會論文集』海洋出版社、二〇〇六年）。

足盆といったものである。これまでの研究からすると、この文化は洞庭湖地域の彭頭山に分布したものが北にむかって発展・進化したものである。現在の考古資料から判断すると、城背溪文化が西側の峡江地域に向かって進出したものと、関中の陝南地域にある〔陝西省漢中市西郷県の李家村遺跡から発掘され文化類型となった〕李家村文化とが会って一つの新しい考古文化、すなわち〔湖北省恩施土家族苗族自治州巴東県の楠木園遺跡で発掘され文化類型となった〕楠木園文化が形成された。この文化の典型的遺跡は陝西〔三峡地域西武〕の〔重慶市〕豊都県の玉溪⁽⁷⁾と峡東〔三峡東部〕の巴東県の楠木園である。この二つの遺跡の陶器は夾砂の陶器が主であり、色は紅褐色で、文様はおおむね縄紋である。器類は圈底〔丸底〕で、圈底釜、罐、〔円状の足がついているように見えながら実は足部が容器の一部となっている〕仮圈足碗、圈足碗、圈底鉢が主である。石器の打製方法はおおむね鋭稜砸撃法〔鋭角両極打法〕と錘撃法〔直接打法、hammering method〕である。二つの遺跡には若干の相違点があり、玉溪遺跡には楠木園遺跡にある支座〔台〕の器物が存在せず、楠木園には玉溪遺跡にある〔口がめくれあがるように広がる〕敞口大盆がないといった相違がある。そのため、学者によっては陝西地域のこの時期の遺跡は独立した玉溪下層文化と命名すべきだとさえ主張する⁽⁸⁾。

現在の考古的発見から見ると、陝西地域では打製石器を特色とする新石器時代の早期遺跡が複数発見されている。例えば〔重慶市〕奉節県の三坨⁽⁹⁾、横路⁽¹⁰⁾、〔重慶市〕万州区の武陵、〔おなじく万州区の〕炳泉院子⁽¹¹⁾、〔重慶市〕奉都県の老鷹嘴や和平村⁽¹²⁾、〔重慶市〕奉節県の魚腹浦⁽¹³⁾や藕塘⁽¹⁴⁾等である。そのうち魚腹浦、藕塘では陶器が発見されている。総体として見れば、これらの遺跡には石器の高い製作技術があり、一部の陶器は原料や制作方法そして器類としての形式がみな峡東地域の城背溪文化や楠木園文化の器類と相似しており、いわば一つの大きな「釜文化」の系統に属するものであり、峡江地域の新石器文化はおそらく外来の文化が東部から進入したもので、この地の旧石器文化が独自に展開した結果ではないと考えられよう。

⁽⁷⁾ 重慶市文物考古所「豊都玉溪遺址発掘簡報」（『重慶庫区考古報告集（一九九九卷）』科学出版社、二〇〇六年）。鄒后曦・袁東山「重慶峡江地区の新石器文化」（『重慶二〇〇一三峡文物保護學術研討會論文集』科学出版社、二〇〇三年）。

⁽⁸⁾ 白九江『重慶地区の新石器文化——以三峡地区為中心』（四川出版集團巴蜀書社、二〇一〇年）。

⁽⁹⁾ 中国科学院古脊椎動物与古人類研究所・重慶市文物局「奉節三坨遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇卷）』上冊、科学出版社、二〇〇七年）。

⁽¹⁰⁾ 三峡旧石器時代考古工作隊「奉節横路遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。中国科学院古脊椎動物与古人類研究所・重慶市文物局・奉節県白帝城博物館「奉節横路遺址考古発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇卷）』上冊、科学出版社、二〇〇七年）。

⁽¹¹⁾ 福建省博物館等「万州炳泉院子遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇一卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

⁽¹²⁾ 衛奇「三峡地区の旧石器」（『中国考古学的世紀回顧——旧石器時代考古卷』科学出版社、二〇〇四年）。

⁽¹³⁾ 中国科学院古脊椎動物与古人類研究所等「奉節魚腹浦遺址旧石器時代考古発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九七卷）』科学出版社、二〇〇一年）。

⁽¹⁴⁾ 山西大学考古学系等「重慶奉節藕塘新石器時代遺址」（『考古与文物』二〇〇九年第五期）。

これまでの研究によれば⁽¹⁵⁾、約紀元前 5000 年主に峡江東部に展開した文化は、峡東地域の城背溪文化が、洞庭湖西北の〔湖南省常德市安郷県で発掘された〕湯家岡文化の一部の要素を受容して、のちに〔湖北省宜昌市秭帰県で発掘された〕柳林溪文化へと発展したものとされる。その文化の典型的な遺跡が秭帰県の柳林溪⁽¹⁶⁾、秭帰県の朝天嘴⁽¹⁷⁾、宜昌市〔夷陵区の〕三斗坪⁽¹⁸⁾、宜昌〔夷陵区の〕楊家湾⁽¹⁹⁾、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の店子頭⁽²⁰⁾、〔重慶市〕巫山県の大溪⁽²¹⁾などである。その文化の陶器は夾砂の紅色陶器が主であり、紋様はおおむね縄紋で、器類は主に円底であり、典型的な器物は〔まっすぐの円柱状の台座である〕直身円柱支座、弯身支座、圓底釜、〔盆のような口が発達する〕盆口罐、圓底鉢、平底鉢、假圈足碗、圈足碗等である。この文化は主に瞿塘峡から西陵峡までの三峡全域に分布している〔長江三峡とは上流からみて白帝城から巫山県大溪までの瞿塘峡、巫山から巴東県官渡口までの巫峡、秭帰から宜昌市夷陵区南津関までの西陵峡の三つの峡谷の総称であり、ここではその三峡すべてに分布していることを示す〕。

白九江氏は玉溪遺跡の下層部を代表とするような文化は現在から 6300 年前まで継続したとしているが、この種の遺跡の公開資料はまだ少ないため、峡西〔三峡地域西部〕の楠木園文化がさらに遅くまで継承されていたかどうか、あるいは何がしかの部分が柳林溪文化と同じものであったのか、現在のところなお判断は難しい状況である。

およそ紀元前 4000 年ごろ、峡東地域〔三峡地域東部〕の柳林溪文化は〔重慶市巫山県で発掘された〕大溪文化へと発展した。その文化の典型的な遺跡は巫山県の大溪⁽²²⁾、〔湖北省〕宜昌市〔夷陵区〕の中堡島⁽²³⁾、〔湖北省〕宜昌市〔夷陵区の〕三斗坪鎮にある〕清水灘⁽²⁴⁾、〔宜昌市の〕秭帰県の何家坪⁽²⁵⁾、台丘⁽²⁶⁾、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の

(15) 羅運兵「試論柳林溪文化」（『二〇〇三三峡文物保護与考古学研究學術研討會論文集』科学出版社、二〇〇三年）。

(16) 王鳳竹・周国平主編『秭帰柳林溪』（科学出版社、二〇〇三年）。

(17) 国家文物局三峡考古隊『朝天嘴与中宝島』（文物出版社、二〇〇一年）。

(18) 湖北省文物考古研究所「一九八五—一九八六年三峡壩区三斗坪遺址発掘簡報」（『江漢考古』一九九九年第二期）。

(19) 宜昌地区博物館「宜昌楊家湾新石器時代遺址」（『江漢考古』一九八四年第四期）。

(20) 湖北省文物考古研究所「巴東店子頭遺址発掘簡報」（『江漢考古』二〇〇四年第三期）。

(21) 重慶市文物考古所等「巫山大溪遺址勘探発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇卷）』科学出版社、二〇〇七年）。鄒后曦・白九江「巫山大溪遺址歴次発掘与分期」（『重慶二〇〇一三峡文物保護學術研討會論文集』科学出版社、二〇〇三年）。

(22) 四川省博物館「巫山大溪遺址第三次発掘」（『考古学報』一九八一年第四期）。重慶市文物考古所等「巫山大溪遺址勘探発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

(23) 国家文物局三峡考古隊『朝天嘴与中宝島』（文物出版社、二〇〇一年）。

(24) 湖北省宜昌地区博物館等「湖北省宜昌県清水灘新石器時代遺址の発掘」（『考古与文物』一九八三年第二期）。武漢大学歴史系考古專業「清水灘遺址一九八四年発掘簡報」（『江漢考古』一九八八年第三期）。

(25) 湖北省文物考古研究所「秭帰何家坪遺址発掘簡報」（『湖北庫区考古報告集（第一卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

(26) 天津市歴史博物館考古部「秭帰台丘遺址発掘報告」（『湖北庫区考古報告集（第一卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

楠木園、〔重慶市〕巫山県の培石⁽²⁷⁾などである。その文化の陶器は泥質と夾砂が主で、陶色はおおむね紅色、紋様は無紋であり、器形は圈足器や圜底器で、その種類は釜・罐・圈足盆・碗・缸・盆・鉢・〔ふたと脚がついて豆の字に似る古代の食器である〕豆・杯・壺・器座・支座などである。大溪文化は西に向かって分布しており、〔文化そのものは〕基本的に〔三峡最西部の〕瞿塘峡を越えることはなかったが、その影響は峡西地域まで及んだ。峡西地域の〔重慶市豊都県の〕玉溪坪文化には〔焼成前に紅色の粘土を衣として付加した〕飾紅陶衣の〔口がすぼまる〕斂口鉢などの大溪文化の器物が存在している。大溪文化は「釜文化」が発展した全盛期にあたるのである。

大溪文化も晩期になると、東の〔湖北省荊門市京山県の〕屈家嶺遺跡で発掘され文化類型となった〕屈家嶺文化の強烈な影響を受け、徐々にその文化は消失していき、一部の文化要素は屈家嶺文化に溶け込んでいった。

屈家嶺遺跡下層の文化は長江に沿って徐々に広がり、〔湖北省中央部の〕江漢平原の西部にやや単純な遺跡を残している。そして三峡に入ってから、徐々に大溪文化に溶け込んでいったのである。もちろん西に行くほど、大溪文化の比重が大きいことはいうまでもない。大溪文化の晩期には、ほとんどすべての遺跡でいささかの屈家嶺下層文化の要素が現われ、そこからは、例えば曲腹杯・圈足罐・圈足壺・高柄豆・簋等が出現した⁽²⁸⁾。

およそ紀元前 2800 年、峡東地域の大溪文化が屈家嶺文化に溶け込んでいき、屈家嶺文化がこの地域を席卷する。典型的な遺跡は〔湖北省〕宜昌市〔夷陵区の〕中堡島、〔おなじく夷陵区の〕清水灘、〔宜昌市〕秭帰県の官庄坪⁽²⁹⁾や倉坪⁽³⁰⁾、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の茅寨子湾⁽³¹⁾や楠木園そして李家湾⁽³²⁾、〔重慶市〕巫山県の大溪などである。屈家嶺文化は東から西に向かって徐々に峡江地域へ浸透していった。峡東地域では幾つかの典型的な屈家嶺文化の墓葬が存在し、例えば宜昌市〔夷陵区覃家沱の〕白獅湾 M4 墓がそれであり⁽³³⁾、おそらく屈家嶺文化の人間が直接進出したことを表している。屈家嶺文化は〔重慶市忠県の〕哨棚嘴遺跡にまで伝播し、ここでも屈家嶺文化に属する彩陶壺が発見されるにいたった。

⁽²⁷⁾ 南京博物院考古部「巫山培石遺址第一次発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九九卷）』科学出版社、二〇〇六年）。南京博物院考古部「巫山培石遺址第二次発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（2000 卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

⁽²⁸⁾ 余西雲『巴史——以三峡考古為証』（科学出版社、二〇一〇年）七七頁。

⁽²⁹⁾ 国務院三峡工程建設委員会辦公室・国家文物局編著『秭帰官庄坪』（科学出版社、二〇〇五年）。

⁽³⁰⁾ 南京大学歴史学系考古教研室「秭帰倉坪遺址発掘報告」（『湖北庫区考古報告集（第一卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

⁽³¹⁾ 国家文物局三峡文物保護領導小組湖北工作站等「湖北巴東茅寨子湾遺址発掘報告」（『考古学報』二〇〇一年第三期）。湖北省文物考古研究所「湖北巴東茅寨子湾遺址第二次発掘」（『湖北庫区考古報告集（第三卷）』科学出版社、二〇〇六年）。

⁽³²⁾ 馮小波主編『巴東李家湾』（科学出版社、二〇〇九年）。

⁽³³⁾ 湖北省文物考古研究所「長江三峡工程壩区白獅湾遺址発掘簡報」（『三峡考古之発見』第二冊、湖北科学技术出版社、二〇〇〇年）。

鄂西地域〔湖北省西部〕においては、屈家嶺文化について〔湖北省の省直轄県級行政区である天門市の石家河遺跡より出土し文化類型となった〕石家河文化が起こったが、石家河文化の峡東地域に対する文化浸透度は屈家嶺文化よりも弱く、峡東地域に石家河文化の典型的な遺跡はなく、よしんば石家河文化の要素があってもその殆どが他の文化要素と共存しているため、峡西地域で石家河文化だけによる影響は殆ど見られない。

ただ、屈家嶺文化が峡東地域に拡大し、以降〔湖北省宜昌市夷陵区で発掘された殷の時代の〕路家河文化が成立するまで、「釜文化」の発展は絶対的な阻害を受け、長きにわたって低迷してしまう。そしてあくまで屈家嶺文化の補助的な成分となってしまったのである。峡東地域の「釜文化」は西から東に向かうほどに阻害の程度が高くなる。とはいえ「釜文化」は屈家嶺文化とそれに続く石家河文化の阻害を受けて低迷しはしたものの、あくまで継続し、中断には到らなかった。これはのちの路家河文化で「釜文化」が中興するための基礎となったのである。屈家嶺文化と石家河文化の峡西地域に対する文化浸透が弱くなっていき、東から西への浸透が次第に衰えると、それと密接に関係するように峡西地域で「罐文化」が形成され発展し、東に向かって広がっていくことになる。

三 「罐文化」の形成と発展——新石器時代中晩期

おおよそ大溪文化の形成が完了したころ、峡西地域では一種の罐・瓶・鉢・盆を特色とする考古学的文化が出現した。これが玉溪坪文化である。白九江氏は玉溪坪文化の前に玉溪上層文化を想定した。これは現在の考古発見から見ると、「玉溪上層文化」と「玉溪坪文化」とでは陶器の材質、器類及び紋様の特徴の差異が少なく、石器の製作も似ていて、全体的に見ると、器物群の特徴の差異は比較的小さい。我々もこの二つが同種の考古学文化、つまり玉溪坪文化であるとする意見に賛同している。その文化の主な遺跡は〔重慶市〕豊都県の玉溪、〔重慶市〕忠県の哨棚嘴⁽³⁴⁾、おなじく忠県の瓦渣地⁽³⁵⁾、杜家院子⁽³⁶⁾、〔重慶市〕万州区の蘇和坪⁽³⁷⁾、涪溪口⁽³⁸⁾などである。その文化の陶器は主として夾砂の陶器で、色は

⁽³⁴⁾ 北京大学考古文博院三峡考古隊等「忠県・井溝遺址群哨棚嘴遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。北京大学考古研究中心等「忠県哨棚嘴遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

⁽³⁵⁾ 北京大学考古系三峡考古隊等「忠県瓦渣地遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽³⁶⁾ 成都市文物考古研究所等「忠県杜家院子遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽³⁷⁾ 重慶市博物館等「万州蘇和坪遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。重慶市文物考古所等「万州蘇和坪遺址第二次発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽³⁸⁾ 福建省考古隊等「万州涪溪口遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。福建省考古隊等「万州涪溪口遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。福建省考古隊等「万州涪溪口遺址第三次発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』

紅褐色と赤が多い。陶器の大部分には紋様があり、線紋や縄紋が流行している。そして多数の器物は〔格子模様である〕稜格紋と〔タガをはめたように見える横線の〕箍帯紋により形成された複合的な紋様をもつ。器類はおおむね花辺口折沿瘦腹罐・卷沿鼓腹罐・小口平底瓶・内折沿鉢・翻折沿盆・厚胎缸等である。現在の考古学的発見から見ると、玉溪坪文化と玉溪下層文化を代表とする遺跡には継承関係がなく、中原の仰韶文化が浸透した結果である。その文化が形成されたのち、大溪文化に一定の影響を与え、さらに峡東地域の屈家嶺文化に重要な影響を与え、巴東県の楠木園、茅寨子湾、李家湾、秭帰県の黄土嘴⁽³⁹⁾、宜昌市〔夷陵区の〕中堡島などの遺跡で、花辺口折沿瘦腹罐・卷沿鼓腹罐・小口平底瓶・内折沿鉢等の典型的な玉溪坪文化遺物が発見された。そこから見ると、屈家嶺文化の時期とは、つまり玉溪坪文化が東へ伝播した時期にあたる。

およそ紀元前 2200 年、玉溪坪文化が中壩文化へと発展した。典型的な遺跡が〔重慶市〕忠県の中壩⁽⁴⁰⁾、哨棚嘴、杜家院子、瓦渣地、〔重慶市〕豊都県の玉溪坪、〔重慶市〕万州区の黄柏溪⁽⁴¹⁾、〔重慶市〕奉節県の老関廟⁽⁴²⁾、〔重慶市〕巫山県の鎖龍⁽⁴³⁾、大溪などである。その文化は〔三峡西部である〕瞿塘峡より西の峡西地域に主として分布していた。その陶器は夾砂の陶器が主であり、陶色は早期には灰陶であるが晩期にかけて紅褐陶が主となり、紋様は縄紋を相互に交差させる〔菱形で格子状となる〕菱格紋が多い。器類は主に大口缸・盆口罐で、ほかにまた折沿罐・卷沿罐・高領罐・鉢・器蓋等がある。

石家河文化の衰亡に続き、北方の〔河南省汝州市の煤山遺跡で発掘された文化類型の〕煤山文化が鄂西峡東地域に浸透し、〔湖北省宜昌市宜都市の〕石板巷子文化が形成された。代表的な遺跡は宜都市の石板巷子、茶店子、王家渡、蔣家橋などとなる⁽⁴⁴⁾。陶器で一番多いのは泥質の陶器で、その次が夾砂の陶器である。陶色は灰陶と黒陶とが多い。基本的な紋様は〔正方形の格子模様である〕方格紋と〔打ち寄せる波のような〕藍紋である。器形

科学出版社、二〇〇六年)。

⁽³⁹⁾ 湖北省文物考古研究所「秭帰黄土嘴遺址考古発掘簡報」(『湖北庫区考古報告集』第二卷、科学出版社、二〇〇五年)。

⁽⁴⁰⁾ 四川省文物考古研究所等「忠県中壩遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。四川省文物考古研究所等「忠県中壩遺 II 区発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。四川省文物考古研究所等「忠県中壩遺址一九九九年度発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁴¹⁾ 重慶市博物館等「万州黄柏溪遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。重慶市文化局等「万州黄柏溪遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

⁽⁴²⁾ 吉林大学考古学系「四川奉節老関廟遺址第一・二次発掘」(『江漢考古』一九九九年第三期)。吉林大学考古学系等「奉節老関廟遺址第三次発掘」(『四川考古報告集』文物出版社、一九九八年)。

⁽⁴³⁾ 成都市文物考古工作隊等「巫山鎖龍遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。成都市文物考古工作隊等「巫山鎖龍遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽⁴⁴⁾ 宜都考古発掘隊「湖北宜都石板巷子新石器時代遺址」(『考古』一九八五年第十一期)。湖北省文物考古研究所「宜都城背溪」(文物出版社、二〇〇一年)。

は鼎・釜・高領鼓腹罐・深腹罐・甕・豆・皿・杯・器のフタが多い。

中壩文化が峡西地域で形成され、のちに東へ浸透していき、石板巷子文化の要素が西に伝わり、二者の相互作用によって、峡東地域で新しい考古文化、すなわち〔湖北省宜昌市夷陵区で発掘された〕白廟文化が形成された。主な遺跡は宜昌市〔夷陵区の〕白廟⁽⁴⁵⁾、大坪⁽⁴⁶⁾、〔宜昌市〕秭帰県の柳林溪、廟坪、官庄坪などとなる。陶器はおおむね夾砂の陶器で、褐陶の数が多い。また無紋器も多いが、紋様があればそれはおおむね縄紋と方格紋などである。器類は深腹罐の数が一番多く、また甕・鼎・碗・豆・器のフタ等がある。これまで多くの学者が白廟文化と石板巷子遺跡を同じ考古文化に分類してきたが、于孟洲氏は「石板巷子の遺物の炊器は鼎と釜を主としているのに対して、白廟の遺物は深腹罐が主であって鼎と釜の数はとても少ない」と指摘した。この指摘から考えると、白廟遺跡と石板巷子遺跡との弁別には道理がある。とすれば、当時の中壩文化の東への浸透、また石板巷子の文化の西への浸透といった現象があったことを大きく反映するものであったといえよう。なお、石板巷子文化と比較すれば、白廟文化では「罐文化」の伝統が優勢である。

総体として見ると、峡西地域では罐を特色とする玉溪坪文化が発生し、そして「罐文化」の伝統は徐々に東へ浸透、峡東地域の「釜文化」の系統と争った。そして白廟文化の時期に至って、峡江東部地域は基本的に「罐文化」の系統に入ったのである。ただし、峡東地域から東に向かえば向かうほど、「罐文化」の特徴は弱くなっていき、かわって「釜文化」の系統は強くなっていく。そして「罐文化」の系統が中壩文化の時期に全盛期となると、その後に三星堆文化が峡江地域へ広がり浸透してくる。ここで峡東地域では〔湖北章秭帰県茅坪鎮の朝天嘴遺跡で発掘された〕朝天嘴文化が出現し、峡西地域では〔重慶市万州区中壩子で発掘された〕中壩子文化が出現した。この二つの考古文化でも「罐文化」は継続していたものの、もはや峡江地域に特徴的な文化伝統ではなくなったのであった。

四 三星堆文化の東への広がり —— 夏商時代

夏代の晩期には、〔四川省成都市新津県で発掘された〕宝墩文化から発展した〔四川省徳陽市広漢市で発掘された〕三星堆文化が東に向かって大規模に広がって浸透していく。そのなかで峡西地域の中壩文化は中壩子文化へと発展したのである。典型的な遺跡として

⁽⁴⁵⁾ 湖北宜昌地区博物館等「湖北宜昌白廟遺址試掘簡報」（『考古』一九八三年第五期）。三峡考古隊「湖北宜昌白廟遺址一九九三年発掘簡報」（『江漢考古』一九九四年第一期）。

⁽⁴⁶⁾ 三峡考古隊「宜昌大坪遺址発掘簡報」（『江漢考古』一九九四年第一期）。

〔重慶市〕万州区の中壩子⁽⁴⁷⁾、巴豆林⁽⁴⁸⁾、〔重慶市〕雲陽県の伍家湾⁽⁴⁹⁾、〔重慶市〕忠県の老鴉沖⁽⁵⁰⁾、哨棚嘴、中壩、〔重慶市〕涪陵区の蘭市⁽⁵¹⁾などがある。

この文化の陶器は夾砂の陶器を主としており、陶器の色は混ざり合ったような色であるが、多くは紅褐色や灰色の陶器である。陶器は無紋のものが多く、紋様があれば縄文が主である。陶器の種類は、深腹罐・小平底罐・灯形器・器蓋・尖底杯・豆・觚・鳥頭把勺などである。そのうち、小平底罐・灯形器・鳥頭把勺・器蓋は典型的な三星堆文化の要素を持ち、中壩子文化の中でも数が多い。深腹罐・尖底杯などの陶器の紋様のついた縁取りは中壩文化の伝統を継承しているけれども、この伝統は三星堆の文化要素には及ばない。ここから見ると、三星堆文化は峡江地域の罐文化の伝統に対して深い影響を与えた。

三星堆文化の峡西地域の文化に対する浸透は峡江地域へのそれよりも遥かに深い。三星堆文化の浸透によって、峡東地域の白廟文化は朝天嘴文化へと変化した。典型的な遺跡としては、朝天嘴、何光嘴⁽⁵²⁾、宜昌中堡島、巴東楠木園などがある。この文化の陶器は夾砂黒皮褐胎陶を主とする。陶器は無紋で、部分的に磨かれていた。紋様は縄文を主とする。陶器の種類は、小平底罐・灯形器・鳥頭把勺・深腹罐・浅腹罐・大口缸・鬻・盃などがある。そのうち、小平底罐・灯形器・豆・鳥頭把勺・器蓋が典型的な三星堆文化の構成要素であり、数が一番多く、重要な位置を占める。深腹罐・浅腹罐・矮領甕などの文化要素はその淵源をこの地に存在した以前の白廟文化に求めることができ、数量も多く、また重要な位置を占めている。総体的に見れば、この地域で保持された「罐文化」の伝統は中壩子文化よりも強いといえよう。とはいえ三星堆文化が朝天嘴文化へ与えた影響もまた依然としてとても深刻なもので、「罐文化」の伝統の継続と発展へ混乱をきたすこととなった。

三星堆文化はあたかも台風のように西から東へ峡江全域を席卷し、台風の中心部ともいえる〔四川省中央部の〕成都平原に近い地域に近ければ近いほど文化的浸透力も強く、三星堆文化の要素は色濃く反映されている。三星堆文化というその台風は、峡江全域を席卷するだけでなく、鄂西地域〔湖北省西部〕にまで影響を及ぼすこととなった。例えば、〔湖

⁽⁴⁷⁾ 西北大学考古隊等「万州中壩子遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。西北大学考古隊等「万州中壩子遺址東周時期墓葬発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇一年)。西北大学考古隊等「万州中壩子遺跡第三次発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。西北大学考古隊等「万州中壩子遺跡第四次発掘簡報」(『文博』二〇〇二年第三期)。

⁽⁴⁸⁾ 重慶市文物考古研究所等「万州巴豆林遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁴⁹⁾ 内蒙古文物考古研究所等「雲陽伍家湾遺址二〇〇一年度発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁵⁰⁾ 重慶市文物考古研究所等「忠県老鴉沖遺址(居址部分)発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁵¹⁾ 重慶市文物考古研究所等「涪陵蘭市遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

⁽⁵²⁾ 張万高編集『秭婦何光嘴』(科学出版社、二〇〇三年)。

北省荆州市の〕荆南寺の遺跡⁽⁵³⁾では小平底罐・灯形器・高柄杯・凸肩杯・器蓋などの三星堆文化の要素が発見されている。

総体からみれば、三星堆文化は峡江地域の文化に深く浸透していき、この地域の「罐文化」が途絶したわけではないものの、「罐文化」の伝統を継承するうえで大きな混乱が発生したのである。三星堆文化の到来により「罐文化」の地位は第二位に退くこととなり、以降は当地での文化的発展の主導権を握ることはなかったのである。

〔東からきた〕屈家嶺文化が西の峡江地域に入って以降、峡江地域の新石器時代の初期および中期から栄えていた「釜文化」の伝統は大きく阻害され、「釜文化」の伝統は低迷していくこととなった。その後、〔さらに西からきた〕三星堆文化は東の峡江地域に入って、一層「釜文化」の伝統の継承や発展に混乱をもたらした。しかし、「釜文化」の伝統はそれでも途絶することはなく、であればこそ三星堆文化が峡江地域から薄れていくにしたがって、「釜文化」が峡江地域で復興する可能性を残しえたのである。そして殷代も末期になると、「釜文化」を特色とする路家河文化が形成され、隆盛を誇ったのであった。

五 「釜文化」の復興と西への移動——商の晩期から春秋早期まで

殷の末期には、峡東地域の朝天嘴文化は路家河文化へと発展した。典型的な遺跡としては、〔湖北省〕宜昌市〔夷陵区の〕路家河⁽⁵⁴⁾、鹿角包⁽⁵⁵⁾、三斗坪⁽⁵⁶⁾、楊家嘴⁽⁵⁷⁾、〔湖北省宜昌市の〕秭帰県の柳林谿、廟坪、卜莊河⁽⁵⁸⁾、長府沱⁽⁵⁹⁾、渡口⁽⁶⁰⁾、王家壩⁽⁶¹⁾、何家大溝⁽⁶²⁾、石門嘴⁽⁶³⁾、何光嘴、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の茅寨子湾、鴨子嘴⁽⁶⁴⁾、楠木園、奉節新浦⁽⁶⁵⁾、〔重慶市〕万州区の蘇和坪などがある。この文化の陶器は夾砂の褐陶が主で

⁽⁵³⁾ 何弩「荆南寺遺址夏商時期依存分析」(『考古学研究』第二冊、北京大学出版社、一九九四年)。

⁽⁵⁴⁾ 長江水利委員会『宜昌路家河——長江三峡考古發掘報告』(科学出版社、二〇〇二年)。

⁽⁵⁵⁾ 湖北省文物考古研究所三峡考古隊「湖北宜昌市鹿角包遺址發掘簡報」(『考古』二〇〇二年第七期)。

⁽⁵⁶⁾ 湖北省文物考古研究所「一九八五——一九八六年三峡壩区三斗坪遺址發掘簡報」(『三峡考古之發見』第二冊、湖北科学技術出版社、二〇〇〇年)。

⁽⁵⁷⁾ 三峡考古隊第三小組「湖北宜昌楊家嘴遺址發掘」(『江漢考古』一九九四年第一期)。

⁽⁵⁸⁾ 盧德佩・王志琦編集『秭帰卜莊河』(科学出版社、二〇〇八年)。

⁽⁵⁹⁾ 宜昌市博物館「三峡庫秭帰長府沱商代遺址發掘」(『三峡考古之發見』第二冊、湖北科学技術出版社、二〇〇〇年)。宜昌市博物館「秭帰長府沱商代遺址發掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第一卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽⁶⁰⁾ 宜昌市博物館「秭帰渡口遺址發掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第一卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽⁶¹⁾ 湖北省文物考古研究所「秭帰王家壩遺址發掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第一卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽⁶²⁾ 広東省文物考古研究所「秭帰何家大溝遺址の發掘」(『湖北庫区考古報告集(第三卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

⁽⁶³⁾ 吉林大学遼疆考古研究中心等「湖北秭帰石門嘴遺址發掘」(『考古学報』二〇〇四年第四期)。

⁽⁶⁴⁾ 湖北省文物考古研究所「巴東鴨子嘴遺址(西区)發掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第二卷)』科学出版社、二〇〇五年)。

⁽⁶⁵⁾ 吉林大学考古学系「四川奉節新浦遺址發掘報告」(『考古』一九九九年第一期)。吉林大学考古学系等「奉

あり、大部分は縄文である。陶器の形はおおむね圓底器で、主なものは釜である。それ以外に、小平底罐・灯形器・大口缸・深腹罐、高領罐・簋・豆などの陶器も存在する。路家河文化の特徴はなによりも釜の数が多きことにある。路家河遺跡でこの文化に属する路家河遺跡の第二期にあたる夾砂の褐陶の釜（釜のような形の小さい罐も含む）は総数が63.53%を占めるほどである。

路家河文化は釜文化が復興した時期にあたる。三星堆文化が西に縮退するにしたがって、路家河文化が形成され、そののち西に浸透し、典型的な路家河文化遺跡は〔長江三峡の西部にあたる〕瞿塘峡を超えて、峡西地域に入った。はなはだしい事例では遠く〔重慶市豊都県の〕石地壩遺跡にすら路家河文化の典型的な要素である縄紋釜・方格紋釜・鼓肩罐・盆などを見ることができる。

路家河文化が西へ広がり浸透するなかで、峡西地域の中壩子文化は石地壩文化へと変成した。典型的な遺跡は、〔重慶市〕豊都県の石地壩⁽⁶⁶⁾、〔重慶市〕忠県の哨棚嘴、鄧家沱⁽⁶⁷⁾、〔重慶市〕涪陵区の鎮安⁽⁶⁸⁾、石沱⁽⁶⁹⁾、蘭市などである。この文化の陶器は夾砂の陶器が泥質の陶器より若干多く、陶器の色は「斑駁不純」〔ある色のなかに別の色が混ざりこみマダラになっている〕である。泥質陶は〔表層を黒色粘土で覆って焼成する〕黒皮陶が多い。紋様は縄文と方格紋が主である。陶器の種類は小平底罐・尖底器・釜・高領罐・大口缸などが主である。そのうち路家河文化に属する釜や大口缸の数が多く、路家河文化がこの文化に深い影響を及ぼしていることが分かる。

おおよそ春秋中晩期になると、峡西地域の石地壩文化は瓦渣地文化に発展した。典型的な遺跡としては、〔重慶市〕忠県の瓦渣地、中壩、哨棚嘴、〔重慶市〕豊都県の石地壩、玉

節新浦遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（一九九七巻）』科学出版社、二〇〇一年）。吉林大学考古学系等「奉節新浦遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（一九九八巻）』科学出版社、二〇〇一年）。吉林大学考古学系等「奉節新浦遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（一九九九巻）』科学出版社、二〇〇六年）。吉林大学边疆考古研究中心等「奉節新浦遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇巻）』科学出版社、二〇〇七年）。吉林大学边疆考古研究中心等「奉節新浦遺址二〇〇一年発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇一卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

⁽⁶⁶⁾ 四川省文物考古研究所「豊都県三峡工程淹没区調査報告』（『四川考古報告集』文物出版社、一九九六年）。重慶市文物考古研究所等「豊都石地壩遺址商周時期遺存発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（一九九九巻）』科学出版社、二〇〇六年）。重慶市文物考古研究所等「豊都石地壩遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇一卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

⁽⁶⁷⁾ 李鋒「忠県鄧家沱遺址西周時期文化遺存的初歩認識」（『重慶二〇〇一三峡文物保護學術研討會論文集』、科学出版社、二〇〇三年）。

⁽⁶⁸⁾ 北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（一九九八巻）』科学出版社、二〇〇三年）。北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（一九九九巻）』科学出版社、二〇〇六年）。北京市文物研究所等「二〇〇一・二〇〇三年度涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇一卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

⁽⁶⁹⁾ 北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（一九九七巻）』科学出版社、二〇〇一年）。北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（一九九八巻）』科学出版社、二〇〇三年）。北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇巻）』科学出版社、二〇〇七年）。

溪、〔重慶市〕万州区の麻柳沱⁽⁷⁰⁾、巴豆林、大坪⁽⁷¹⁾、黄陵嘴⁽⁷²⁾、〔重慶市〕雲陽県の李家壩⁽⁷³⁾、〔重慶市〕奉節県の老油坊などがある。この文化は主として奉節県の西の峡西地域に分布している。陶器は夾砂の陶器が主であり、色は紅褐色が多い。紋様はおおむね縄文である。器類は〔紋様のついた縁取りの〕花辺口圜底釜・〔縁取りの無い〕素縁口圜底釜・角状尖底杯などである。これは石地壩文化から継承された要素である。ただ同時にこの文化の中には一定量の柱足陶鬲や甗など楚文化の要素もあった。すなわち明らかに楚文化と巴文化は峡西地域で共存していたのである。考古発見から見ると、東に近ければ近いほど、楚文化の要素も濃くなる傾向にある。

総体的に見れば、この時期に釜を主な特徴とする路家河文化が形成され、西に向かって文化が浸透していき、石地壩文化へと痕跡が残された。路家河文化は峡西地域を經由して西の成都平原へと浸透していった。路家河文化が流入したことで、成都平原の三星堆文化は〔四川省成都市青羊区で発掘された〕十二橋文化へと発展した。しかも路家河文化はこうして西に向かって文化を浸透させただけでなく、北の地域にも文化を強く浸透させていった。というのも陝南地域〔陝西省南部〕では路家河文化と密接に関係がある〔陝西省漢中市城固県から発掘された〕宝山文化が形成されており、ある学者は宝山文化が路家河文化と同種の文化であったとすら言うのである。路家河文化が興起してから鬲を特色とする周王朝時代の文化（楚文化）が流入するまで、峡西地域は「釜文化」が分布する地域となり、「釜文化」は再び峡西地域の最も際立った文化的象徴となり、さらには巴人のシンボルともなったのである。

六 廟坪類型文化の興起と楚文化の西伝——西周晩期から戦国まで

おおむね西周の中期から晩期にあたるころ、峡東地域には新しい考古文化、すなわち〔湖北省宜昌市秭帰県に発掘された〕廟坪系の文化が興起した。この種類の遺跡として、おも

⁽⁷⁰⁾ 上海大学文物考古研究中心等「万州麻柳沱遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。重慶市博物館等「万州麻柳沱遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽⁷¹⁾ 盛定国編集『万州大坪墓地』(科学出版社、二〇〇六年)。

⁽⁷²⁾ 広西壮族自治区文物工作隊等「万州黄陵嘴遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁷³⁾ 四川聯合大学歴史考古專業「一九九四—一九九五四川雲陽李家壩遺址の発掘」(『四川大学考古專業創建三十五周年記念文集』四川大学出版社、一九九八年)。四川大学歴史文化学院考古系等「雲陽李家壩東周墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。四川大学歴史文化学院考古系等「雲陽李家壩一〇号岩坑墓発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。四川大学歴史文化学院考古系等「雲陽李家壩巴人墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。四川大学歴史文化学院考古系等「雲陽李家壩遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

なものに〔重慶市〕巫山県の双堰塘⁽⁷⁴⁾、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の黎家沱⁽⁷⁵⁾、おなじく巴東県の雷家坪、〔湖北省宜昌市の〕秭帰県の廟坪⁽⁷⁶⁾、官莊坪⁽⁷⁷⁾、柳林溪⁽⁷⁸⁾、何家坪⁽⁷⁹⁾などが挙げられ、〔長江三峡の東部にあたる〕西陵峡の西段にある〔宜昌市秭帰県香溪鎮で長江に合流する〕香溪河の寛谷〔合流地点で峡谷がやや広くなる部分〕から〔重慶市巫山県で長江に合流する〕大寧河の寛谷までに集中的に分布している。これまで発見されたなかで最も西の遺跡は巫山県の双堰塘遺跡となる。この遺跡の陶器としては夾砂の陶器が最も多い。陶器の色は均一ではなく、赤褐色陶、灰褐陶、灰黒褐陶などが存在する。紋様は多様であるが、縄文、〔削って描き出す〕刻劃紋、〔粘土を付け足して描く〕附加堆紋などが主となる。陶器の種類は釜・鬲・豆・盆・鉢・簋・碗・尖底盃・疊・壺・甕・缸・彈丸・紡輪などがある。これらの遺跡のなかで最も目立つ特徴は、陶鬲の数が多いことである。柱足は楚の様式の鬲の典型的な特徴を示している。この他の豆や盆はみな楚文化の器物の組み合わせとなっている。これらの遺跡の中で、釜・花辺口罐、〔縁取りの無い円形の底の〕素縁圓底罐、〔腹部の膨らんだ底の尖った〕鼓腹尖底杯、〔細い底の〕小底罐、〔円形の底の〕圓底鉢などは、路家河文化の要素が継承されたものである。総合して見れば、この地域の遺跡は、西に行けばいくほど当地の伝統文化の要素が濃くなっていく。たとえば双堰塘遺跡では、地元の文化要素が一番重要な位置を占めている。研究者たちはこれらの遺跡が古代の夔国の文化遺跡であると考えている。これまでの発見から、西周の中期から晩期そして春秋早期にいたるまで、〔長江三峡の東部と中部にあたる〕西陵峡さらに巫峡の地域は全て「鬲文化」が分布した地域と考えることができよう。

総合的に見ると、廟坪系の文化の中で「釜文化」は依然として継承されたが、東方からの「鬲文化」の強い影響を受け、「釜文化」は峡東地域で第二の地位に退いていった。「釜文化」を典型的な特徴とする石地壩文化が峡西地域で興起したことを考慮すれば、峡江地区の「釜文化」はほぼ西周中晩期から始まる東の「鬲文化」によって排斥され、西に縮退していったのであろう。廟坪系文化の興起は峡江地域の「釜文化」の継承に間違いなく混乱をもたらし、「釜文化」が当地で発展していく上でまたも大きな影響を受けた。すなわち廟坪系文化の興起は疑いなく峡江地域における文明の発展過程を変えていった。

⁽⁷⁴⁾ 中国社会科学院考古研究所長江三峡考古隊等「巫山双堰塘遺址報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。中国社会科学院考古研究所長江三峡考古隊等「巫山双堰塘遺址報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

⁽⁷⁵⁾ 中山大学人類学系等「巴東黎家沱遺址二〇〇〇年度発掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第一卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽⁷⁶⁾ 孟華平・周国平編集『秭帰廟坪』(科学出版社、二〇〇三年)。

⁽⁷⁷⁾ 湖北省文物考古研究所「秭帰官莊坪遺址試掘簡報」(『江漢考古』一九八四年第三期)。

⁽⁷⁸⁾ 王鳳竹・周国平編集『秭帰柳林溪』(科学出版社、二〇〇三年)。

⁽⁷⁹⁾ 湖北省文物考古研究所「秭帰何家坪遺址発掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第一卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

宜昌市〔夷陵区〕路家河、朱家台⁽⁸⁰⁾、〔宜昌市〕秭帰県の官荘坪、渡口、〔湖北省恩施土家族苗族自治州〕巴東宝塔河⁽⁸¹⁾、〔重慶市〕巫山県の塗家壩⁽⁸²⁾、跳石⁽⁸³⁾などの遺址から出土した遺物から見れば、それらの遺跡の出土文物は主として鬲・盂・罐・豆・鉢・盆・壺・甕・缸などである。その中の鬲・盂・豆・罐・盆・甕などは同時期の〔湖北省荊州市〕江陵県のあたりや〔その近傍で楚の都の郢の故城である〕紀南城周辺の器物に非常に似ている。この点から見れば、春秋中期の初め、典型的な楚文化は峡江地域に自らの文化範囲を広げ、湖北の西部地域を支配するだけではなく、戦国早期までに、瞿塘峡とその東の地域も支配下に組み込んでいったのである。楚文化はより西の地域に浸透していき、〔重慶市〕奉節県の新鋪遺跡⁽⁸⁴⁾、老油坊⁽⁸⁵⁾などの遺跡からは鬲・盆・豆・罐などの楚文化の要素が発見された。雲陽県の李家壩、旧県坪⁽⁸⁶⁾などの遺跡でも少量の鬲・甗などの楚文化の要素が発見された。より西の〔重慶市〕万州区の麻柳沱遺跡⁽⁸⁷⁾でも鬲・甗などの楚文化の要素が発見された。楚文化の要素は当地の文化に融合していった。〔重慶市〕万州区より以西の地域になると楚文化要素はほぼ見られなくなる。ただし、〔重慶市〕忠県の中壩遺跡、〔重慶市〕豊都県の玉溪坪遺跡、秦家院子遺跡にだけは、わずかに鬲足・暗紋陶豆・折沿盆・暗紋束頸膨腹甕などの楚文化に特徴的な陶器が発見されている。

現在までに峡江地域で数多くの戦国時代の墓葬が発見されているが、典型的なものとして、〔宜昌市〕秭帰県の官荘坪、卜荘河、何家大溝、〔湖北省恩施土家族苗族自治州〕巴

⁽⁸⁰⁾ 湖北省博物館三峡考古隊第三組「宜昌朱家台遺址試掘」（『江漢考古』一九八九年第二期）。

⁽⁸¹⁾ 武漢大学考古学系等「巴東県宝塔河遺址東周遺存」（『江漢考古』二〇〇七年第一期）。

⁽⁸²⁾ 中山大学人類学系「巫山塗家壩遺址発掘報告」（『重慶庫区考古発掘報告集（二〇〇〇卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

⁽⁸³⁾ 南京博物院考古研究所等「巫山跳石遺址発掘報告」（『重慶庫区考古発掘報告集（一九九七卷）』科学出版社、二〇〇一年）。南京博物院考古研究所等「巫山跳石遺址第二次発掘報告」（『重慶庫区考古発掘報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

⁽⁸⁴⁾ 吉林大学考古学系等「奉節新鋪遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九七卷）』科学出版社、二〇〇一年）。吉林大学考古学系等「奉節新鋪遺址発掘簡報」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。吉林大学考古学系等「奉節新鋪遺址発掘報告」（『三峡考古之発見』第二冊、湖北科学技术出版社、二〇〇〇年）。

⁽⁸⁵⁾ 吉林大学考古学系等「奉節老油坊遺址考古発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

⁽⁸⁶⁾ 黒竜江省文物考古研究所等「雲陽県旧県坪遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

⁽⁸⁷⁾ 上海大学文物考古研究中心等「万州麻柳沱遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九七卷）』科学出版社、二〇〇一年）。重慶市博物館等「万州麻柳沱遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

東県の宝塔河⁽⁸⁸⁾、仁家坪⁽⁸⁹⁾、〔重慶市の〕巫山県の高唐観⁽⁹⁰⁾、瓦岡槽⁽⁹¹⁾、水田湾⁽⁹²⁾、土城坂⁽⁹³⁾、秀峰一中⁽⁹⁴⁾、〔重慶市の〕奉節県の瞿塘関⁽⁹⁵⁾、魚腹浦⁽⁹⁶⁾、宝塔坪⁽⁹⁷⁾、上関⁽⁹⁸⁾、〔重慶市の〕雲陽県の李家壩、故陵⁽⁹⁹⁾、馬沱⁽¹⁰⁰⁾、馬糞沱⁽¹⁰¹⁾、〔重慶市の〕万州区の中壩子、大坪、〔重慶市の〕開県の余家壩⁽¹⁰²⁾、〔重慶市の〕忠県の羅家橋⁽¹⁰³⁾、崖脚⁽¹⁰⁴⁾などがある。これらの発見から見ると、ほぼ戦国時代中期より、楚文化は徐々に峡西地域に向かって浸透していき、西のかた遠く忠県一帯にまで浸透していった。ただし、当時の楚文化はこの地域から巴文化を排斥することもなく、巴文化と融合し共存したのである。例えば、〔重慶市〕雲陽県の李家壩墓葬群では墓中に多くの楚文化の要素が出土されており、甚だしいものでは楚文化の要素を主体としている墓も存在していた。しかし、青銅器と兵器の上の紋様はあくま

⁽⁸⁸⁾ 武漢大学考古系等「巴東県宝塔河遺址東周遺存」(『江漢考古』二〇〇七年第一期)。

⁽⁸⁹⁾ 岳陽市文物考古研究所等「巴東仁家坪遺址二〇〇二年発掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第三卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

⁽⁹⁰⁾ 湖南省文物考古研究所等「巫山高唐観墓群発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁹¹⁾ 南京博物院考古研究所等「巫山瓦岡槽墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。武漢市文物考古研究所等「巫山瓦岡槽墓地二〇〇一年度発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁹²⁾ 重慶市文物考古所等「巫山水田湾東周・両漢墓葬発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁹³⁾ 武漢市文物考古研究所等「重慶巫山土城坂墓地二〇〇四年発掘簡報」(『江漢考古』二〇〇九年第二期)。武漢市文物考古研究所等「重慶巫山土城坂墓地二〇〇六年発掘簡報」(『四川文物』二〇〇八年第三期)。

⁽⁹⁴⁾ 河南文物考古研究所等「巫山秀峰一中戦国・両漢墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁹⁵⁾ 重慶市文物考古所等「奉節瞿塘関発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

⁽⁹⁶⁾ 中国歴史博物館等「奉節魚腹浦遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽⁹⁷⁾ 吉林大学边疆考古研究中心等「奉節宝塔坪墓葬群戦国・漢代墓葬発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。吉林大学边疆考古研究中心等「奉節宝塔坪遺址二〇〇三年発掘報告」(『江漢考古』二〇〇五年第四期)。

⁽⁹⁸⁾ 重慶市文物考古所「奉節上関遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽⁹⁹⁾ 中国歴史博物館故陵考古隊等「雲陽故陵楚墓発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽¹⁰⁰⁾ 鄭州市文物考古研究所等「雲陽馬沱墓地二〇〇一年度発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

⁽¹⁰¹⁾ 鄭州市文物考古研究所「重慶市雲陽県馬糞沱墓地二〇〇二年度発掘簡報」(『文物』二〇〇四年第十一期)。

⁽¹⁰²⁾ 山東大学考古学系「四川開県余家壩戦国墓葬発掘簡報」(『考古』一九九九年第一期)。山東大学東方考古研究中心等「重慶市開県余家壩墓地二〇〇二年発掘簡報」(『江漢考古』一九九九年第一期)。

⁽¹⁰³⁾ 成都文物考古研究所等「重慶市忠県羅家橋戦国秦漢墓地第一次発掘報告」(『成都考古発見(二〇〇一)』科学出版社、二〇〇三年)。成都文物考古研究所等「重慶市忠県羅家橋戦国秦漢墓地第二次発掘報告」(『成都考古発見(二〇〇一)』科学出版社、二〇〇三年)。

⁽¹⁰⁴⁾ 北京大学考古文博学院三峡考古隊等「忠県崖脚墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

でみな巴文化のものを採用していたため、一般に研究者はこの墓を巴人の墓と考えているのである。こうした楚文化要素を持つ墓はただ雲陽県で発見されただけではなく、もっと西の忠県でも発見されている。例えば、忠県の崖脚墓地では大規模な楚文化の墓が発見された。忠県以西の地域では楚文化の要素はほぼ見られない。ここから見れば、戦国時代中期以後に楚文化の峡江地域文化への拡大は、もっとも遠くて忠県一帯にまで及ぶものであったと考えられよう。だが、その後ほどなくして秦は峡江地域を併呑し、その後に秦が滅亡し〔漢が中国を統一し〕漢文化が興起すると、この地域は漢文化の中の一つの分布地域となったのであった。

七 結 語

以上の分析から、峡江地域の先秦時代の文明の発展過程および東西地域の文化交流は、おおむね「一つの技術、二つの伝統、三つの衝撃」として概括することができよう。

このうち「一つの技術」とは、石器剥片の一つの技術、すなわち「鋭稜砸撃法」〔鋭角両極打法〕である。

ほぼ旧石器時代中期あるいは晩期の開始したころ、峡江地域には特色的な剥片石器の技術「鋭稜砸撃法」が出現した。この技術はすぐに峡江地域で先秦時代を通じて最も重要で特色のある剥片石器作成技術となった。それ以後、峡江地域の文化に変化が生じて、この技術はずっと継承されていった。この技術が出現し、また長期的に峡江地域で継続した原因は恐らくこの地域には河川のもたらした大量の河卵石〔河流で丸まった石、river-run gravel〕が存在したからである。

また「二つの伝統」とは、「釜文化」と「罐文化」の伝統である。

ほぼ新石器時代中期、城背溪文化は峡江地域に沿って西へ伝播し、楠木園文化を形成した。そののち、「釜文化」の伝統は峡江地域で発展して継承されていった。だが、屈家嶺文化が発生し西進して峡江地域に入り、釜文化の発展は影響を強く受けることとなった。それ以降「釜文化」は衰退し、主導的地位を明け渡したのである。ただし峡江地域から「釜文化」の伝統が消えたことは一度もなく、ずっと継続したのである。殷代の晩期に路家河文化が形成されると、「釜文化」は復興し、再び峡江地域の特色ゆたかな文化となった。その伝統は、東部からの楚文化の進入にしたがって西へと移動し、縮退しながらも戦国期に峡西地域で楚文化要素と共存していった。最後に秦が峡江地域を併呑し秦が滅亡、漢の文化が興起すると、「釜文化」の伝統もまた漢文化へと混淆していったのである。

また、もうひとつの伝統は「罐文化」である。〔河南省三門峡市陝県から出土した〕中原の廟底溝文化の影響のもとで大溪文化が形成された頃、峡江地域では「罐文化」を主たる特色とする文化が形成され始めた。この文化は西から東にむかって拡張し発展していく。そして三星堆文化が東進してくると大きな衝撃を受け、「罐文化」の伝統は三星堆文化の

拡大によってその継承発展が混乱していった。ただし、「釜文化」と同様に衝撃を受けても途絶することはなく、その地位を以前と比べ低下させながらも、その後の文化へと継続していったのであった。

また「三つの衝撃」とは、屈家嶺文化が峡江地域に広がり浸透したこと、三星堆文化が峡江地域に広がり浸透したこと、周楚文化が峡江地域に広がり浸透したことを指す。

屈家嶺文化が峡江地域に広がり浸透したことで、峡江地域の「釜文化」伝統の継続と発展は妨げられ混乱し、繁栄していた「釜文化」は衰退した。また三星堆文化は峡江地域の「罇文化」の伝統の継続と発展を妨げ混乱させ、かつて非常に繁栄していた「罇文化」も衰退した。ただし、三星堆文化は〔もともとの本拠地である〕西へ縮退していくと、「釜文化」へ〔復興できる〕“条件”を提供した。そして周楚文化が峡江地域に広がり浸透するとともに、復興した「釜文化」は今度は西遷し、鬲を最も特色とする楚文化と峡西地域に共存することとなった。周楚文化の西進は峡江地域の全体の文化構造を変えることとなり、最後に秦帝国による短期の中国統一と漢文化の形成により、峡江地域は漢文化の範疇に組み入れられたのであった。

古代蝦夷論の再構築に向けて

熊谷公男

はじめに

古代の東北地方から北海道にかけて、中央政府が蝦夷（エミシ）と名づけた人々が住んでいた。その蝦夷がどのような人々であったのかをめぐっては、江戸時代以来の長い研究史がある。そのなかでもっとも重要な問題として議論されてきたのが、蝦夷はアイヌなのか、それともそうでないのかという問題である。当初優勢だったのは蝦夷アイヌ説である。のちに蝦夷辺民説（非アイヌ説）が登場し、しだいに優勢となる。このような流れのなかで、近年、両説の止揚、あるいは統合をかけた新しい蝦夷論を展開したのが工藤雅樹氏である。^①筆者は、これまで工藤氏の視角を基本的に継承する立場から蝦夷論に關説してきた。^②

一方、藤沢敦氏は、二〇世紀後半以降の人類学・社会学などの民族論をふまえ、これまでの蝦夷論に根本的な批判を加えている。^③工藤氏や筆者も含めて、これまでの蝦夷論が民族論の研究動向にはあまり関心を払わないできただけに、重要な問題提起であるといえよう。

そこで小稿では、工藤氏と藤沢氏の蝦夷論の検討を中心に、近年の民族論もふまえながら新たな蝦夷論を模索してみたい。

一、工藤雅樹氏の蝦夷論とその問題点

辺民説（非アイヌ説）が優勢となるのは戦後のことである。伊東信雄氏が津軽の田舎館村垂柳遺跡で弥生時代の水田跡を発見し、本州の最北端にまで弥生文化が伝播していたことを証明したことで、蝦夷も稲作を行っていたのであり、倭人と蝦夷の間には本質的な文化的差異はなく、ただ若干の遅速の差があったために異族視されたに過ぎない、という辺民説を主張した。^④さらに高橋富雄氏が、津田左右吉・坂本太郎氏らの研究をふまえながら、蝦夷とは東方の「まつろわぬ人々」を指した政治的観念であって、「蝦夷がアイヌであるかないか、また、それにアイヌが含まれるか含まれないか、というようなことは、蝦夷ということばの歴史的用法には、本来関係がない」として、「蝦夷」という言葉が特定の人種や民族を指した概念ではないこと強調したことも大きな影響をおよぼした。

こうして考古学・文献史学の両分野から蝦夷アイヌ説への有力な批判が提起され、辺民説（非アイヌ説）は通説としての地位を占めるようになるのである。

辺民説優位の状況のなかで、工藤雅樹氏はアイヌ説の再評価を

掲げ、両説の止揚をはかった。ここでは氏の説がもつとも総括的に論じられていると思われる『古代蝦夷』^⑥によって工藤氏の見解をまとめてみよう。

工藤氏は「蝦夷アイヌ説の論拠のなかにも、現在の知識をもつてしても否定し得ない点がいくつが存在するし、近年の考古学の研究によって新しく知られるようになった事実のなかにも、蝦夷辺民説よりはむしろ蝦夷アイヌ説に有利な点もある」として、蝦夷アイヌ説の再評価を試みている。

辺民説が、考古学的には弥生時代における東北北部までの稲作の北進を高く評価したのに対して、工藤氏は縄文時代以来、東北北部と北海道の文化的共通性が顕著なこと、とりわけ近年、縄文文化の後半段階（三〜六世紀）に東北北部まで縄文文化圏にふくまれ、稲作の痕跡が姿を消してしまうことが明らかにされたことを重要視する。さらに、考古学的に蝦夷が稲作を行なっていたことは明らかであっても、蝦夷のすべてが農耕民で、農耕以外に食料を獲得する手段をもたなかったとは考えにくく、文献史料には、蝦夷を狩猟民とする記述が多く見られ、それらをすべて否定することは困難であろうとし、冬に山にはいつて猟を行なうマガギの風俗は、古代蝦夷の生活の名残ではないか、とも述べている。

また、政府側に蝦夷の訳語（通訳）がいたことに着目し、蝦夷の言語が日本語とは明らかに異なり、それをアイヌ語地名の分布やマガギ言葉からアイヌ語系統の言葉であったと想定する。

以上のような点をふまえて工藤氏は、「蝦夷アイヌ説は古代蝦

夷の実体のうちの北海道的な部分を強調しており、蝦夷辺民説では蝦夷の文化の日本的な面をとりだしている」のであり、「二つの説を対立する説と見なくとも良い」として両説の止揚を提唱するのである。

今回、工藤氏の蝦夷論を読みなおしてみても、工藤説を継承、発展させるためには、残された問題を明確にしておく必要があることを痛感した。そこで以下に、筆者が考える工藤説の問題点を列挙してみることにしたい。

まず工藤氏は、蝦夷アイヌ説と辺民説はともに真理を含んでおり、二つの説を相対立する説とみる必要はない、と両説の止揚、統合の方向性を明示したのであるが、では具体的にどのような形で両説を統合、止揚し、新たな蝦夷論を構築していくのかということになると、いまだアイヌ説の再評価にとどまっていて、とくに戦後有力化した辺民説をどのように蝦夷論に組み込んでいったらよいのかという点については、ほとんど具体的な言及がないように思われる。

筆者は、古代国家によって蝦夷観念が定立されるのは、六世紀半ば〜後半のことと考えているが、東北北部ではその直後の七世紀初頭には縄文土器が姿を消して完全に土師器に取って代われ、隅丸方形カマド付きの竪穴住居によって構成される集落が急速に広がっていく。それにともなう稲作農耕も再び北進していったと考えられている。要するに、七世紀以降の東北地方の蝦夷社会では、住居・土器・稲作など、考古学的に認識しやすい生活文化においては、東北南部以南の倭人社会とほとんど区別が

かなくなるのである。これらの諸側面では、辺民説がなお正当性を保持しているといつてよい。新たな蝦夷論は、これらの考古学的事実を包摂するものでなければならないであろう。

つぎに、工藤氏のアイヌ説再評価の論点であるが、既述のように考古学的には縄文時代以来の東北北部と北海道との文化的共通性を重要視する。これは確かに大勢論としてはアイヌ説に有利な事実であるが、縄文時代から蝦夷が存在していたわけではないから、両地域の文化的共通性が古代蝦夷の成立とどのように関わることかを具体的に問う必要性がある。そうすると、蝦夷論と直接関わるのは、工藤氏も重視している統縄文文化の南下の問題である。ただしこれも六世紀までのことであるから、せいぜい蝦夷の成立期にしか関わらない。考古学的には、東北北部と南部の同質化が進むようにみえる七世紀以降の時期において、倭人と蝦夷との間に考古学的に認識できる文化的差異がどの程度あるのか、という問題の方がより重要であろう。なお、本稿で用いる「倭人」という語は、同類意識によって結びついた民族を意味するわけではなく、国家が「蝦夷」「倭人」「南島人」などとよんだ残りの列島の住民という程度の意味である。

実は、工藤氏がアイヌ説再評価の論点としてより重視しているのは、アイヌ語地名とマタギ言葉である。東北北部にアイヌ語地名が数多く遺存し、マタギ言葉にアイヌ語と共通する単語が少なくないことと、蝦夷の話す言葉が「夷語」とよばれ、訳語（通訳）が介在したことを関連づけて、古代の蝦夷はアイヌ語系統の言葉を話していたという想定をしたのである。工藤氏は、東北地方に

アイヌ語地名が多数残されていることの意味は、考古学や古代史にとつて重要な問題であるにも関わらず、それがあまり理解されていないとして、アイヌ語地名の解説、紹介に多くの紙数を割いている。筆者も、蝦夷の言語の問題は、蝦夷論においてきわめて重要な論点であると考えていることは、後述する通りである。

工藤氏がアイヌ説を再評価するのに、氏自身の専門分野である考古資料よりもアイヌ語地名やマタギ言葉を重視していることは、考古学的立場から蝦夷文化を研究することの難しさを、はしなくも示しているように思われる。

要するに、工藤氏の蝦夷論を継承、発展させるためには、考古資料などから明らかな辺民説的側面、すなわち倭人社会と共通する文化要素を十分に評価しつつも、アイヌ説的側面、すなわち倭人社会と異なる文化要素—その中には言語のようになるのちのアイヌ文化につながるいくつかの可能性のあるものもある—の両者が、どのような存在形態をとつて蝦夷文化のなかに構造化されているのかを、おのおのの文化要素について具体的に明らかにしていく必要があると考える。

二、蝦夷論と民族論—藤沢敦氏の蝦夷論をめぐる—

蝦夷論において、蝦夷をいかなる系統の集団と捉えるかは重要な問題であり、蝦夷の長い研究史で蝦夷とはアイヌなのか、そうでないのかということが問われ続けてきたのも、この問題に関係する。したがって蝦夷論には、「民族とは何か」という民族論が密

接に関連してくる。ところが、人類学や社会学の分野では二〇世紀後半以降、民族のとらえ方が大きく変わってきている。^⑤藤沢敦氏はそのような近年の人類学・社会学の民族理論をふまえて、これまでの蝦夷論に根本的な批判を展開している。^⑥

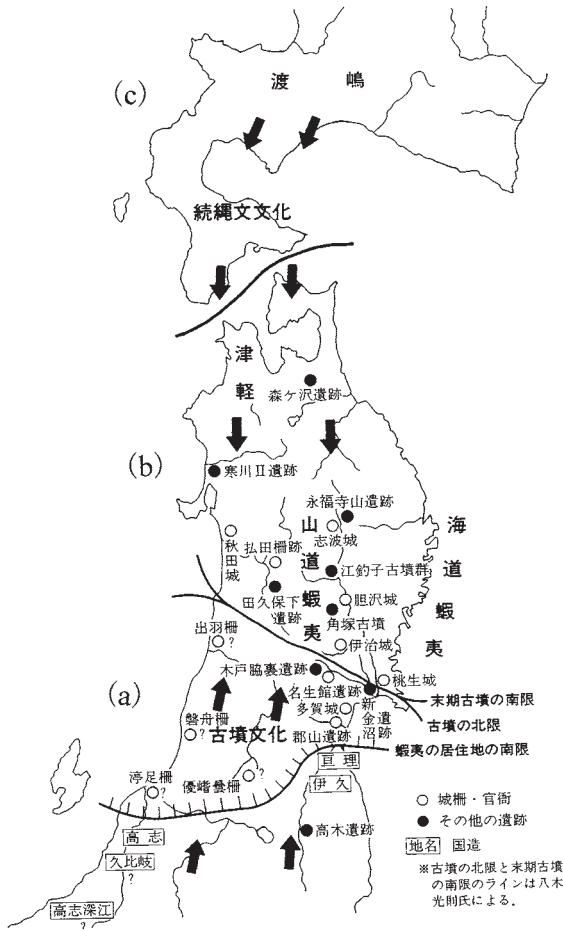
藤沢氏は民族を、出自や文化などの客観的指標によって区別される永続性のある実体ととらえる客観主義的な民族論を批判し、「我々」と「彼ら」の相互作用から生じる同類意識によって状況に応じて構築される「関数」ととらえる主観主義的民族論を支持する立場から、「民族を客観的指標で分類可能な、実体あるものと見なすことはできない」とする。さらにフレデリック・バルトの境界論に依拠して、「民族の問題を考える際には、文化的同一性の追求ではなく、どのように境界が形成されていくのかという観点から検討しなければならない」と論じる。そして「古墳時代から古代にかけての東北地方の考古資料の様相からは、文化は常に漸進的な変移を示し明瞭な境界は見出し難く、「本質主義的アプローチでは、倭人と蝦夷の差異を説明することは不可能」と断じている。

藤沢氏の議論は民族論の研究動向をふまえた重要な問題提起であり、筆者も啓発されたところが少なくないが、いささか極論にすぎるのはなからうか。筆者も、民族の究極の決定要因が「我々」という同類意識であり、それは「彼ら」という他者との関わりのなかから形成されるものであるという主観主義的民族論は、近年の民族紛争などをみても妥当性が高いと考える。とはいえ、もう一方で出自・文化・宗教・言語・形質的特徴（「人種」）

など、民族の客観的指標とされてきたもののいくつかが、状況に応じてではあるが、「我々」意識の醸成に密接に関係するという^⑦ことも、多くの研究者がみとめる否定しがたい事実であろう。現に、藤沢氏が高く評価する福井勝義氏も、「もつとも客観的な指標と考えられる言語」によってアフリカの民族を分類、考察している。^⑧このようなことからみて、民族の客観的指標からのアプローチ自体に否定的な藤沢氏の研究姿勢は、筆者には行き過ぎのよう^⑨に思われる。

「我々」意識を考古資料から跡づけることは、事実上、不可能であるし、蝦夷自らが残した記録が皆無という状況では、文献史料から検証することも至難の業である。そこで民族は、「我々」という同類意識によって他者との相互関係のなかで構築される「関数」なのだということを十分に意識しながら、次善の策として、「我々」意識の生成と密接な関係を有する出自・文化・宗教・言語・形質的特徴などの客観的指標によって民族、エスニック・グループの問題にアプローチすることは十分に可能であるし、とるべき研究方法であると考ええる。

藤沢氏も重視しているように、それとともに蝦夷論で重要な論点になると思われるのが境界領域における古代国家・倭人と蝦夷の相互関係である。バルトが境界論を提起して以降、民族の問題は民族間関係の問題にほかならない、というパラダイムシフトが起こったが、内堀基光氏はさらに議論を進めて、民族は外部者による「名づけ」と、それに対する共同社会の側の「名乗り」という相互関係から生成されてくるとする。なかでも外部者が国家の



蝦夷の3つの文化圏

三、新たな蝦夷論の構築へ向けて

以上の検討をふまえて、最後に、若干の文献史料と考古資料を用いて、新たな蝦夷論構築の方向性を模索してみたい。

(一) 蝦夷論の時間的・空間的枠組み

まず考察を始めるまえに、筆者の蝦夷論の枠組みを提示しておきたい。

最初に指摘しておきたいのは、古代蝦夷は通時的には歴史的存在であると同時に、共時的には列島の特定の地域に居住するローカルな存在であった、ということである。歴史的には、六世紀半ばごろから中世的エゾ観念が成立する一二世紀まで存続する。またその居住範囲は、新潟平野―米沢盆地―阿武隈川河口付近をむすぶラインより北で、重要なのは「渡嶋蝦夷」の存在から、渡嶋＝北海道まで広がっていたと考えられることである。

蝦夷の通時的、共時的存在形態の枠組みをこのように把握したうえで、さしあたって二点ほど、考察の前提とすべき基礎的事実を指摘しておきたい。

第一点は、「蝦夷」とよばれた人々が決して

場合、効果が大きく、しばしばその介入が契機となって「我々」意識が生成され、民族の実体化へと進んでいくというのである。そしてそのような状況下において、右にあげた客観的指標のうち、当事者が意味を見出したいいくつか「我々」意識の醸成に関わりをもつてくると考えられる。次節では、このような観点から境界地域における蝦夷と他者、すなわち古代国家、あるいはその構成員である倭人との相互関係の問題も合わせて取り上げることしたい。

均質の文化をもっていたわけではなかったことである。蝦夷の居住範囲の南限に近い地域 (a) までは、古墳文化がほぼ本来の形態を保って伝播してきている。一方、東北北部の地域 (b) は、奥州市の角塚古墳を除くと古墳は築造されず、代わりに六世紀までは続縄文系の土壙墓、七世紀以降は末期古墳が営まれるなど、独自の墓制を保持した地域である。ただし、土師器・須恵器をはじめとする古墳文化の多くの文化要素は、このラインを大きく越えて東北北部に広く浸透していき、古墳文化を全面的に受け入れなかったわけでは決してない。さらに土師器文化の影響は津軽海峡を越えて北海道 (c) にまで及んで続縄文文化を終焉に導くが、北海道ではやがて擦文文化という独自の文化が展開していくことになる。したがって巨視的には、蝦夷は南から (a) (b) (c) 三つの文化圏に別けることができよう (前頁図)。ただし藤沢氏が強調するように、文化の変化は漸移的であって、厳密には一本の線によって区分けできるわけではない。

第二点は、時期によって蝦夷の南限ラインに変化があり、しだいに北上していくということである。新潟平野―米沢盆地―阿武隈川河口付近というラインは、あくまでも七世紀半ばごろの状況である。蝦夷は、律令国家の政策によってしだいに南の地域から同化されていき、平安時代初めには、東北地方では、ほぼ現在の青森・秋田・岩手の三県に宮城県の北部を加えた範囲に限られるようになるとみてよい。前記の地域区分でいえば (b) と (c) の地域である。

以下の考察は、このような蝦夷の時間的、空間的存在形態を前

提としたものである。

(二) 蝦夷と倭人の相互関係

既述のように、六世紀の半ばごろ、古代国家は国造制支配の外側の住民を蝦夷とよんで国造制下の住民と区別し、朝貢による支配を行うようになる。その一端を伝えるのが『日本書紀』敏達一〇年(五八一)閏二月条の蝦夷の「魁帥綾糟等」の服属儀礼の記事である。そして今泉隆雄氏が指摘したように、大化改新後の地方支配体制の変革に際して、国造の支配下ではクニを分割して評制を敷いたのに対して、その外側の蝦夷の地には南辺から城柵を置いて、柵戸を移配しながら領域支配の拡大を図っていくのである。¹⁶⁾

したがって「蝦夷」が、少なくとも当初は、「我々」意識で結びついた民族でありえないことは明白であって、他者である倭王権が、その政治的支配の外側の人々に一方的に貼ったラベルにすぎない。これこそ内堀氏が「名づけ」とよんだ行為に相当しよう。¹⁷⁾ その点で、かつて高橋富雄氏が、蝦夷を「まつろわぬ人々」を指した政治的観念としたことは、その限りにおいてはまったく正当であったといつてよい。

ただしここで注意しなければならないのは、他者である倭王権と「蝦夷」は、人類学のモデルでしばしば想定されるような、相互に並列の関係にある同種の集団ではまったくなかったという点である。片や列島の大半を支配下におく権力体・国家であるのに対して、片やその権力体に一方的に化外の民として位置づけら

れ、なおかつ支配―隷属の関係に取り込まれつつあった人々である。両者の関係が古代国家側に主導性があつたことは明白である。

改新以降の古代国家は、自らが「蝦夷」と名づけた人々が住む地域に城柵を建置し、柵戸を計画的に移住させながら「蝦夷」の直接支配を行い始める。これを蝦夷の側からみれば、自らの固有の土地において、国家が設置した城柵の支配を受け、さらには国家が一方的に送り込んできた柵戸の人々と雑居するという新しい状況が生まれることになる。「蝦夷」とラベル付けされた人々と他地域からの移住者との混住はさまざまな問題を惹起したであろうし、それがエスニックな色彩を帯びることも少なくなかつたのではないかと想像される。そうした軋轢をも含む倭人との相互関係から、蝦夷のなかに「我々」意識が芽生えていったこととは、十分に考えられよう。筆者が以前取り上げたことのある、承和年間の奥郡騒乱の問題は、このような視点から、特定の状況下における倭人と蝦夷との相互関係を示すものとしてとらえることができるように思われる。

『続日本後紀』によれば、承和三年（八三六）から同七年にかけて、黒川以北十郡の奥郡で騒擾がつづき、多くの百姓、すなわち倭人が逃げ出す事態になる。その原因は、「栗原・桃生以北俘囚、控弦巨多、似_レ從_二皇化_一、反覆不_レ定」（同書承和四年四月癸丑条）、あるいは「胆沢多賀両城之間、異類延蔓」（同書承和六年四月丁丑条）などといわれているように、奥郡に居住していた多数の武装した蝦夷の脅威であった。この騒乱を沈静化するために、陸奥国はそのつど一―二千人の援兵を動員するのであるが、それに対

して中央政府は、「宜_下能制_二民夷_一、兼施_二威徳_上」と檄をとばしているように、これらの騒擾は「民夷」、すなわち倭人と蝦夷間の対立が基本となつているという認識であつた。

しかもさらに興味深いのは、同書承和七年（八四〇）三月壬寅条に「奥邑之民、共称_二庚申_一、潰出之徒不_レ能_二抑制_一。是則懲_下又往事之所為_一也」と語られていることである。「奥邑之民」、すなわち奥郡に居住している民（＝百姓・柵戸、本稿にいう倭人）は、口々に「庚申」と叫びながら勝手に逃げ出して、静止できない状態におちいつているが、それは往時のできごと懲りているからだといふのである。

承和七年の干支は庚申なので、百姓がさげんだ「庚申」とはこれを指すと解される¹⁹。そうすると、一運まえの庚申年は伊治皆麻呂の乱が起こつた宝亀十一年（七八〇）であり、もう一運まえの庚申年にあたる養老四年（七二〇）にも陸奥の蝦夷の反乱が起こつて、按察使の上毛野広人が殺されている。養老四年の蝦夷の反乱は、『続日本紀』の記載が簡略なために詳細は不明であるが、この後陸奥国では三年連続で調庸が免除されることが注目される。それは養老六年（七二二）閏四月乙丑条に「迺者、辺郡人民、暴被_二寇賊_一、遂適_二東西_一、流離分散」とあるように、蝦夷の反乱によつて逃亡した多数の民の辺郡への帰還をうながすための措置であつた。皆麻呂の乱の際にも、按察使紀広純が殺されて陸奥国は大混乱に陥り、多賀城の城下の百姓は城内に入って多賀城を守ろうとしたが、介の同伴真綱と掾の石川淨足が後門から遁走したために、指揮官を失つた百姓もいっせいに逃走したという（『続日本紀』

宝龜十一年三月丁亥条)。

要するに養老四年、宝龜十一年の二度の庚申の年には、いずれも蝦夷の大乱が起こつて按察使が殺されたばかりでなく、陸奥国が大混乱に陥り、蝦夷の攻撃を恐れた多数の百姓、すなわち倭人が逃亡するという事態が巻き起こつている。この二度の大乱の経緯が陸奥国の百姓の脳裏に深く焼きついて伝承され、承和七年の「奥邑之民」の大規模な逃亡が起こる引き金となつたと解されるのである。

いまにして思えば、旧稿では「民夷」の間の対立感情をやや固定的にとらえていたきらいがあつたと思う。奥郡の倭人と蝦夷が、いつも対立的な関係にあつたわけではなく、饑饉や何らかのトラブルが引き金となつて相互の対立感情が顕在化し、時としてそれが騒乱にまで発展することがあつたと考えるべきであろう。それにしても一〇〇年を超える長期にわたつて奥郡の民、すなわち倭人の間で庚申の年の蝦夷の大乱が伝承されていたという事実は、少なくとも奥郡、すなわち律令国家の境界領域という特定の場においては、倭人・蝦夷の双方がおのおの同類意識をもちつつあつたことを示すものとみてよいであろう。

なお、同じような「民夷」の対立は出羽国の境界領域でもあつた。元慶の乱直後の元慶四年(八八〇)二月、出羽国は「管諸郡中、山北雄勝・平鹿・山本三郡、遠去_二国府_一、近接_二賊地_一。昔時叛夷之種、与_レ民雜居、動乘_二間隙_一、成_二腹心病_一」と、「民夷」が雜居する山北三郡で、かつて「叛夷之種」が「間隙」に乗じて騒動を起こしたことを思い起こし、「頃年頻遭_二不登_一、憂在_二荒飢_一。若

不_二優恤_一、民夷難_レ和」と、饑饉をきっかけに「民夷」間にふたたび対立が生じること懸念して、対策を講じた旨を上奏した。それに対して中央政府は、公民に対しては一年間の給復(調庸の免除)、三郡の狄俘(蝦夷)八〇三人に対しては不動穀六二〇九石七斗の支給を指示している。

このような史料によれば、奈良時代から平安前期にかけて、「民夷」が雜居する律令国家の境界領域では、「民」と「夷」の間で相互に「我々」「彼ら」という帰属意識が醸成されていて、状況しだいではそれが対立感情として顕現し、エスニックな紛争が起こることがあつた、とみることでできると思われる。古代国家が領域の外の民に貼つたラベルにすぎなかつた「蝦夷」が、少なくとも境界領域においては倭人と蝦夷との相互関係を通して、互いに「我々」「彼ら」という意識が生成されていつたと考えられるのである。そうであれば、これは内堀氏のいう「名づけ」に応じた「名乗り」がすではじまっていたとみてよいであろう。

このように、圧倒的な力をもつ律令国家による蝦夷支配の進展は、「蝦夷」というラベルを一方的に貼られた蝦夷たちの存在形態、さらには意識形態をさまざま形で変容させていつたと考えられる。蝦夷の居住範囲の南限に近い(a)の地域では、蝦夷と倭人の文化的差異は小さかつたとみられるので、蝦夷は城柵の支配下におかれたあと、比較的短期間のうちに公民化していつたとみられる。

もう一方で(b)の地域の蝦夷は、このあとにみるように、古墳を受け入れずに独自の墓制を存続させ、「夷語」を用いるなど、

倭人との間に重要な文化的差異があった。そのうえ律令国家の支配拡大策に共同して立ち向かい、もつとも頑強に抵抗したのもこの地域の蝦夷である。蝦夷社会は、通常は比較的小さな集団に分かれた分節社会であったと考えられるが、共通の敵のもとでは同盟を結んで戦った。そのような戦いを通して、蝦夷社会の統合が進んだのではないかということは、すでに工藤氏が指摘している²⁰。要するに(b)地域の蝦夷は、倭人との一定の文化的差異や律令国家との長期にわたる戦い、さらには律令国家が送り込んでくる倭人(柵戸)との日常的な接触などが要因となって、「我々」意識を比較的明瞭に保持するようになった蝦夷グループではなかったかと考えられるのである。

もう一つ、蝦夷と倭人の相互関係を考えるのに貴重な素材を提供してくれるものがある。それが、筆者も以前、考察したことがある蝦夷の諸国移配の問題である²¹。律令国家は、服属した蝦夷(俘囚)の一部を強制的に諸国に移住させるという政策をとった。その初見は神亀二年(七二五)であるが、三十八年戦争後半期の延暦十三年(七九四)の征夷戦の勝利で律令国家がようやく優位に立って以降、とくに組織的に行われたことが指摘されている。この時期に主に移配されたのは(b)地域の蝦夷とみられる。移配先は東国から西海道(九州)の諸国にまで及んだ。

移配蝦夷は、移配先で倭人に同化して褒賞されている例もみられるが、さまざまな紛争が起こったことも記録されている。近傍の百姓との軋轢・衝突や、処遇に不満をもった蝦夷の越訴、さらには反乱などである。これらの紛争が、多かれ少なかれエスニツ

クな性格を帯びていたことは史料からもうかがわれる。

ここでまず考慮すべきことは、移配蝦夷が一般の蝦夷とは異なる特殊な環境に置かれていたことである。彼らは、否応なしに生まれ育った郷里から引き離され、周囲を倭人に囲まれた見知らぬ土地で生活することを余儀なくされた人々であった。律令国家からも移配先の国司に対して、時服や禄物を支給し、節日には饗賜を行って、彼らの「帰望」を除去するようにという指示がでていた(『類聚国史』巻一九〇俘囚延暦十七年六月己亥条)。

移配蝦夷は、もともと出自を異にする蝦夷たちが同じ移配先に集められて支配を受けたと考えられるので、本来、「我々」意識はなかったとみられるが、律令国家から一括して公民とは異なる支配、待遇を受け、周囲の倭人たちからも「彼ら」とひと括りにされることで、急速に同類意識をもつようになっていったのではないかと推察される。ただし近江国のように、比較的多数の蝦夷が移配されたところでは、集団全体を「統撰」できる人物がいなかったため、移配蝦夷の支配は困難をきわめ、「俘夷之徒、老少無_レ別、放縱為_レ事、暴乱任意」という状況であった。そこで国司が勇健な蝦夷を選んで非公式に夷長としたが、それでも「夷等不_レ服、猶行_二狼戾_一」という状況が続いたので、爾散南公沢成という蝦夷を正式な夷長とし、把笏させることで国家の権威を分与して移配蝦夷の統率にあたらせたという(『日本文徳天皇実録』天安二年(八五八)五月己卯条)。移配蝦夷集団の特異な存在形態が知られる例である。

律令国家は、支配になかなか服さずにくり返し紛争を起こす移

配俘囚に対しては、「夷俘之性、異於平民。雖從朝化、未忘野心」(『類聚国史』卷一九〇俘囚 弘仁四年(八一三)十一月庚午条)などといって、「教化」すなわち同化政策の必要性を強調しているが、ここには蝦夷を「平民」と異なる心性をもつ集団とする認識がみてとれる。また役人や百姓が移配蝦夷の姓名をよばずに「夷俘」とよび、蝦夷がこれを「深以為恥」しているの禁止するという勅も出されている(『日本後紀』弘仁五年(八一四)十二月癸卯朔条)。このように移配蝦夷は、律令国家からも、役人や一部の倭人からも、倭人とは異なる「彼ら」としてあつかわれることが少なくなかったのである。これらの点をふまれば、移配蝦夷集団が、律令国家・倭人社会のなかでエスニック・グループ化することがあったことは容易に想像されよう。

ただし、エスニック・グループとしての移配蝦夷の存在は、決して固定的なものではなかった。九世紀には、出雲・甲斐・上総・下総・下野などの諸国で移配蝦夷の反乱が起こっている。中には、嘉祥元年(八四八)に起こった俘囚丸子廻毛の反乱のように相摸・上総・下総など五ヶ国の兵力を動員してようやく鎮圧した例もある。そうかと思えば、同化して公民身分に編入されたり、叙位・褒賞されている例も少なくない。紛争が生じた場合の方が記録に残りやすいということを考慮すれば、おそらく同化していったケースの方が多かったのではないかと思われる。

このようにみえてくると、移配蝦夷が倭人社会に順調に同化していくか否かは、多分に周囲の環境、いいかえれば倭人との相互関係しだいであったと考えられるのである。倭人社会、あるいは支

配者である国司との軋轢が大きいところでは、「我々」意識が強まり、団結して越訴などの行動に出だし、逆に軋轢の少なかったところでは「我々」意識はしだいに稀薄となり、倭人社会に同化していったのであろう。

(三) 蝦夷の言語

蝦夷の一部分が異文化集団であったことを示すものに、その言語がある。ただし、蝦夷の言語には二つの問題がある。一つは、文献史料から知られる「夷語」や蝦夷の訳語(通訳)など、蝦夷が倭人とは明確に異なる言語を使用し、それが律令国家側から「夷語」とよばれていたという歴史的事実であり、もう一つは、北海道から東北地方に分布するアイヌ語地名の問題である。この二つはまったく別種の資料から抽出された、異なる事象であることを、最初に確認しておきたい。

そこでまず、文献史料から知られる事実を簡単に確認しておく。まず蝦夷の言語が「夷語」とよばれたことは、『日本後紀』延暦十八年(七九九)二月乙未条に陸奥国新田郡の百姓弓削部虎麻呂とその妻が「夷語」に習熟し、でたらめな話をして蝦夷を扇動したかどで日向国に配流されたとあり、『藤原保則伝』にも、小野春風は、幼少のころ陸奥・出羽の辺境で過ごしたことがあって「夷語」に通曉していたので、甲冑を脱ぎ、弓矢を棄てて反乱軍(『日本三代実録』によれば上津野村の俘囚)の中に入って説得にあたるということがみえている。

また訳語に関しては、元慶の乱終結後の元慶五年(八八一)に

「蝦夷訳語」の物部斯波連永野が外従五位下を授かっているが、これは鐘江宏之氏のいうように、时期的にみて元慶の乱における功績を賞したものにちがひなく、おそらくは小野春風の上津野における説得工作を補佐したのであろう。²²⁾ 養老六年(七二二)にも、養老四年におこった陸奥の蝦夷と大隅・薩摩の隼人の反乱の功勞者への叙勲記事に「征討陸奥蝦夷、大隅・薩摩隼人等將軍已下及有功蝦夷并訳語人、授勲位各有差」(『続日本紀』養老六年四月丙戌条)とみえる。この「訳語人」に蝦夷の訳語が含まれることは確實であろうが、はたして隼人の訳語もいたのかははっきりしない。筆者は「有功蝦夷」のあとに「訳語人」が置かれていることと、律令制下で隼人の訳語の存在を示す史料がほかになことなどから、蝦夷の訳語のみではなかつたかと推測する。

それはともかくとしても、文献史料から判明することは、まず少なくとも八世紀前半から九世紀末にかけて蝦夷の訳語が置かれていたこと、もう一つは蝦夷の言語が「夷語」とよばれていたことの二点である。さらには(a) (b)両地域の境界領域にあたる新田郡の百姓が「夷語」に習熟していること、物部斯波連という斯波郡に本拠をおく蝦夷系豪族が訳語になっていること、小野春風が「夷語」によって説得にあつたのが上津野村の蝦夷だったことなどからみて、少なくとも(b)地域の蝦夷の多くは「夷語」を用いていたとみてよいであろう。それに対して(a)地域の蝦夷が「夷語」を話したことを示す史料は残されていない。また斯波郡の蝦夷系豪族が元慶の乱で上津野の蝦夷の説得にあつたとすると、「夷語」はある程度離れた蝦夷集団同士でも通じた可能性が考え

られよう。

問題は、このような「夷語」を方言とみた方がいいのか、それとも古代日本語とは別個の言語(ただし祖語を共通にすることまで否定するものではない)とみるべきなのかということである。福井勝義氏によれば、方言か別個の言語かの主要な基準は「歴史・政治と深くかわつてくる「我々」意識の問題とつながってくる」という²³⁾。そうであれば「夷語」という名称自体が、律令国家が蝦夷の言語を倭人の言語とは異なる化外の民の言語と認識していた証左となろう。また律令制下で訳語・通事(通訳)が置かれたのは、確實などころでは漢語・新羅語・渤海語に「夷語」、それに「奄美等訳語」(『延喜式』卷三〇 大蔵省)のみであり、それに隼人の言語が加えられるかもしれないという程度である。古代の方言では東国方言が有名であるが、もちろん訳語が置かれたりしたことはない。したがって筆者は、「夷語」を方言のレベルで理解しようとするのは無理で、律令国家・倭人から「化外の民の言語」と認識され、通訳もおかれた別個の言語としてとらえるべきであると考える。しかも(b)の蝦夷のなかである程度広汎に使用されていたことが想定できるので、「民夷」の相互関係次第では蝦夷の「我々」意識の形成にも関わるものがあつたのではないかと思われる。

また、そもそも境界領域などは多言語社会とみた方がいいのではないかと考えもあるかもしれない。しかしながら、新田郡の百姓が「夷語」に習熟していたことが特筆されている『日本後紀』の記事などは、双方の言語を話せる人物が一部にいたことを

示すものではあるが、それが一般的な存在であったとみるには、逆に不利な史料であろう。

以上、文献史料にみえる「夷語」と「蝦夷訳語」をめぐる問題をみてきたが、アイヌ語地名は、これとはまったく別個に言語学（アイヌ語学）分野で研究されてきた問題である。アイヌ語地名に関しては工藤氏の著書に詳しい紹介があるので、ここでは詳細には立ち入らないが、金田一京助・知里真志保・山田秀三氏らの研究が有名である。それらの研究成果のうち、東北北部には、北海道に多数残るアイヌ語地名と同類の地名がかなりの数残っていること、それらの地名はいずれかの時代にアイヌ語系統の言語を使用する人々がこの地域にまで広がっていた名残と考えられること——少なくともこの二点は否定しがたい、したがって学問分野を超えて尊重されるべき基本的な事であると考える。

そうすると、アイヌ語地名の分布範囲は中世以降のエゾ（アイヌ）の居住範囲（津軽・下北以北）よりもはるか南にまで広がっているので、これをエゾに結びつけて理解することは困難で、どうしてもそれ以前の時代の状況を反映したものと考えるをえないことになる。工藤氏は、さらにマタギ言葉も取り上げていて、こちらは古代まで遡るかどうかはつきりしないので別にすると、これも、アイヌ語地名の由来が中世以前にまで遡るものだとすると、これを「夷語」に結びつけるのは、筆者は十分な合理性をもつと考える。またたとえアイヌ語地名が「夷語」に結びつかないとしても、前述したとおり、古代史料にみえる「夷語」と「蝦夷訳語」から、蝦夷が独自の言語を使用していたことは論証できるのであ

る。

さてそうすると、少なくとも(b)地域、それにおそらくは(c)地域の蝦夷は、言語を基準とすると「アイヌ語族」ともいうべき人々であったことになろう。もちろん、この地域の蝦夷が広く「我々」意識で結びついていたかどうかは別個に検討されなければならぬ。いし、そのような可能性は、蝦夷社会の分節的あり方からみて、あまり高くはないであろう。しかしながら境界領域を中心に、倭人との接触の機会が比較的多い蝦夷にとって、訳語を必要とするレベルの言語の相違は、「我々」意識の形成に大きく作用したのではないかと考えられる。

(四) 成立期の蝦夷文化の複合性と重層性

古代国家は蝦夷を、狩猟を行い、農耕を知らず、獣肉を食らい、深山の木のもとに住み、「夷語」を話し、「野性獣心」「狼性」「野心」などといわれる野蛮な心性をもっている他者として認識、あるいは意図的に喧伝している。このような蝦夷認識には偏見からくる誤解や意図的な誇張も少なからずあったと思われるが、総体として蝦夷を異なる文化的特性をもつ人々と認識していたことは否定しがたい。しかも既述のように、蝦夷に渡嶋蝦夷（≡擦文人）のような明らかな異文化集団が含まれ、「夷語」をしゃべる蝦夷が一定数いたという事実があるし、以前述べたことがあるように、蝦夷の生業として狩猟のウエイトが相対的に大きかったと考えられ、肉食を好んだことを具体的に示す実録的な史料も存在する。⁽²⁵⁾

このように、蝦夷は律令国家から異文化集団と認識されていた

し、事実としても南限の(a)地域の蝦夷を除けば、おおむねある程度の文化的差異を有した集団とみられるのである。ただ現状では、倭人と蝦夷との間に一定の文化的差異があったとみることに否定的な研究者が少なくないことも事実であり、考古学分野にとくにそのような傾向が顕著であるように感じられる。それは、筆者は、以前にも指摘したことがあるが、考古資料によって認識しやすいのが物質文化であり、その物質文化の分野にとくに倭人の文化要素が入ってきやすかったために、考古資料だけからみると、あたかも蝦夷と倭人の文化に大差ないようにもみえるためだと考えている。

しかしながら、蝦夷の文化を構造的に考えれば、考古資料によって知られる事実からも、倭人文化と蝦夷文化の差異は十分に認識可能ではないかと思われる。とくに(b)地域(東北北部)の蝦夷に関して考古学研究者の見解と私見との差が大きいように思われるので、ここでは(b)地域の蝦夷の考古学的に認識できる文化的特徴について考えてみたい。

まず(b)地域は、三世紀から六世紀ごろまで北海道系の続縄文文化圏に包摂される。ただしそうはいつても、すべての文化要素がひとしく続縄文文化によって塗りつぶされたわけでは決してない。墓制に関しては、この時期、一貫して続縄文系の土壙墓が続くが、その土壙墓に副葬された土器には、当初から続縄文土器ばかりでなく、弥生土器や土師器・須恵器など南方系の土器が含まれる。さらにその土器としてのあり方や相対的な割合が、時期とともに大きく変化していくのである。三世紀の寒川Ⅱ遺跡(秋田

県能代市)では、後北C₂ⅠD式の土器にまじって弥生時代末期の壺と甕が出土していたが、四世紀代とみられる永福寺山遺跡(盛岡市)でも後北C₂ⅠD式の土器とともに天王山式に後続する弥生時代終末期の赤穴式や古式土師器の塩釜式と認められる南方系の土器が出土している。この傾向は北大式の時期に入るとさらに顕著となり、五世紀の森ケ沢遺跡(青森県七戸町)では北大式の甕や片口とともに土師器・須恵器が出土しており、両者の比率はほぼ半々となる。ほぼ同じ時期、続縄文文化圏の南辺に位置する木戸脇裏遺跡(宮城県大崎市)では大量の土師器にまじって初期須恵器片や数片の北大式土器が出土するという状況である。さらに六世紀代の田久保下遺跡(秋田県横手市)になると、八基の土壙墓から出土した土器はほとんどすべてが土師器・須恵器であって、わずかに一点の甕が北大式の形態をとどめるにすぎないという。

しかも阿部義平氏によれば、四世紀までの後北C₂ⅠD式の段階では、続縄文土器と土師器がおのおの土器セットとして独立していたが、五・六世紀の北大式の段階には、続縄文土器の器種は甕と片口土器に限られるようになり、それ以外の器種は必要に応じて南方で作られた土師器や須恵器を受け入れて、組み合わせる土器セットを構成するようになる。さらに製作技法も北大式土器の製作にとりいれられて急速に土師器化した土器に転化していくことも確認できるといえる。続縄文土器で甕と片口土器が最後まで残るのは、それらが煮炊き用の「習俗に深く関わる器種」であったためと考えられている²⁶。

このように三〜六世紀の間、(b)地域では続縄文系の土壙墓が

一貫して存続するにもかかわらず、使用される土器は急速に土師器化が進み、やがて統縄文土器がほぼ姿を消してしまふのである。その結果、六世紀の田久保下遺跡では、両系統の文化要素が非常に対照的な形をとることになる。ここでは八基の土壙墓が検出されているが、それらは楕円形の土壙の長軸の一方（東側）に掘り込まれた袋状ピットに一对の土器が埋納されているなど、統縄文系土壙墓の特徴を明瞭にもつが、副葬された土器はほとんどが土師器・須恵器によって占められる。したがって土器にのみ着目すれば、もはや「統縄文文化」とはいいがたい状況である。墓制とその背後にあるとみられる葬送儀礼や埋葬思想などの精神文化は統縄文文化の伝統を顕著に残しながら、土器文化においては南からの土師器文化をほぼ全面的に受け入れるというあり方をとる。ここからかがわれるのは、墓制という文化要素が相対的に保守的で、外来文化の影響を受けにくいのに対して、土器においては外来文化を受け入れて、変化しやすいという傾向である。土師器の影響が北海道にまで顕著におよんでいくことからみて、これは一般的傾向とみてよいであろう。

では、田久保下遺跡を統縄文文化圏に含めるのはなぜであろうか。それは墓制が統縄文文化の系統であることが重視されたためではないかと思われる。それに加えて堅穴住居がみつかったおらず、統縄文文化系統の住居（平地式住居か）に居住していたと理解されていることもあろう。いずれにしても、ここでは統縄文土器をほとんど使用しなくなっているにもかかわらず、統縄文文化圏に含めて考えられていることに注目しておきたい。

田久保下遺跡の年代である六世紀は、ちょうど筆者が考える蝦夷観念の成立時期にあたる。この時期には、(b)地域の蝦夷は、統縄文系の土壙墓を作り、そしておそらくはのちに律令国家が「夷語」とよぶようになる、倭人とは異なる言語（アイヌ語系統の言葉か）を話しながら、土器は古墳文化系統の土師器・須恵器を使用していたということになる。彼らの文化全体を復元的に考えてみると、土器に加えて鉄器や玉類などの物質文化の分野では、急速に古墳文化のものを受け入れて自らの生活文化を変革しつつあったが、生業では、稲作はまだ受容していなかったとみられるので、狩猟・漁撈・採集、それに若干の雑穀栽培などを行う、統縄文文化的な生活を営んでいたであろうし、墓制が統縄文文化の伝統を引くものであったことに加え、信仰や祭祀が一般的に社会の生業体系と密接に関連することなどから考えて、精神文化も、その多くは統縄文系統のものではなかったかと想像される。さらに倭人とは異なる「夷語」を話していたとなると、彼らと倭人（古墳文化人）との文化的差異は、決して小さくはなかったといつてよい。

要するに六世紀代の(b)地域の蝦夷文化は、生業・墓制・信仰・言語などの基層文化は統縄文系統のものを保持しながら、土器・鉄器・装身具などの物質文化は大幅に古墳文化の文物を受け入れつつあったという段階ではなかったかと考えられる。筆者は、七世紀以降の(b)地域の文化の全体像は、このような統縄文末期の重層的な複合文化がどのように変容したかという視点から考察されるべきであると考える。

(五) 七世紀における蝦夷文化の転換

七世紀は、蝦夷文化の形成過程において決定的に重要な時期である。ここでも考古学的にわかる文化を手がかりにして、可能なかぎり(b)地域の文化の全体像を考えてみたい。

古墳文化の北方世界への浸透は、ついに続縄文文化に終焉をもたらす。そして(b)地域は、考古学的には南の土師器文化圏に取り込まれ、(c)地域の北海道までもが一時は土師器文化圏の様相を呈するが、九世紀以降は土師器の影響を強く受けた土器に固有の文様を施した擦文土器が誕生し、擦文文化圏が顕在化していく。

(b)地域における七世紀の変化であるが、まず隅丸方形カマド付きの竪穴住居が東北北部(ただしほとんど太平洋側に限定される)まで広がっていくことが重要である。このような集落の広がりにもなつて、稲作も再び東北北部にまで広がっていったと考えられる。前代以来の土師器・須恵器といった土器や鉄器・玉類に加えて、竪穴住居・稲作などの文化要素も東北北部まで広がったことによつて、考古学的には、東北北部が東北南部以南の倭人の居住地域と同一の文化圏に包摂されたようにもみえるのである。七世紀中葉以降、末期古墳の副葬品に馬具が加わることから、(b)地域に馬飼が広がっていくのもこのころとみてよいであろう。これが、考古学研究者の多くが、倭人と蝦夷の間に文化的差異はほとんどないと考える最大の理由ではないかと思われる。

しかしながら筆者は、かつて述べたことがあるように、そのような見方には同意できない。その最大の理由は、土器・鉄器・住居・稲作・馬飼といった文化要素が共通するということは決して

軽視できない事実ではあるが、文化全体からみれば、いずれも物質文化の領域にとどまることに注意をうながしたい。すなわち物質文化の領域では、七世紀以降、まさに辺民説の様相が顕著となるのである。

これを続縄文末期の六世紀段階と比べると、土器や鉄器などの道具類に加えて、住居や稲作も南の倭人文化のものを受容したことは、注目すべき変化である。住居や生業は、生活文化の中核をなす文化要素であり、習俗や信仰にも関わってくるものである。その意味で七世紀の変化は蝦夷文化の形成にとつてきわめて重要と考えられる。この世紀に蝦夷の生活文化は大きく変容し、倭人に大幅に接近したことは否定できないであろう。おそらくこれが、蝦夷の一部分が律令制下で比較的容易に倭人に同化していく前提となつたと思われるのである。

ただしもう一方で、前項でみたように、続縄文末期において土器と墓制で倭人文化の受容のし方がきわめて対照的であつたという事実を想起すると、七世紀以降、習俗ないし精神文化の分野でも、同じように倭人文化に大幅に近づいたとみてよいかは、別個に検討を要する問題のほゞである。率直にいつて、考古学研究者にはこのような問題関心が希薄のように感じられる。

さらにここで考えておきたいのが、これらの文化要素が一般的な民族の指標にどの程度関係するものなのかということである。既述のように、これまで民族の客観的指標として重視されてきたのは、出自・文化・宗教・言語・形質的特徴などであつた。土器・鉄器・住居・稲作などはそのうちの文化、それも物質文化の領域

ということになる。すなわち文化領域の一部に限られ、その他の四つの重要な指標とは直接関わりないのである。この点をふまえれば、土器・鉄器・住居・稲作・馬飼などの共通性のみ可依拠して倭人と蝦夷の文化全体を同一視することは早計と思われ、ましてやエスニックな次元での蝦夷と倭人の区別を考える指標としては、きわめて不十分なことは明らかであろう。

以上のことを確認したうえで、ここでは(b)地域の七世紀以降の墓制である末期古墳をとりあげて、その歴史的意味を概観してみること⁽²⁸⁾にしたい。

末期古墳は、ちょうど続縄文系の土壙墓が姿を消す六世紀末ないし七世紀初頭から九世紀後半にかけて(b)地域で築造され続けた小型の円墳状の墳墓で、(c)地域の道央でも類似の墳墓が少数ながら分布する。

大きさは、直径がだいたい五〜一〇mぐらいで、墳丘の高さはせいぜい一〜二m程度と推定される。主体部は土壙タイプのもものと、石室タイプのもものに大別されるが、石室タイプのもものは北上川流域にかぎられ、土壙タイプの方がより広汎に分布するし、存続時期もより長いことが知られている。

末期古墳は、多くの研究者が指摘しているように、続縄文系の土壙墓が古墳文化の墓制の影響を受けて変容したものと考えられる。それを具体的に示しているのが岩崎台地遺跡群(岩手県北上市)の状況である。ここでは、七基の土壙タイプの初期の末期古墳が発見されているが、近接した場所から土壙墓もみつかつている。しかも注目されるのは、古墳の周辺から続縄文文化で用いら

れる黒曜石が四〇〇点ほども見されたことである。その中にはスクレイパーもみられるが、原石や剥片も含まれることから、墓前祭祀に使用されたのではないかとみられている。そのうえ末期古墳の土壙タイプの主体部と土壙墓は、大きさ・形状・副葬品などがよく似ているうえ、末期古墳の主体部の短辺壁際中央に柱穴状の小穴をもつ例があるなど、明らかに両者に系譜関係があることがみてとれる⁽²⁹⁾。

末期古墳をそれ以前の土壙墓と比べると、墳丘をとまなうこと、屈葬から伸展葬に移行することなど、大きな違いがあり、それらは明らかに古墳文化の影響とみられる。しかしながら両者を比べてみると、見過ごすことのできない、本質的ともいうべき相違が少なくないことも事実である。最初に、古墳の主体部が墳丘中に築かれるのに対して、八世紀中ごろまでの末期古墳では、土壙タイプ、石室タイプを問わず、まず地面を掘り下げて主体部を造り、その後墳丘を構築するのが大半である。

つぎに土壙タイプの葬法は「木棺直葬」とよばれているが、藤沢氏が詳述しているところによれば、墓壙の周囲に側板を埋め込んでから遺体を墓壙の底面に安置し、さらに板で蓋をするもので、同時期の古墳文化圏の古墳には類例のない形態であるという。筆者は門外漢であるが、このような埋葬施設を「木棺」とよぶことには、率直にいつて違和感を感じる。遺体を木棺に安置してから、それを墓壙に埋納するわけではなく、墓壙の周囲に板を据え付け、遺体を墓壙の底に直接安置するというのであるから、この場合の「木棺」は遺体を納めるひつぎ(棺)というよりは、むしろ土留

めのための墓壙の付属物と解すべきではなからうか。

また石室タイプは、横穴式石室の影響を受けたものとみられるが、大きさや形態から追葬は困難で、天井部から埋葬した単次葬であったと考えられている。

このようにみてみると、筆者には末期古墳と古墳文化の古墳との相違点は、いずれも墓制の本質に関わるもののように思われる。地面を掘って主体部を設けるのは、少ないながら東北部の古墳にも類例があるという指摘もあるが、いずれにしてもそれが末期古墳で主体を占めるのは大きな変化にはちがいない。岩崎台地遺跡群の事例を参考にすれば、これはやはり土壙墓の伝統を引いた構築法とみるべきであろう。⁽³⁰⁾ また土壙タイプで「木棺」が墓壙に据え付ける形態に変化することも、石室タイプで天井から埋葬する単次葬となることも、すべて土壙墓の埋葬思想に規定された変容とみると理解しやすいように思われる。

そして何よりも、末期古墳は古墳時代が終わってからも約二世紀にわたって営まれ続けるのである。これらのことから(b)地域の末期古墳は、この地域の蝦夷の墓制が長期にわたって倭人とは異なる独自の形態をとり続けたことを示すもので、それは古墳文化の影響を受けつつも統縄文系の土壙墓の伝統を引き継ぐものであったと考えられるのである。

墓制は埋葬思想を直接反映するものであるから、墓制の相違は埋葬思想の相違を示すものと考えられる。さらに埋葬思想は、一般的に死後の世界観や、宗教観念とも密接な関連を有するから、蝦夷独自の墓制である末期古墳は、蝦夷の精神文化が倭人とはか

なり異なるものであったことをつよく示唆するものではないかと考える。

北海道では、七世紀以降も統縄文系の土壙墓が続き、一部で末期古墳に類似する「北海道式古墳」が築造されるという状況なので、(c)地域の蝦夷(渡嶋蝦夷)の精神文化は、さらに強く統縄文文化の伝統を保持したものであったと想像される。

以上、門外漢なりに、末期古墳の歴史的意義を簡単に検討してみた。末期古墳は、墳丘の築造をはじめとして、伸展葬の採用や副葬品の内容など、古墳文化の大きな影響を受けて成立した蝦夷の墓制であると考えられる。しかしながらそれにもかかわらず、もつとも本質的な埋葬思想の面では、統縄文文化の伝統を色濃く残した墓制だったのではないかというのが筆者の見解である。

おわりに

七世紀は東北部で歴史的に大きな変化が起こり、蝦夷文化の成立期にあたっている。前世紀までにはほぼ達成された土器文化の共通化に加えて、稲作・堅穴住居、それに馬飼などが(b)地域に広がるのもこの時期と考えられる。しかしながらこのような画期的な変化は、主として物質文化の分野にかぎられるものであった。

一方で墓制にも古墳文化の影響がおよび、末期古墳が造営されるようになるが、それを古墳文化の古墳と比べてみると、まさしく似て非なるものであって、埋葬思想においては統縄文系の土壙墓の伝統を色濃く残すものであったと考えられる。

七世紀以降も、(b)(c)地域の蝦夷は「夷語」とよばれるようになる固有の言語を使い続けたし、末期古墳の築造から推測されるように、蝦夷の精神文化や宗教、さらには生業における狩猟のウエイトの大きさなどにおいて、続縄文文化の伝統が色濃く残存していたと考える。筆者は、このような形で工藤氏のアイヌ説の再評価を継承していきたい。

蝦夷社会は社会構造においても、律令制支配に組み込まれた倭人社会とは大きく異なっており、政治的統合が未成熟な分節社会的様相を呈していたと考えられる。蝦夷社会の基礎単位は郷程度の「村」と考えられ、場合によってはそれがいくつか集まって郡程度の「村」を重層的に形成していた。⁽³⁾三十八年戦争など、律令国家との戦乱時には、さらに広汎な蝦夷集団が同盟して戦うのである。藤沢氏のいう末期古墳の「均質性」も、倭人社会と異なる蝦夷社会の構造に規定されたものとして理解できよう。

さらにこれらと並んで重要なことは、大化改新後に国家によって推進された城柵の設置と柵戸の移配による蝦夷支配は、境界領域に倭人と蝦夷の雑居という新たな状況を生み出し、蝦夷と倭人の相互関係を大きく変化させることになったことである。境界領域に雑居することになった土着の蝦夷と新来の倭人は、国家の政策によって否応なしに、「我々」と「彼ら」というエスニックな帰属意識を抱くようになっていったと考えられるのである。

民族形成においては、藤沢氏が強調するように、究極的には主観的同類意識がもつとも重要であると考える。ただしそれと同時

に、古代蝦夷のようにその論証が困難な場合には、同類意識の検証という姿勢を保持しながら、それと密接に関連する客観的指標からのアプローチを積極的に行うべきであるというのが、現在の筆者の立場である。

最後に、さきに掲げた五つの主要な民族の客観的指標のうち、残りの出自と形質的特徴について簡単にふれておきたい。

出自に関しては、『続日本紀』神護景雲三(七六九)年十一月己丑条に、陸奥国牡鹿郡の俘囚外少初位上大伴部押人が、自分の先祖は紀伊国名草郡の大伴部直で、征夷にしたがって小田郡嶋田村に到って定住したが、その後、子孫が夷に抄掠され、ときをへて俘囚になってしまった、として俘囚身分を脱して調庸民(＝公民)になりたいと願い出て許可されている記事があり、またその翌宝亀元年四月癸巳朔条にも、陸奥国黒川・賀美など一〇郡の俘囚三、九二〇人がいっせいに、同じように父祖が王民であるのに、蝦夷に抄掠されて俘囚になってしまったと主張して、同様に俘囚身分から調庸民に編入されている。

筆者は、ここでの押人等の主張には作為を感じるが、いずれにしても自分たちの祖先が王民(＝倭人)であるということ根拠に公民身分に編入されていることに変わりはない。すなわち、蝦夷と倭人は出自を異にしていると考えられていたことになる。こゝでも客観的指標の有効性が確認できる。

最後に形質的特徴であるが、意外にも蝦夷の形質的特徴にふれた文献はあまり見あたらない。わずかに『通典』(卷一八五 辺防)に、顕慶四年(六五九)に倭国使に従って入朝した弓矢の名手の

蝦夷の鬚(あごひげ)が四尺もあつたことが特記されているのが目につく程度である。この記事などを根拠に、蝦夷は多毛であつたといわれることが多いが、蝦夷が長鬚もしくは多毛であることを示す史料は、これ以外にはほとんどみあたらない。したがって、この人物は蝦夷の異相性を唐に対して強調するために、意図的に選ばれた可能性が高い⁽³⁾。

ただし、形質人類学の一分野である骨考古学の研究によれば、頭骨の特徴からみると、古墳時代の東北地方の人々には、縄文時代人の特徴を色濃く残す個体が含まれるという解析結果が出てい⁽³⁾る。まだまだ蝦夷に関わる可能性のある人骨資料は多くないので、今後の研究の進展に待つところが多いと思われるが、この問題の検討も蝦夷論にとつては重要な研究課題であらう。

注

- (1) 工藤雅樹「蝦夷アイヌ説と非アイヌ説」(『蝦夷と東北古代史』吉川弘文館、一九九八年。初出は一九八三年。同氏「古代蝦夷」(吉川弘文館、二〇〇〇年)など。
 (2) 拙稿「蝦夷論と東北論」(『歴史のなかの東北』(河出書房新社、一九九八年)。拙著「蝦夷の地と古代国家」(『日本史リブレット11』(山川出版社、二〇〇四年)。拙著「古代の蝦夷と城柵」(『歴史文化ライブラリー176』(吉川弘文館、二〇〇四年)。拙稿「『蝦夷』とは何か―文献史学の立場から―」(『骨考古学と蝦夷・隼人』(『市民の考古学12』(同成社、二〇一二年)など。
 (3) 藤沢敦「北の周縁域の墳墓」(『第六回九州前方後円墳研究会 前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』二〇〇三年)、同「倭と蝦夷と律令国家―考古学的文化の変移と国家・民族の境界―」(『史林』

- 九〇―一、二〇〇七年)など。
 (4) 伊東信雄「考古学上から見た東北古代文化」(『東北史の新研究』文理図書出版社、一九五五年)など。
 (5) 高橋富雄「蝦夷」(『日本歴史叢書2』(吉川弘文館、一九六三年)。
 (6) 工藤氏、前掲注(1)「古代蝦夷」。
 (7) 拙著、前掲注(2)「古代の蝦夷と城柵」など。
 (8) さしあたっては、青柳まちこ編・監訳「エスニック」とは何か―エスニシティ基本論文選―(新泉社、一九九六年)、マルコ・マルティニエツロ著・宮島喬訳「エスニシティの社会学」(『文庫クセジュ』(白水社、二〇〇二年)など参照。
 (9) 藤沢氏、前掲注(3)論文。
 (10) なお、ブルース・バートン「日本の境界―前近代の国家・民族・文化―」(青木書店、二〇〇〇年)がバルトらの民族論を紹介し、主観主義的立場から従来の蝦夷論の批判を行っているのは、先駆的な研究として評価できよう。
 (11) 「人種」概念には、社会的にはむろんのこと、学術的にも大きな問題があり、近年は使用を避ける傾向が強い。「民族」が社会的、文化的概念であるのに対して、「人種」は生得的、生物学的概念と説明されることが多いが、それは正確とはいいがたく、「人種」もまた、社会の成員が意味を見出した特定の身体的差異にもとづくイデオロギー的構築物という性格をもつ(アンソニー・ギデンズ著・松尾精文ほか訳「社会学 第五版」而立書房、二〇〇九年)。
 (12) 主観主義の立場からする民族の客観的指標と主観的指標との関係については、名和克郎「民族論の発展のために―民族の記述と分析に関する理論的考察―」(『民族学研究』五七―三、一九九二年)の整理が有益である。名和氏は、「外面的特徴」(客観的指標)と「帰属意識」(「我々」意識)の間に「循環的關係」があることを認めるが、両者の関係は「帰属意識」が生じてはじめて作動するという意味で、「帰属意識」の方が「決定的」であるとす。また名和氏は、バルトは「民族の文化的諸特性に関心を

- 向ける必要がないと言っている訳ではないし、「客観的」な諸特性の存在自体を否定したのでは全くない」とし、民族の「主観的定義と客観的定義を同様に重視する立場……は、現象の単なる記述としてならば全く正しい。しかし、……こうした立場が結論として述べられることには、大きな問題がある」ともいつている。
- (13) 福井勝義「多様な民族の生成と戦略」(『アフリカの民族と社会』(世界の歴史24) 中央公論社、一九九九年)。
- (14) 内堀基光「民族論メモランダム」(『人類学的認識の冒険—イデオロギーとプラクティス—』同文館出版、一九八九年)。
- (15) 古代の「渡嶋」が北海道を指すと考えられることは、拙稿「阿倍比羅夫北征記事の基礎的考察」(『東北古代史の研究』吉川弘文館、一九八六年)を参照。
- (16) 今泉隆雄「律令国家と蝦夷」(『宮城県の歴史』(県史4)、山川出版社、一九九九年)。
- (17) 内堀氏、前掲注(14)論文。
- (18) 拙稿「九世紀奥郡騷乱の歴史的意義」(『律令国家の地方支配』吉川弘文館、一九九五年)。
- (19) 『続日本紀二』(新日本古典文学大系13)(岩波書店 一九九〇年) 八九頁脚注二二、および拙稿「養老四年の蝦夷の反乱と多賀城の創建」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八四、二〇〇〇年)参照。
- (20) 工藤雅樹「東北北部における政治的社会的形成」(『古代蝦夷の考古学』吉川弘文館、一九九八年。初出は一九八二年)。
- (21) 拙稿「諸国移配蝦夷からみた蝦夷文化」(前掲注(2))「古代の蝦夷と城柵」、同「蝦夷移配策の変質とその意義」(『九世紀の蝦夷社会』高志書院、二〇〇七年)。
- (22) 鐘江宏之「元慶の乱と鹿角・津軽」『十和田湖が語る古代北奥の謎』(校倉書房、二〇〇六年)。
- (23) 福井氏、前掲注(13)「多様な民族の生成と戦略」。
- (24) 遠山美都男「日本古代の民族と言語—訳語・通事の基礎的研究—」『古
代王権と大化改新—律令制国家成立前史—』(雄山閣出版、一九九九年。初出は一九九二年)参照。
- (25) 拙稿「蝦夷の戦闘能力と蝦夷社会」(前掲注(2))「古代の蝦夷と城柵」。
- (26) 阿部義平「蝦夷と倭人」(『日本史のなかの考古学』青木書店、一九九九年)。
- (27) 八木光則「古代蝦夷社会の成立」(『ものが語る歴史21』(同成社、二〇一〇年)。
- (28) 高橋信雄「東北北部の古墳文化と続縄文文化」(『櫻井清彦先生古稀記念論文集二十一世紀への考古学』(雄山閣出版、一九九三年)、辻秀人「蝦夷と呼ばれた社会」(『古代蝦夷の世界と交流』名著出版、一九九六年)、藤沢敦「倭の「古墳」と東北北部の「末期古墳」」(『古墳時代の政治構造』青木書店、二〇〇四年)、同「列島の古代史における阿光坊古墳群」『阿光坊古墳群発掘調査報告書』(おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第一集)『おいらせ町教育委員会、二〇〇七年)、同「墳墓から見た古代の本州島北部と北海道」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一五二、二〇〇九年)、八木氏、前掲注(27)「古代蝦夷社会の成立」など参照。
- (29) 高橋與右衛門「岩崎台地遺跡群発掘調査報告書—東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査—」(『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集』一九九五年)。
- (30) 八木氏、前掲注(27)「古代蝦夷社会の成立」。
- (31) 拙稿、前掲注(25)「蝦夷の戦闘能力と蝦夷社会」。
- (32) 拙稿、前掲注(2)「蝦夷」とは何か。
- (33) 瀧川渉・川久保善智「古人骨からみた東北古代人」(前掲注(2))「骨考古学と蝦夷・隼人」。
- [付記] 本稿は、二〇一二年十二月十五日に本学で開催されたアジア流域文化研究所・博物館共催国際シンポジウム「日中韓周縁域史研究(はじめ)」で報告した「古代蝦夷研究の歩み」をふまえて、新たにまとめたものである。

栄山江流域の最近の考古学的調査の 成果について

金 容 民 (韓国国立扶餘文化財研究所)

(崔 英姫 (韓国国立江陵原州大学校)・佐川 正敏 (東北学院大学) 共訳)

1. はじめに

韓国の栄山江流域における古代社会の実態を解明するため、今まで多角的な調査と研究が行われてきた。従来の研究は、巨大な墳丘からなる全羅南道羅州市にある潘南（バンナム）古墳群の造営集団の性格に関する問題に集中してきた。とくに、栄山江流域で確認された独特の文化要素である大型甕棺を埋葬施設として使用した古墳の築造集団や性格が、論議の中心であった。

初期には、栄山江流域古墳の発掘調査を遂行した日本研究者を中心に、墳丘の一部の特徴と遺物を日本の場合と比較して、栄山江流域の古墳を「倭人の墓」と理解する意見があった（朝鮮総督府 1920、有光教一 1940）。しかし、この問題について韓国人による発掘調査が本格的に行われ、百済という大きな枠のなかで論議されながらも、「甕棺古墳」を「馬韓」と結び付けようとする論議が台頭していた（李榮文 1974、成洛俊 1983）。さらに、甕棺古墳が馬韓の墓制である認識が一層強くなりつつ、百済とは異なる独立的な政治集団の墓とする見解も登場した（崔夢龍 1987・1988、林永珍 1997）。それとともに、馬韓という歴史的用語を使わず、「甕棺古墳社会」という用語を作ることによって、独自性をより強調する論議も提起された（姜鳳龍 1998）。

栄山江流域に甕棺古墳を築造した社会を、百済とは異なる独自の政治集団と規定しながらも、その内部の社会構造を分析し始めたのは、最近のことである（成洛俊 1996、李正鎬 1999、李暎澈 2001、金洛中 2009）。それにも関わらず、栄山江流域の百済併合の時期についても論争が続いている。

最近になって、全羅南道高興郡の雁洞（アドン）古墳（林永珍 2011）、新安郡のペノル里古墳（李正鎬 1999）など、栄山江流域に前方後円形古墳が登場する以前の倭系要素をもつ墓が発見されている。とくに、栄山江流域の中心地域に位置する霊岩県の沃野里（オッヤリ）方台形古墳（国立羅州文化財研究所 2012）もその1つとして、伽耶と倭系の要素が確認された。これらの遺跡の発見を通して、栄山江流域の在地集団は、すでに伽耶と倭をはじめとする外部世界との文化的接触を持続的に推進してきたことがわかる。この

ような現状は、4世紀代の日本列島において栄山江流域の遺物がしばしば出土していることから確認できる。

本文では、最近の栄山江流域における調査および研究の成果を中心として簡単に紹介し、これからの研究方向について考えてみたい。

2. 栄山江流域の最近の調査成果

(1) 羅州・伏岩里遺跡の発掘調査

羅州・伏岩里（ボガムニ）遺跡の発掘調査（国立羅州文化財研究所 2010・2011a）は、全羅南道羅州市多待面伏岩里 874-7 番地一帯に対する発掘調査として、伏岩里古墳群（史跡第 404 号）とその築造勢力の性格を解明し、栄山江流域の古代文化の性格を解明するための基礎資料を確保することを目的として、2006 年から国立羅州文化財研究所が推進してきた（図 1）。

羅州・伏岩里古墳群は、1995 年と 1996 年に全南大学校博物館によって調査が遂行されたことで確認された。当時には 1、2 号墳の間に位置する甕棺墓と周溝、1 号墳の石室などが検出された。その後、1996 年～1998 年に国立文化財研究所と全南大学校博物館によって伏岩里 3 号墳で全面的な調査が遂行された。調査の結果、甕棺墓、石槨墓、石室墳などの 41 基の多様な埋葬遺構と金銅製履（靴）、銀製冠飾、裝飾太刀などの多種多様な遺物が確認された。そのような成果を通して、栄山江流域の甕棺古墳社会が約 400 年にわたって固有の多葬伝統を維持しつつも、石室墳または石槨墓の新しい墓制や外来文物の受容によって変化してい



図 1. 羅州・伏岩里遺跡全景（国立羅州文化財研究所 2010）

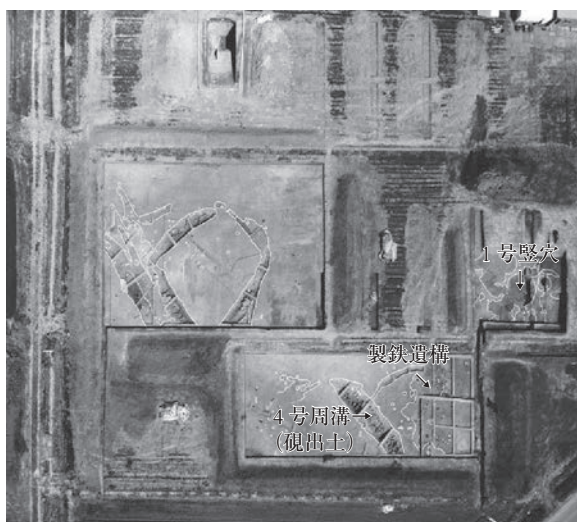


図 2. 伏岩里遺跡の周溝全景（国立羅州文化財研究所 2011a）

く過程が良く理解できるようになった。とくに、伏岩里3号墳・96石室墓(5世紀後葉～6世紀前葉)の場合、石室墳の内部に4基の甕棺を安置したことは、土着甕棺墓の伝統を継続しながらも、外来要素である石室墳を受容したことを、そして5号横穴式石室墓からは百済中央の政治的影響を意味する銀製冠飾が出土し、6世紀中葉頃の百済泗泚期の中央と地方との関係をよく示している。

羅州・伏岩里古墳群の周辺地域(伏岩里遺跡)に対する発掘調査は、古墳の周辺で集落を確認して、伏岩里古墳群の築造勢力の性格を解明するための

調査として開始されたが、2006年～2010年の調査では古墳の周溝4基、溝状遺構1基、炉跡3期、竪穴遺構10基等が確認された(図2)。とくに、竪穴遺構の内部からは百済の木簡を始めとする銘文土器、鉄滓などが出土した(図3)。また、既存の伏岩里古墳群周辺からも新たに周溝のみ残った遺構だが、甕棺墓と一緒に発見された。この古墳は、台形墳丘墓として伏岩里古墳群の造成時期(3世紀中葉～7世紀前葉)の中でも4世紀から5世紀頃に該当するものとして理解された。とくに、4号周溝(図2)で出土した円筒形土器は、伏岩里2号墳下層から出土した円筒形土器と器形や大きさなどが類似するので、同じ時期に存在した古墳と推定された。そして、伏岩里古墳群一帯には多数の台形墳が存在したと見られ、方向に関わらず空間を積極的に活用していたと推定された。また、4号周溝の埋土や遺物出土の様相から見ると、墳丘の水平あるいは垂直方向に拡張が行われたことが推定できる。以上のような調査結果は、伏岩里古墳群の分布範囲と時期によって墳丘造成と立地が変化した過程を研究する際に、貴重な資料として評価される。

また、4号周溝の南東部からは製鉄遺構と竪穴遺構が確認され、古墳群の外側に鉄生産遺跡が存在したと判断される(図2)。とくに、高温で形成された鉄滓と炉壁体などが確認され、精錬・鍛冶遺構と推定される。これは、湖南地方(全羅南・北道の総称)で従来確実な製鉄遺構が確認されなかった古代製鉄関連の研究に対して、新たな転機をもたらしてくれた。

また、何よりも重大な成果は、百済の一地方からはじめて木簡が出土したことである(1号竪穴:図3)。木簡として分類された計65点の中の13点からは墨書が確認され、太極文様が描かれた木製品も2点出土した(図4)。国内で確認された木簡の中で最大で最長



図3. 伏岩里遺跡の竪穴遺構全景(国立羅州文化財研究所2010)

の木簡と、最初の封緘木簡、村落文書の木簡などの多様な形態と内容を含んでおり、6～7世紀の榮山江流域を中心とする韓国古代史研究にとって非常に重要な資料として評価される。

最後に、「官内用」、「豆脰舎」銘の銘文土器と硯、百濟瓦片などが出土し、古墳群の周辺に百濟の地方官庁が設置され、文書行政が行われていたことを確認することができた。とくに「豆脰

舎」は、百濟末期の榮山江流域の地方行政の中心治所である豆脰県が、伏岩里一帯に存在したことを示す。すなわち、木簡の内容や他の出土遺物から見ると、6世紀中葉から羅州・伏岩里一帯は百濟中央との密接な関係の中で地方行政の中心地として機能していたことが推定できる。



図4. 伏岩里遺跡出土木簡（国立羅州文化財研究所 2010）

（2） 靈岩・沃野里方台形古墳の発掘調査

靈岩・沃野里「方台」形古墳（第1号墳：「方台」は韓国の古楽器を支える角錐台形の器具）は、沃野里の長洞集落の後方、海拔15m内外の低い丘の頂上に立地する（写真5：国立羅州文化財研究所 2012a）。靈岩地域には、内洞里（ネドンリ）古墳群、沃野里（オッヤリ）古墳群、萬樹里（マンスリ）古墳群、臥牛里（ワウリ）甕棺墓、内洞里双墳、新燕里（シンヨンリ）古墳群、ジャラボン古墳など、49群187基の古墳が散在し、古代社会においては政治的に中心的な位置を占めていた。この中で靈岩・沃野里方台形古墳は、墳丘の規模が約30mの大型であるだけでなく、単独で存在しており、以前から古墳の正確な規模や形態、そして構造に関する疑問があった。

そこで、古墳周囲の毀損を防止し、古墳の性格を明かにして、整備および復元の基礎資料を確保する目的で、2009年～2011年にかけて発掘

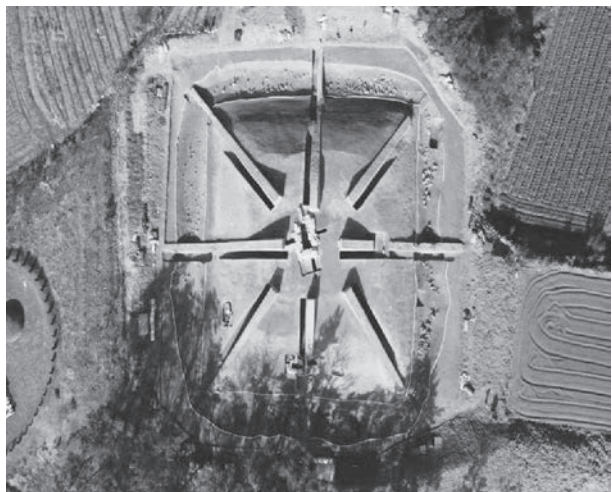


図5. 靈岩・沃野里方台形古墳の全景（国立羅州文化財研究所 2012a）

調査が実施された。

調査の結果、霊岩・沃野里方台形古墳は栄山江流域ですでに調査された古墳と比べて、クモの巣状の分割盛土技法や墳丘とともに構築された墓坑の存在を通して、石室の同時築造、そして石室壁面の木柱設置などの独特な特徴を見せている(図6、7)。何よりも、栄山江流域の古代社会において周辺地域との文化交流の様相を探究できる重要な位置を占めている。

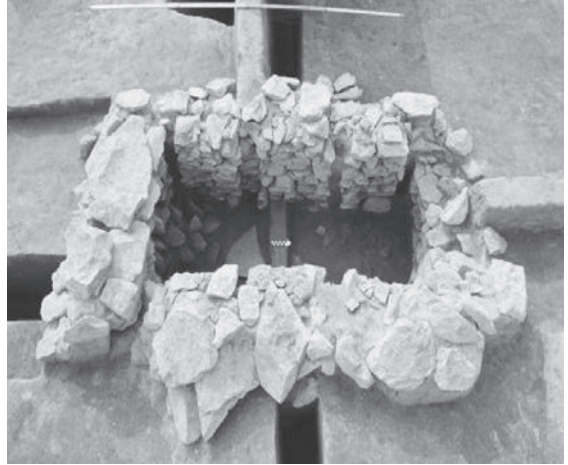


図6. 霊岩・沃野里方台形古墳の石室墓全景(国立羅州文化財研究所 2012a)

(3) 羅州・五良洞窯跡の発掘調査

羅州五良洞(オリヤンドン)窯跡(史跡第456号)は、2001年に東新大学校文化博物館によって発掘調査されて以後、栄山江流域の三国時代の大型甕棺生産集団の研究において重要な遺跡として評価されてきた。しかし、発掘調査が一部地域に制限されたため、この遺跡が大型甕棺を専用に焼成した窯なのか、それとも土器窯なのかに関する学術的究明が長らく提起されてきた。したがって、羅州・五良洞窯跡の性格究明と栄山江流域における古代勢力の生産および流通過程の復元に必要な基礎資料を確保する目的で、2007年から中・長期調査の計画を立て、年次的な発掘調査を進められている(国立羅州文化財研究所 2011b)。

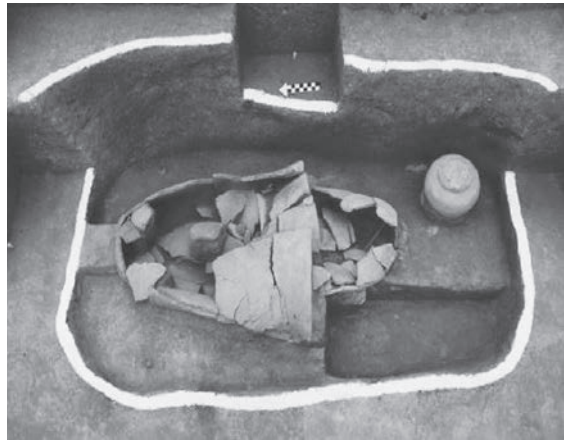


図7. 霊岩・沃野里方台形古墳の第1号甕棺墓(国立羅州文化財研究所 2012a)

2011年まで5次わたる発掘調査の結果、窯33基、窯廃棄場1基、作業場1基と墳墓遺跡10基が確認された(図8)。この中で窯8基と廃棄場、作業場、墳墓遺構10基、竪穴・溝状遺構などの25基に対して発掘調査が行われ、多量の甕棺

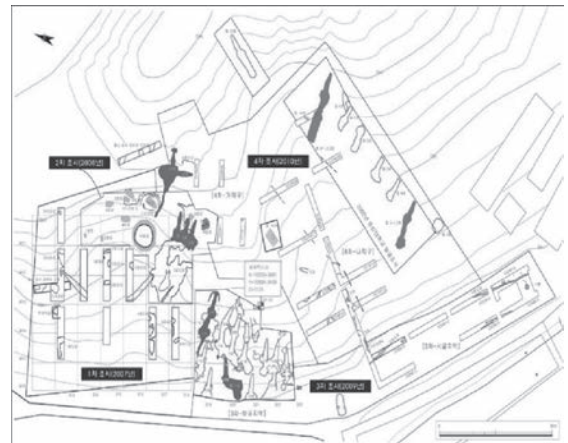


図8. 羅州・五良洞窯跡遺構配置図(国立羅州文化財研究所 2011b)

片と土器片などの遺物が出土した。その結果、窯は栄山江流域に甕棺墓が盛行した時期に大型甕棺を焼成した窯跡であることが確認された(図9)。とくに、5号窯の灰原から全体の1/3程を残した状態で大型甕棺の破片が出土し、大型甕棺の焼成に利用された窯であることをより具体的に明らかにする資料が確保された。これまでの調査結果から見ると、この遺跡の一带に5世紀から6世紀初頭にかけて大規模な大型甕棺生産集団が存在したと判断される。また、窯を一部破壊して造成された墳墓は、6世紀中葉以後の年代に該当するので、窯の操業時期はそれ以前であったことがわかる。



図9. 羅州・五良洞窯跡1~3号窯跡全景(国立羅州文化財研究所 2011b)

3. 栄山江流域の古墳の特性と甕棺墓

(1) 栄山江流域の古墳についての諸見解

栄山江流域で甕棺古墳を構築した社会が百済に編入された時期については、これまでは『日本書紀』神功紀の記録に基づいて、4世紀後半の百済近肖古王代であると推定されてきた(李丙燾 1970、李基東 1987、盧重国 1987)。しかし、栄山江流域では4世紀後半以後に甕棺古墳の造りが続き、その規模がむしろ大きくなるなど、より発展する様相が確認された。それによって、栄山江流域が百済に編入された時期についていろいろな説が提起されただけでなく、甕棺古墳を築造した勢力についても馬韓諸小国の支配層であるとか(成洛俊 1983)、さらに5世紀末まで栄山江流域は百済の直接支配を受けなかったという見解(李道学 1995)も提起された。甕棺古墳社会の性格については、古代複合社会(崔盛洛 1996)や、政治的統合が達成された段階(朴淳発 2000)として考える意見がある一方、甲冑や武器類が見られないことから、武力的な要素が弱く、統合の程度も低かったという意見も提起された(表2: 金洛中 2009)。

そして、栄山江流域が百済と対立する独立的政治勢力として存在したかについても、いろいろな意見が提起された。栄山江流域が百済に征服された以後も、百済が全領域に対して統一された支配網を構築することが困難であったとする見解があり(李基東 1996)、栄山江流域の甕棺墓を馬韓の盟主国である目支国の首長墓であるという見解も提起された(崔夢龍 1986)。また、百済の影響圏外で独自の政治集団に成長した馬韓勢力として、百済が懐柔の目的で提供した金銅製冠、金銅製靴などの威信財が出土した地域は、百済の直

接統治が困難な独自の勢力であったという見解もある（表1：林永珍 1997、2010、2011）。

また、甕棺古墳の高塚化、円筒形土器の使用、副葬遺物の変化とともに前方後円形墳の登場は、栄山江流域の甕棺古墳社会と百済との関係を探究する際に、重要な要素として認めることができる（李正鎬 2012）。とくに、栄山江流域で新たに登場した前方後円形墳と初期の横穴式石室については、様々な見解が提起されてきた（図10）。前方後円形墳の出自については、移民説、倭系百済官僚説、在地集団説に大きく分けられる。

移民説は、栄山江流域の集団が日本の九州地域に移住した後、帰郷、婚姻、または亡命によって栄山江流域に再移住した際に、前方後円形墳を築造したという説である（林永珍 1997a、2002、2005）。

このような側面から、栄山江流域が『宋書』倭国伝の慕韓地域に当たると想定し、5世紀後半に日本列島内外の変革によって九州の諸勢力が栄山江流域へ大挙移住した後、前方後円形墳を作ったという説もある（東潮 1995、2001）。一方、栄山江流域の前方後円形墳が、横穴式石室、立地、墳形、墳丘祭祀、羨道および墓道の遺物副葬などにおいて、日本の九州地方の埋葬方式と類似することから、栄山江流域に定住しながらも百済中央政府の支配を受けた倭人によって築造されたと考える見解もある（洪潜植 2005）。また、日本の近畿地方で栄山江流域と関連する遺物が出土することから、近畿地方へ移住した馬韓人が東城王の帰国とともに帰郷し、栄山江流域へ配置されて前方後円形墳を築造したという見解も提起された（徐賢珠 2007）。

一方で倭系百済官僚説は、栄山江流域が4世紀後半以来、百済に服属したので、前方後

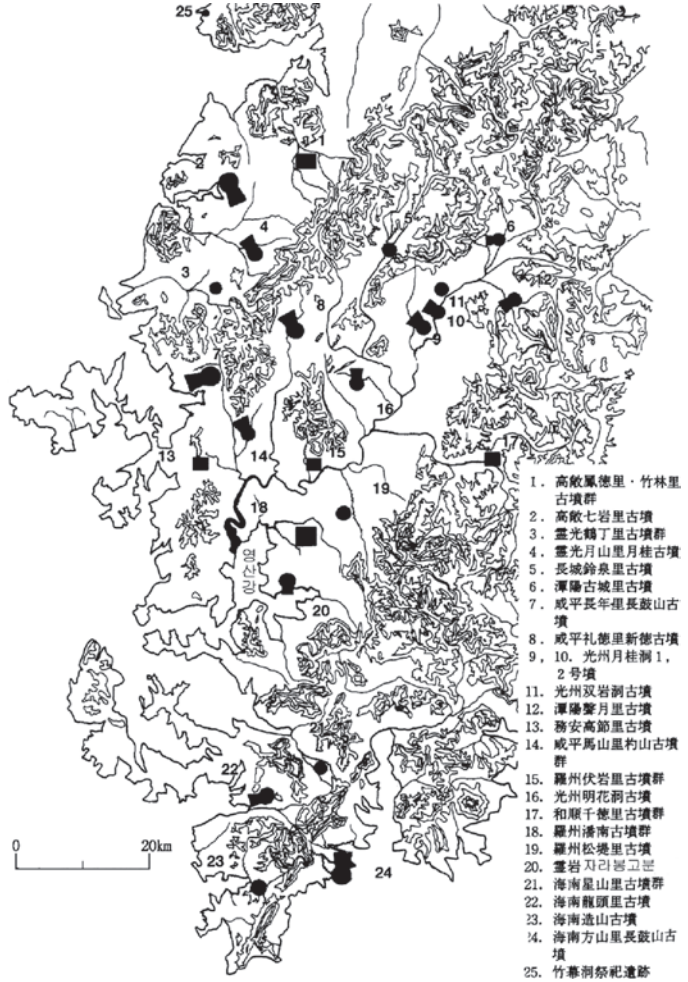


図10. 栄山江流域の前方後円形墳の分布図（金洛中 2009）

円形墳を築造した勢力が、栄山江流域の土着勢力を牽制するために、百済の中央政府から派遣された倭系百済官僚であったと見る説である（朱甫暎 2000）。このような脈絡によって、栄山江流域における前方後円形墳の偏在性、散在性、非継続性、短期性から見た場合、前方後円形墳の築造勢力が栄山江流域に対する領有化政策の一環として倭国から移住した倭系百済官僚であったという見解も提起された（山尾幸久 2001）。また、以上の見解をさらに発展させ、栄山江流域の前方後円形墳は周辺の在地首長とは関係なく突然出現したので、その築造勢力が北部九州から有明海沿岸にかけて存在した複数の有力豪族であったと考える見解も提起された（朴天秀 2006）。とくに、前方後円形墳は百済熊津期後半に限定して築造されたこと、孤立して分散配置されたこと、そして百済の威信財が副葬されたことから、前方後円形墳を築造した勢力が百済王権と倭王権の両者に属したまま土着勢力を牽制し、対倭外交および大伽耶攻略のため、百済から一時的に派遣された倭系百済官僚として見た（朴天秀 2006）。

一方、栄山江流域の在地勢力が、すでに4世紀後半から九州との交流を通じて前方後円形墳を墓制として導入した、という在地説もいろいろと提起されてきた（小栗明彦 2000）。また、6世紀まで百済領域に編入されず、百済、倭、伽耶と均等に関係をもちつつ、倭との交流を通じて前方後円形墳を造営したという説もある（岡内三眞 1996）。そして、百済に服属せず独自性を維持していた在地勢力が、5世紀後半～6世紀前半に九州地域との交流を通じて、墓制を導入したという説も提起された（土生田純之 1996、2000）。栄山江流域の前方後円形墳は、百済-栄山江流域-九州勢力-倭王権を繋ぐ対外関係ネットワークが、百済-大和王権という双方向的な構造として再編される過程で生じた栄山江流域の在地首長層の一時的な活動の産物だとする見解もある（朴淳発 1998、2000）。また、5世紀後半に九州系の石室が日本列島の東海地方以西の各地域に伝播する過程のように、栄山江流域の前方後円形墳の築造勢力も在地首長として捉える見解（柳澤一男 2001）や、栄山江流域の在地首長層が当時の社会的変化に積極的に対処するための努力として前方後円形墳を築造したという説もある（崔盛洛 2010）。前方後円形墳は、漢城（百済の最初の首都）の陥落で百済の影響力が弱くなったことにより、栄山江流域の集団が百済、伽耶、倭の情勢変化に対応して勢力を伸ばし、倭との交流過程で日本列島内の特定集団と相互関係を強調するための象徴として、各地から取捨選択しながら築造したという説もある（金洛中 2009）。

しかし、栄山江流域の墓制変化様相について従来と異なる視点を与えてくれる資料が、つぎつぎ発見されている。栄山江流域で甕棺墓がもっとも発達した段階でも、古墳中心の墓制に甕棺墓とともに、木棺あるいは木槨墓が共存する様相（霊岩・新燕里古墳群4号墳、霊岩・沃野里方台形古墳など）が確認されている。さらに、栄山江流域の甕棺墓の中心圏から離れた地域では、非常に独特な墓制が現れる。海南郡の万義塚1号墳からは百済、新羅、伽耶、倭系の遺物が副葬された石槨墓が築造され、万義塚3号墳からは百済様式の横

口式石室が築造された。このような点から見て、栄山江流域の甕棺古墳の中心地域でも甕棺古墳が統一的な墓制として完全に確立できず、周辺地域では甕棺墓とまた異なる墓制が登場する。また、新村里9号墳、徳山里4号墳を含む潘南古墳群の築造時期を5世紀後葉～6世紀前半頃と考える見解も提起された（徐賢珠 2007、吳東墀 2009）。これらの見解によれば、栄山江流域で甕棺古墳が定形化し、高塚化しつつ、中心的墓制として定着した時期は、栄山江流域に新たな墓制が登場した以後であると見られる。そして、霊岩・沃野里方台形古墳には墳丘の中央に横口式石室を作り、墳頂部に円筒形土器を立て並べた様相が現れたが、その墳丘には在地的な甕棺墓も共存する様相が現れた。さらに、墳丘や石室の築造方法を含めて、出土遺物からも百済、伽耶、倭と関連づけることができる要素が確認された。

以上のような最近の調査において、栄山江流域の在地的な要素とともに、百済、新羅、伽耶、倭などの周辺地域と関連する様々な要素が時間差をおいて現れたり、または一緒に現れる様相が確認されている。このような様相をどう解析すべきかについては、これからより細かな検討が必要であろう。ただし、他の地域と違って栄山江流域が、墓制に関してはかなり開放的な環境であったことは確かなようである（李正鎬 2012）。

(2) 栄山江流域における甕棺墓の変遷過程

甕棺墓とは、日常用の土器や棺としてだけ使う目的で製作された大きな甕の中に遺体を安置したり、骨を入れておく墓のことをいう。韓半島では新石器時代に始めて現れ、朝鮮時代の幼児葬に至るまで長い間使用されてきた埋葬風習である。とくに、栄山江流域では3世紀頃から専用甕棺を使用した独特な甕棺古墳文化が、多葬の伝統とともに発達し、他の地域との違いを見せている（図11～13）。

栄山江流域における甕棺墓は、今までの研究結果によると、甕棺の形態や埋葬方式などから、黎明期（鉄器時代～2世紀頃）- 発生期（3世紀頃）- 発展期（4世紀頃）- 盛行期（5世紀頃）- 衰退期（6世紀半ば頃）という5段階に変化している（図14）。栄山江流域の初期（黎明期）の甕棺墓は、中心的墓制である周溝を備えた土壙墓に付け足されたり、付属的な墓として使用された（図15）。

栄山江流域では紀元後3世紀代（発生期）に入ると、日常用ではなく、墓だけにもっぱら使用するための専用甕棺が登場する（図16）。初期の専用甕棺は、口縁部がラッパのように広がり、頸部が狭く、胴部がまた広がるというように、部位ごとの屈曲がかなり大きい特徴がある。

紀元後4世紀代（発展期）には、栄山江流域の台形墳の墳丘で甕棺墓が木棺墓とともに中心的な



図11. 光州・新昌洞遺跡出土の甕棺墓（国立羅州文化財研究所 2012b）

埋葬施設として確立し、甕棺の形態も外反する口縁部と突起がついた底部をもつ（図17）。とくに、甕棺が中心的な埋葬施設になり、墳丘が水平に拡張されて大型化する傾向を帯びる。

甕棺古墳が全盛期を迎えた紀元後5世紀代（盛行期）には、栄山江流域固有の地域色を帯びた全長2mもあるU字型の専用甕棺が中心的埋蔵主体施設として使用された（図18）。羅州・潘南地域を中心に、墳丘が水平・垂直へ拡張しながら大型化した。また、もっとも典型的なU字形甕棺が中心埋葬施設である新村里9号墳からは、金銅製冠、金銅製履（靴）、装飾太刀などの威勢品が出土し、当時の甕棺古墳の築造勢力の政治的位相が推測できる（図13）。

6世紀（衰退期）になると、栄山江流域に百済の地方支配体制が整備され、百済の領域に編入された。この過程で甕棺古墳は、古墳の中心的な埋葬施設の位置を石室墳に譲り渡す。また、甕棺の形態も典型的なU字型から変形された形態が登場した（図19）。



図12. 羅州・大安里バンドゥ古墳の甕棺墓（国立羅州文化財研究所2012b）

4. 大型甕棺の製作技法の復元

栄山江流域の甕棺墓は、大型化、地上化されるなど、他の地域とは区別される独特な埋葬風習と変化の過程を見せ、百済とは異なる独自の勢力の文化として理解されている。しかし、ほとんどの研究は甕棺文化に対する政治社会的論議を中心に進められており、生産遺跡や甕棺の製作技術などの調査・研究の成果に基づく、より細密な当時の社会文化への



▲新村里9号墳の甲・乙・丙棺の出土状況



▲新村里9号墳の乙棺から金銅製冠、金銅製履（靴）、装身具などの各種の遺物が大量に出土



◀新村里9号乙棺の主棺と副棺



▲金銅製冠



▲金銅製履（靴）



▲環頭太刀



▲鉄製刀子ほか



▲金銅製装身具ほか



▲ガラス玉

図13. 新村里9号墳の甲・乙・丙甕棺墓および出土遺物（国立羅州文化財研究所 2012b）

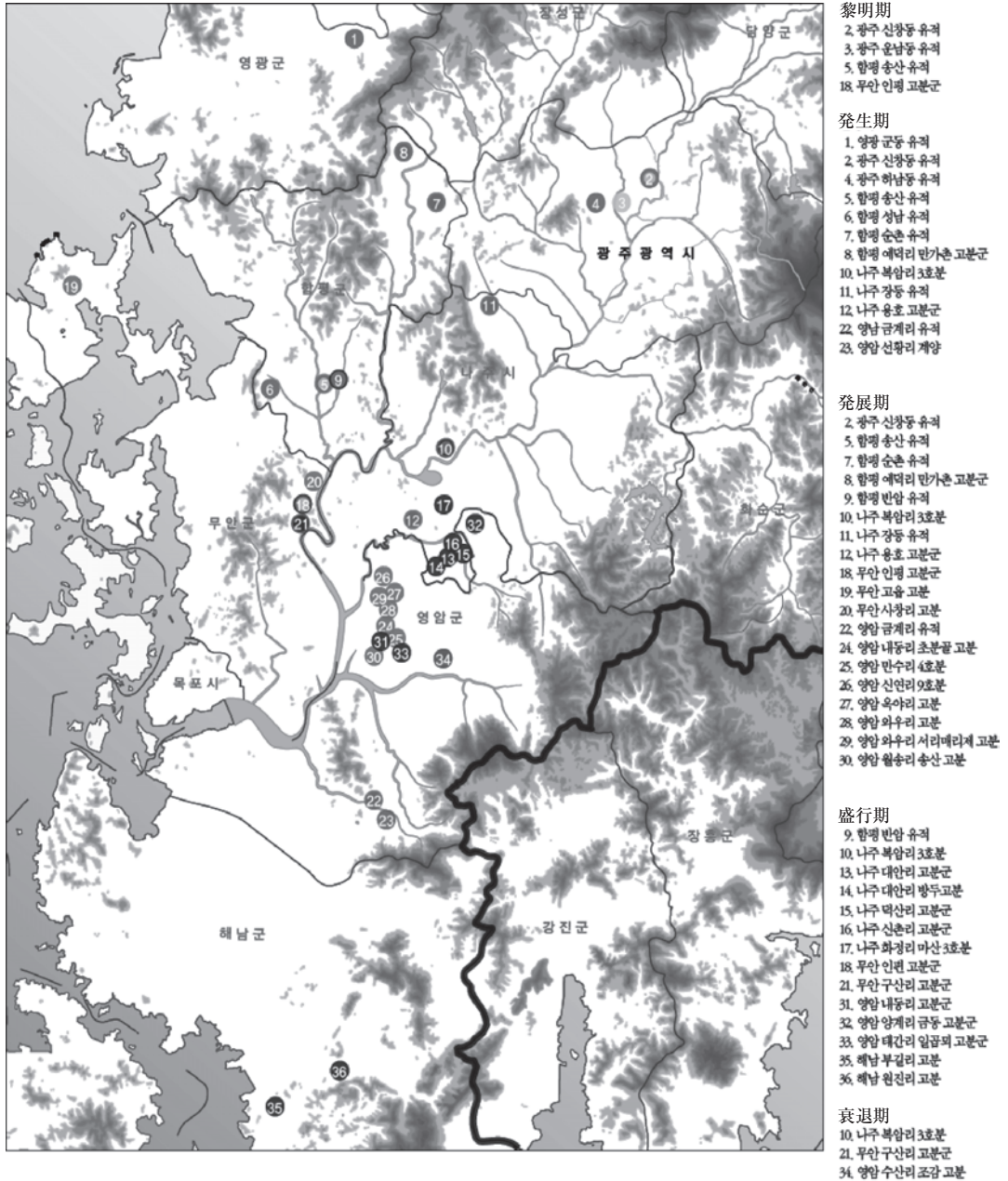


图 14. 榮山江流域における甕棺変遷時期ごとの甕棺墓遺跡の分布図 (国立羅州文化財研究所 2012b)



図 15. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「黎明期」の甕棺 (国立羅州文化財研究所 2012b)

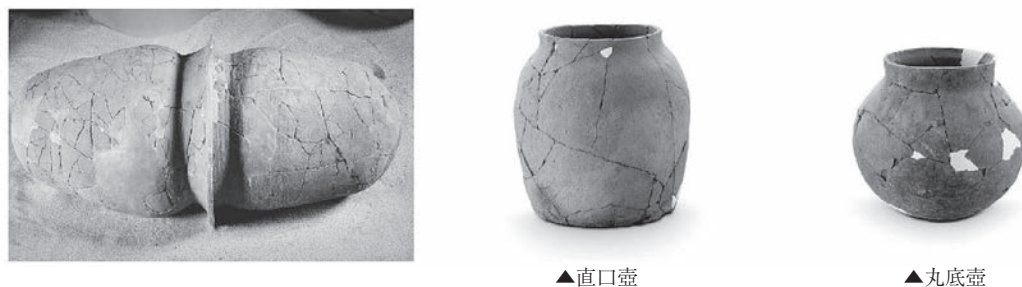


図 16. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「発生期」の甕棺と副葬土器 (国立羅州文化財研究所 2012b)

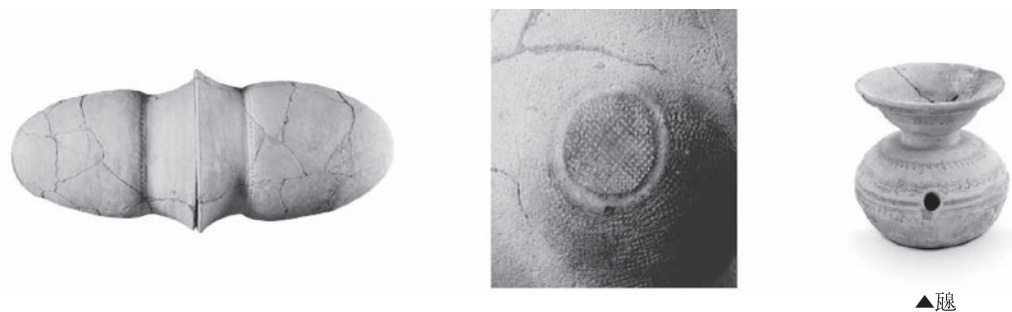
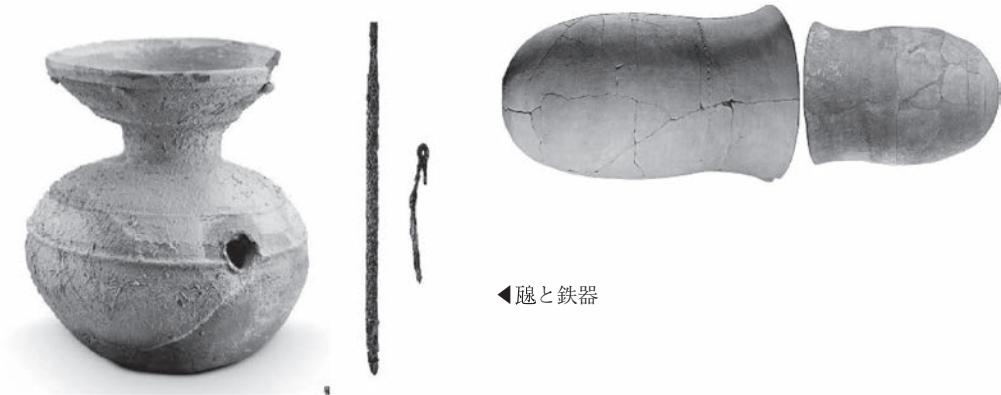


図 17. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「発展期」の甕棺と甗 (国立羅州文化財研究所 2012b)

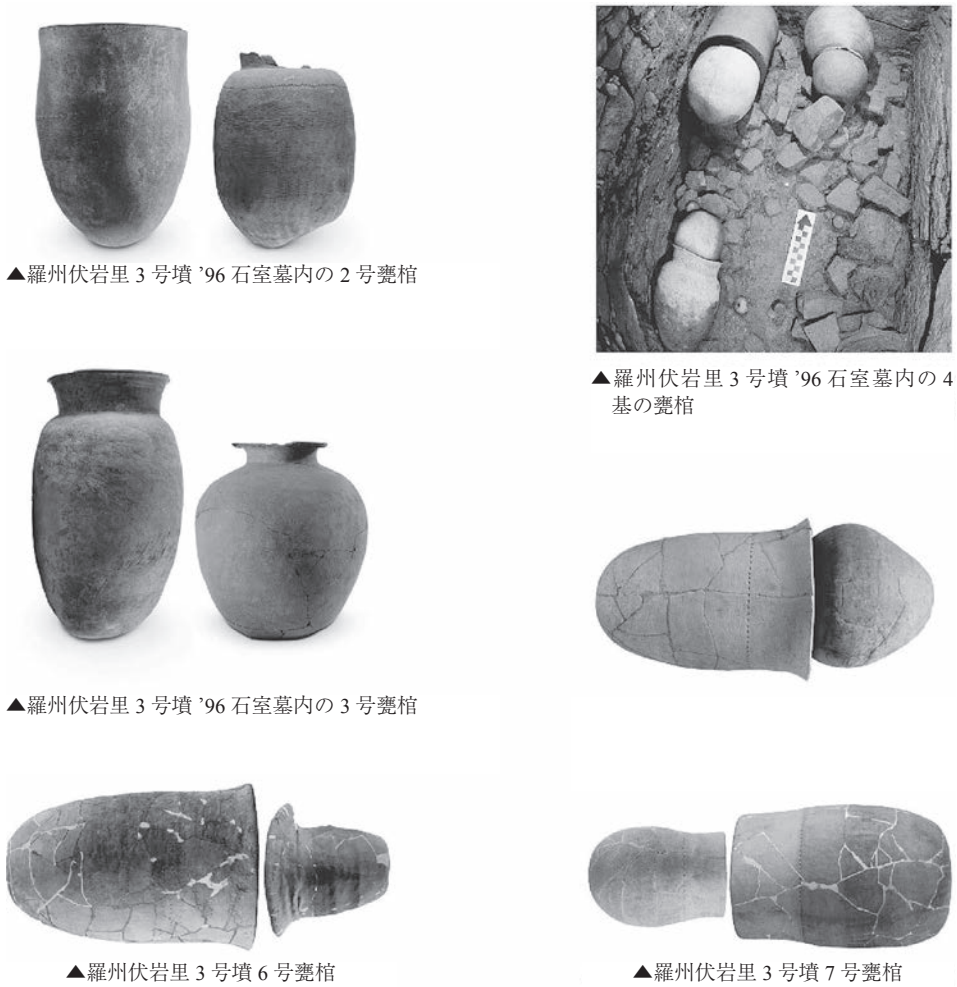
接近の試みは、まだ不十分である。また、大型甕棺の製作技法においても、科学的分析が併行されなかったため、資料解析に対する実際的なアプローチや検証作業は不十分であった。

このような問題点を解決するために、国立羅州文化財研究所では2008年から「大型甕棺製作の古代技術復元プロジェクト」を推進している。この作業は、大型甕棺製作の技術文化的側面の研究を通して、当時の社会文化に対するより直接的な接近を図ることを目的にしている。したがって、当時の技術環境の復元のために、従来の研究成果と甕棺の実際



◀ 甕と鉄器

図 18. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「盛期」の甕棺と副葬品（国立羅州文化財研究所 2012b）



▲ 羅州伏岩里 3 号墳 '96 石室墓内の 2 号甕棺

▲ 羅州伏岩里 3 号墳 '96 石室墓内の 4 基の甕棺

▲ 羅州伏岩里 3 号墳 '96 石室墓内の 3 号甕棺

▲ 羅州伏岩里 3 号墳 6 号甕棺

▲ 羅州伏岩里 3 号墳 7 号甕棺

図 19. 栄山江流域における甕棺墓変遷段階「衰退期」の甕棺（国立羅州文化財研究所 2012b）



図 20. 大型甕棺の焼成実験の風景と復元された甕棺 (国立羅州文化財研究所 2012b)

的観察（肉眼観察、3D スキャン、CT スキャン、X 線撮影）等の資料を確保かつ分析し、これを実験考古学的方法と自然科学的分析を通して交差検証作業を実施した。

まず、大型甕棺に対する実際の観察と発掘調査に基づいて、甕棺の成形、乾燥、移動、焼成実験などの一連の過程を模擬試験した（図 20）。また、その結果を参考して、甕棺復元のための一連の作業を五良洞窯跡の発掘調査、大型甕棺の成分分析、製作実験などの細部に分けて進行している。とくに、最近は大甕棺を焼成する窯に関する復元実験を中心にプロジェクトを進めている。

5. おわりに

栄山江流域の甕棺古墳は、独特な形態の大型専用甕棺を使用している点において、他の地域と差別化される。そのような点で、栄山江流域の甕棺古墳の墓制としての特性を明かすために、いろいろな調査と研究が行われてきた。最近では既存の甕棺古墳をより多角的に探究できる資料が発見されている。栄山江流域における古代社会の実態を明確にするため、今後の課題については以下のようにまとめられる。

(1) 栄山江流域における古墳の築造過程についてはより精緻な検討が必要

最近、霊岩・沃野里方台形古墳（図 5）において分割盛土技法の墳丘築造方式が確認さ

れたことを始めとして、古代古墳の築造過程に関する新しい資料が確認されている。これをきっかけにして、古墳の築造過程から古代土木技術とともにそこに内在する社会経済的意味を明らかにさせる新たな契機が準備された。そして、羅州・伏岩里遺跡などでは、周溝の垂直あるいは水平拡張についての新しい資料が発見され、周溝内部で円筒形土器が大量に出土した古墳の構造と形態、築造方法についての新しい論議が必要になっている。

(2) 甕棺と甕棺古墳の編年についてはより綿密な研究が必要

甕棺と甕棺古墳に関する編年研究は比較的活発に行われてきた。これまでの編年研究は、見解がほとんど一致しながらも、非常に大きい差を見せていた。たとえば、羅州・新村里9号墳(図13)の場合には、研究者によって4世紀後半から6世紀前半までの非常に多様な編年観が提示されている。この古墳は、潘南古墳群において中心的位置を占めているだけでなく、それと横穴式石室墳、そして前方後円墳との前後関係が、甕棺古墳社会に対する視角とともに、百済との関係設定にも相当な反響を呼び起こせるのである。したがって、甕棺と甕棺古墳の編年体系に関する精密な検討が必要である。

(3) 栄山江流域における古代社会の構造と性格についての活発な論議が必要

これについては現在、大きく3つの方向で論議が行われている。1つ目は、栄山江流域の古代社会が統合した一つの政治体として発展したのか、それとも多数の小国形態として維持されたのかについての論争である。2つ目は、栄山江流域の古代社会と百済との関係設定に関する問題である。最後の3つ目は、栄山江流域の古代社会をどのように呼称するかという問題である。

(4) 大型甕棺窯やその付帯施設の発掘調査、そして大型甕棺の観察および成分分析を通して、大型甕棺の流通網を究明し、大型甕棺の時期別・地域別特性と変遷過程を明らかにすることが必要

また、大型甕棺の供給方式、埋葬施設としての使用および廃棄に関する多角的な調査と研究を通して、甕棺を活用した古代の葬送儀礼を復元するべきである。そのためには、栄山江流域の大型甕棺窯と甕棺古墳に関する考古学的調査・研究・実験に基づいて、GISを活用した水系・道路網などの古代地形の研究を加えて、栄山江流域の甕棺古墳の立地と流通網を復元すべきである。

今後、栄山江流域における古代社会の構造と性格をより明かにするためには、考古学と他の関連分野間の融合研究が必要である。そして、従来の個別的な調査および研究を総合化することができる研究方法論が開発されるべきである。そのような多様な試みを通して、栄山江流域における甕棺古墳社会の実態により近づくことができるだろう。

参 考 文 献

- 姜鳳龍、1998、「5~6세기 영산강유역 ‘웅관고분사회’의 해체」、『백제의 지방통치』、한국상고사학회。
- 국립나주문화재연구소、2010、『羅州 伏岩里遺跡 I-1~3 차 발굴조사보고서』。
- 국립나주문화재연구소、2011a、「나주 복암리유적 6 차 발굴조사 약보고서」。
- 국립나주문화재연구소、2011b、『羅州 五良洞 窯址 I-1~4 차 발굴조사보고서』。
- 국립나주문화재연구소、2012a、『靈巖 沃野里 方台形古墳 제 1 호분 발굴조사보고서』。
- 국립나주문화재연구소、2012b、『웅관의 일생-가마에서 무덤까지-』 안내책자。
- 金洛中、2009、『영산강유역 고분연구』、학연문화사。
- 김낙중、2009、「영산강유역 정치체와 백제왕권의 관계변화」、『백제연구』 50、충남대학교 백제연구소。
- 盧重國、1987、「마한의 성립과 변천」、『마한. 백제문화』 50、원광대학교 마한. 백제문화연구소。
- 朴淳堯、1998、「4~6세기 영산강유역의 동향」、『백제사상의 전쟁』 제9회 백제연구 국제학술대회、충남대학교 백제연구소。
- 박순발、2000、「백제의 南遷과 영산강유역 정치체의 재편」、『한국의 전방후원분』、충남대학교박물관。
- 朴天秀、2002、「梁山江流域における前方後円墳の出自と性格」、『考古学研究』 49-2、考古学研究会。
- 박천수、2006、「영산강유역 전방후원분을 통해 본 한반도와 일본열도」、『백제연구』 43、충남대학교 백제연구소。
- 徐賢珠、2007、「영산강유역 장고분의 특징과 출현배경」、『한국고대사연구』 47、한국고대사연구회。
- 成洛俊、1983、「영산강유역의 웅관묘 연구」、『백제문화』 15、공주대학교 백제연구소。
- 성낙준、1996、「영산강유역 웅관묘의 문화적 성격」、『백제연구』 26、충남대학교 백제연구소。
- 小栗明彦、2000、「전남지방출토 埴輪의 의미」、『백제연구』 32、충남대학교 백제연구소。
- 吳東燦、2008、「호남지역 웅관묘의 변천」、『호남고고학보』 30、호남고고학회。
- 오동선、2009、「나주 신촌리 9 호분의 축조과정과 연대 재고-나주 복암리 3 호분과의 비교 검토」、『한국고고학보』 73、한국고고학회。
- 李丙燾、1976、「근초고왕척경고」、『한국고대사연구』、박영사。
- 李基東、1987、「마한영역에서의 백제의 성장」、『마한. 백제문화』 10、원광대학교 마한. 백제문화연구소。
- 이기동、1996、「백제사회의 지역공동체와 국가권력」、『백제연구』 26、충남대학교 백제연구소。
- 李道學、1995、『백제고대국가연구』、일지사。
- 李暎澈、2001、『영산강유역 웅관묘사회의 구조 연구』、경북대학교 석사학위논문。
- 李正鎬、1996、「영산강유역 웅관묘의 분포와 변천과정」、『한국상고사학보』 22、한국상고사학회。
- 이정호、2012、「영산강유역의 백제고분」、『백제고분의 새로운 인식』 2012년 호서. 호남고고학회 합동 학술대회、호서고고학회. 호남고고학회。
- 林永珍、1997a、「전남지역 석실분토분의 백제계통론 재고」、『호남고고학보』 6、호남고고학회。
- 임영진、1997b、「영산강유역 이형분구 고분소고」、『호남고고학보』 5、호남고고학회。
- 임영진、2002、「영산강유역권분구묘와 그 전개」、『호남고고학보』 16、호남고고학회。
- 임영진、2005、「영산강유역석실분토분의성격」、『영산강유역 고대사회의 새로운 조명』、역사문화학회. 목포대학교박물관。
- 임영진、2010、「영산강유역 웅관묘사회의 연구사적 검토」、『웅관』、국립나주문화재연구소。
- 임영진、2011、「영산강유역권 분구묘의 특징과 몇가지 논쟁점」、『분구묘의 신지평』、전북대학교 고고문화인류학과 BK21 사업단 (ex-RTC) 국제학술대회、전북대 BK21 사업단。
- 임영진、2012、「고흥 吉頭里 雁洞고분의 발굴조사 성과」、『고흥 길두리 안동고분의 역사적 성격』、고흥 길두

- 리 안동고분 특별전 기념 학술대회, 전남대학교박물관.
- 朱甫暎、2000、「백제의 영산강유역 지배방식과 전방후원분 피장자의 성격」, 『한국의 전방후원분』, 충남고고학연구회 40주년기념논문집, 忠南考古学研究会.
- 최몽룡、1986、「고고학적측면에서 본 마한」, 『마한. 백제문화』 9, 원광대학교 마한. 백제문화연구소.
- 국립나주문화재연구소, 2010、「대형옹관제작 고대기술 복원 프로젝트」, 『移住의 고고학』 2010 제 34 회 한국고고학전국대회 발표자료집.
- 성낙준、2000、「영산강유역 甕棺古墳의 성격」 『지방사와 지방문화』 3 권 1 호.
- 曹美順、2011、「제작실험을 통해 본 대형옹관 제작기법」 『제 4 회 고대옹관연구 학술대회-실험고고학에서의 대형옹관 제작기법』, 국립나주문화재연구소.
- 田鏞昊、2012、「대형옹관 제작실험 연구의 성과와 과제」 『제 5 회 고대옹관 국제학술심포지엄-대형옹관제작 복원 프로젝트의 성과와 전망』, 국립나주문화재연구소.
- 崔盛洛、1996、「전남지방에서 복합사회의 출현」, 『백제논총』 5.
- 최성락、2010、「영산강유역 고분의 연구-고분의 개념, 축조방법, 변천을 중심으로-」, 『호남고고학보』 33, 호남고고학회.
- 최성락、2012、「영산강유역 옹관고분사회의 성격과 과제」 『제 5 회 고대옹관 국제학술심포지엄-대형옹관제작 복원 프로젝트의 성과와 전망』, 국립나주문화재연구소.
- 洪濬植、2005、「영산강유역 삼국시대 고분문화의 성격과 추이」, 『호남고고학보』 21, 호남고고학회.
- 常松幹雄、2010、「옹관묘의 분포와 그 배경」 『동아시아 옹관묘-일본편』, 국립나주문화재연구소.
- 堤隆、2000、「実験考古学」 『用語解説 現代考古学の方法と理論』 II, 同成社.
- 東潮、1995、「榮山江流域の墓韓」, 『展望考古学』 (考古学研究会 40周年記念論文集), 考古学研究会.
- 東潮、2001、「倭と榮山江流域 — 倭韓の前方後円墳をめぐる」, 『朝鮮學報』 第 179 輯, 朝鮮学会.
- 山尾幸久、2001、「五、六世紀の日韓關係 — 韓國前方後円墳の一解釈」, 『朝鮮學報』 第 179 輯, 朝鮮学会.
- 岡内三眞、1996、「前方後円墳の築造モデル」, 『韓國の前方後円墳』, 雄山閣.
- 有光教一、1940、「羅州潘南面古墳の發掘調査」, 『昭和十三年度古蹟調査報告』 朝鮮古蹟研究会.
- 朝鮮總督府編、1920、『大正六年度古蹟調査報告』.
- 土生田純之、1996、「朝鮮半島の前方向後円墳」, 『専修大学人文科学研究年報』 26, 専修大学人文科学研究所.
- 土生田純之、2008、「前方向後円墳をめぐる韓と倭」, 『古代日本の異文化交流』, 勉誠出版.
- 柳澤一男、2001、「全南地方の榮山江横穴式石室の系譜と前方後円墳」, 『朝鮮學報』 第 179 輯, 朝鮮学会.

6世紀中葉（泗泚期百濟）以後の 韓国榮山江流域

佐川 正敏（東北学院大学）・崔 英姫（韓国国立江陵原州大学校）

1. 榮山江流域は周縁域か

東北学院大学アジア流域文化研究所の谷口満所長と同博物館の辻秀人館長が、国際シンポジウム『日中韓周縁域史研究ことはじめ』（東北学院大学アジア流域文化研究所・博物館共催）における「朝鮮（韓）半島の周縁域史」に関する講演者の選定と仲介を、佐川に依頼した。まず、シンポジウムのテーマである「周縁域」にふさわしい地域について考え、榮山江流域（韓国全羅南道）と中（国）原（忠清北道忠州市）がすぐに頭に浮かんだ。前者は、主体部が大型甕棺墓で墳丘を同位置で増築していく多葬という地域独特の埋葬法を400年にわたって中核としながら、北方の百濟の威信財や東方の伽耶諸国の土器、さらに倭国と関連する前方後円墳が分布するというユニークな状況が確認されているからである。また後者は、百濟・高句麗・新羅が鉄鉱石と鉄器生産で有名な中原をめぐる激しい争奪戦を繰り返し、占領・支配国の文化的特色が重複、重層して残されているからである。

ところで、周縁域という用語は、中心対辺境という解釈を有する地域的な枠を嵌め込んでしまう懸念がある。榮山江流域は、6世紀中葉に百濟に本格的に支配されるまで、明確な国家を成立させていたか否かは不明であるにせよ、百濟・伽耶・倭の諸国のいずれからも支配されずに互恵関係を保持した特別な地域であった。したがって、地理的に見れば、百濟・伽耶・倭の諸国の周縁域が重複したような見方が可能と思われるかもしれないが、それは各国の視点によるものであって、榮山江流域の地域性や独自性を無視しかねない。榮山江流域は、百濟に支配されたことによって、国家という枠組み上、確かに周縁域になったが、その地域性や独自性は温存され、それは新羅統一以後も存続していたのである。

一方で中原は、三国の断続的な占領と支配を受け、そのたびに一見異国の周縁域となったが、中原は漢城期百濟の段階からすでに南漢江を通して漢城（ソウル市）地域と密接な結びつきがあった。新羅統一以後は五小京のひとつ中原京という重要な中核都市となったが、それは鉄器生産の要素だけではなく、中原で三国時代に培われた南漢江の水運や首都・金城（慶州市）との陸運の重要性から見て、中原京が半島の交通の要衝であったことと不可分であろう。このように他国の周縁域の問題を考えようとする際には、隣接地域という

柔軟なとらえ方をしつつも、国家の成立と興亡の複雑さや多様性に十分配慮しなければならないと考える。

さて今回は、その周縁域にある複数の国家との互惠関係を有した栄山江流域の古代文化の近年の研究成果について報告してもらうことにした。その理由のひとつは、2003～2007年に本学において実施された文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業『アジア流域文化研究』（研究代表者：東北学院大学教授（現名誉教授）細谷良夫氏）の一環として開催され、辻秀人氏が後に『百済と倭国』という一書にまとめた日韓シンポジウムの諸報告において、栄山江流域の調査・研究成果が多く含まれていたという経緯があるからである（辻編著 2008）。もうひとつの理由は、佐川が2012年8月31日まで一年間、栄山江中流域に位置する全羅南道光州広域市（仙台市と友好姉妹都市）にある朝鮮大学校で研究をする機会を得たことに関係する。この栄山江はすぐ西の羅州市を経て、河口のある木浦市で海に注ぐ。

伏岩里3号墳の発掘を契機に設置された国立羅州文化財研究所は、伏岩里遺跡の鉄器製作跡や木簡、そして五良洞窯跡と大型甕棺の調査・研究で大きな成果をあげてきた。とくに、伏岩里遺跡における泗泚期百済段階の木簡と大型甕棺を焼成した五良洞窯跡は、先の日韓シンポジウム後に発見、あるいは報告されたものである。佐川も伏岩里遺跡の木簡出土1号竪穴で共伴した瓦を調査するために、2012年7月に同研究所を訪問したが、その時の所長が金容民氏であった。氏は全羅南道宝城郡の出身であり、国立扶餘文化財研究所と国立伽耶文化財研究所の所長も歴任しており、栄山江流域の周縁諸国の古代文化を熟知しているので、今回のシンポジウム『日中韓周縁域史研究ことはじめ』における講演を2012年10月に依頼し、快諾を得ることができた。そして、「栄山江流域の最近の考古学的調査の成果について」という論文を拝受したが、諸般の事情で本学へお出で頂くことができなかつたので、紙上発表という形になった。なお、論文の日本語訳（以下、金容民論文）は、本誌に掲載してある。

さて、金容民論文では主として、百済によって本格的に支配される以前の6世紀前半までの栄山江流域の古代文化を特徴づける多様な大型甕棺墓の変遷と、甕棺を焼成した五良洞窯跡の新発見を契機とする大型甕棺の実験考古学的研究について詳細な研究成果と今後の展望が報告され、そして依然として栄山江流域とその周辺に限定された前方後円墳（金容民論文では前方後円形墳）の分布に関する多岐にわたる解釈について現状認識が示された。ここでは、百済によって本格的に支配され、大型甕棺墓も前方後円墳も衰退・消滅した6世紀後半からの栄山江流域について、金容民論文でも紹介された伏岩里遺跡1号竪穴出土の木簡の意義と栄山江流域に百済寺院がなかったというふたつの側面から、若干の考察を行うことにする。

2. 伏岩里遺跡出土木簡の意義

(1) 伏岩里遺跡の木簡と百濟の地方官庁の存在

国立羅州文化財研究所は、伏岩里古墳群を築造した勢力の生活遺跡を確認することを目的として、2006年から発掘調査を実施した。その結果、古墳群の東辺において伏岩里3号墳(国立羅州文化財研究所2006)築造終了間際かその直後の製鉄遺構と文字関連遺物(木簡、銘文土器、陶硯)が、益山以南の全羅南・北道ではじめて発見され、6世紀後半～7世紀の栄山江流域を通して従来不明であった泗泚期百濟の地方支配体制の実状が見え始めている(金聖範2009a、同2009b、国立羅州文化財研究所2010、金容民論文)。

木簡は、1号竪穴が埋まりかけた途中に堆積した埋土2層に限定して出土している。木簡の年代を直接示す大きな手掛かりは、「庚午年」銘の墨書であり、共伴土器の年代観によって、610年(百濟武王11年)とするのが合理的であると考えられている。また、そこから共伴した種子と籠、植物の枝や樹皮直下の木炭片の¹⁴C較正年代は、おおむね6世紀末～7世紀前半である。1号竪穴の南西側などから出土した9点の陶硯の年代観が7世紀前葉であることも、木簡の使用・廃棄年代と矛盾しない。

その種類には、文書木簡(封緘木簡を含む)と荷札木簡、習書木簡が含まれており、同時期の陶硯の存在からも、この1号竪穴の付近で文書行政が行われ、その行政官庁が存在したことを暗示している。官庁の存在を示す木簡には、「徳率」などの百濟の官職名を記したものがある。また、「官内用」という篋描き土器の存在も、官庁の存在を示すものである。また、「豆脰舎」の篋描き土器の存在は、伏岩里遺跡一帯が百濟の豆脰県(統一新羅の会津県)であり、その中心的官庁が設置されていたと推定されている。その官庁の遺構は、残念ながらいまだに発見されていないが、その存在は以上の各種の証拠から見て疑う余地がないので、発見も時間の問題であろう。

(2) 期待される伏岩里古墳群を築造した在地勢力の居館の発見

1号竪穴のすぐ西側にある伏岩里3号墳の6世紀後半の第5、16号横穴式石室墓からは、百濟の官位制を示す銀製冠飾などが副葬されているので、伏岩里古墳群を築造してきた在地勢力(首長)が、百濟の政治体制に組み込まれていたことが推定されている(国立羅州文化財研究所2006)。前述したように、付近には地方官庁の遺構が埋蔵されているはずであり、そればかりではなく、400年に渡って伏岩里一帯を支配してきた在地勢力の居館や関連施設も、必ずや埋蔵されていると推定される。百濟の貴重な地方官庁の遺構とともに、在庁官人となる以前の彼らの居館跡が発見されることにも期待したい。

それによって、栄山江流域が周縁諸国との戦略的互惠関係を保持していた段階から、百濟の周縁域、ひいては統一新羅の周縁域になっていく過程も、より鮮明に把握できるであろう。

3. 柴山江流域で百濟寺院が確認されない理由

(1) 飛鳥寺の瓦博士は首都・泗泚から渡来した

百濟では、熊津（公州市）期になると明確な仏教寺院が建設され、たとえば大通寺跡が残されている。泗泚期になると、首都・泗泚と一時遷都した可能性のある王宮里遺跡（益山市）の周辺に、定林寺や陵山里廢寺、王興寺、帝積寺、弥勒寺などの王立寺院を含む多くの寺院が建設され、それらの寺院跡では国立扶餘博物館と国立扶餘文化財研究所によって発掘調査が行われてきた（関連文献は佐川 2010 を参照）。それによって、百濟の首都周辺の寺院伽藍配置は、例外なく一塔一金堂式（日本では四天王寺式、韓国では定林寺式などの呼称もある）であったことが解明された。また、泗泚では陵山里廢寺木塔跡から 567 年銘の舍利石龕が、また王興寺木塔跡から 577 年銘の舍利容器が発見され、さらに益山では弥勒寺西石塔から舍利奉安の縁起を刻した 639 年銘の金板が発見され、寺院建設の変遷や舍利奉安形式の編年も明らかにされつつある（佐川 2010）。

百濟の威徳王（昌王）は倭国へ舍利を送り、また飛鳥寺の建設にあたっては百濟から瓦博士や鑪盤博士などの技術者を招聘したことは、日本書紀と元興寺縁起に記述されている。とくに、瓦博士の強い関与については、発掘調査によって出土した素弁蓮華文軒丸瓦の文様と製作技術、焼成された窯の構造（地下式登窯）からも明かである（奈良国立文化財研究所 1958）。飛鳥寺の創建用素弁蓮華文には、ハート形の花組（I 型式）と弁端点珠の星組（III 型式）があり、花組は広端を楔形に加工した行基（無段）式丸瓦を瓦当裏面に差し込むように接合し、星組は広端を片ほぞ形に加工した玉縁（有段）式丸瓦を接合していた。また、星組の範型は外形が円形であり、それは丸瓦の接合角度が瓦当文様との関係でまとまりをもたないことから確認され、回転台で同心円ナデを施した痕跡が瓦当裏面に残されている。一方、花組の範型が方形であることは、丸瓦の接合角度が瓦当文様との関係で 45 度ごとのまとまりをもつことから確認されている。両者はともに粘土板巻き作りで成形されている。そして、花組の軒丸瓦の点数は 30% と主体を占め、星組の軒丸瓦の点数は 11% で花組に準ずる。こうして、百濟からは花組の軒丸瓦の工人グループと星組の工人グループが、相前後して渡来していたらしいことがわかる。

近年、泗泚周辺の百濟寺院跡で出土した瓦の研究が進展している（国立扶餘文化財研究所 2011）。王興寺跡から出土した花組と星組の軒丸瓦を分析し、飛鳥寺の両者と比較した結果、両寺院における花組と星組の技術的特徴が、花組の軒丸瓦の丸瓦広端の加工の差を除けば、非常によく類似していることが報告されている（パク 2011）。佐川も崔もそのことを 2012 年に確認した。この成果は、泗泚周辺の他の寺院に普遍的にあてはまるものではないことも事実であり、したがって、飛鳥寺の瓦作りにあたっては、王興寺の造瓦工人に近い系統の泗泚周辺の二グループの瓦工人が関与していた可能性が高いといえる。

(2) 栄山江流域も含めて百濟の地方寺院の実態は不明

韓国側の百濟瓦の研究が進展するまでは、飛鳥寺へ派遣された瓦博士と造瓦工人グループが、百濟のどこで本来活動していたのか、首都の一流の造瓦工人グループではなく地方の工人グループが派遣されたのかもしれない、という想像をめぐらすことがしばしばあった。しかし、泗泚期の百濟の地方で仏教寺院跡や関連瓦の分布が、従来どれだけ確認されてきたかといえ、ほとんど不明であるか、場合によっては「なかった地域があったかもしれない」というのが実状であり、これはわれわれにとっても大きな驚きである。おそらく、日本の研究者も意外に思うであろう。それは、律令国家形成期の7世紀後半においては国ごとに一つや二つの寺院が建設され、8世紀初頭からは陸奥国という辺境、たとえば蝦夷の抵抗が強かった宮城県大崎平野においても、郡家とともに郡寺の建設が急ピッチで進められていたからであり、それは発掘調査や当該期の軒瓦の分布状況から明瞭に指摘できる（佐川 2012）。

百濟における地方支配が進行し、6世紀中葉からは県レベルの官衙の建設がしだいに展開していたことは、伏岩里遺跡の1号竪穴で出土した木簡から十分想定可能なことであり、それは前節ですでに述べた。この木簡土坑やその周辺からは、同時期の軒丸瓦の中房部分の破片1点と丸・平瓦の破片が多数出土しており、これが泗泚系統の瓦分布の南限である（国立羅州文化財研究所 2010）。丸・平瓦には厚手品と薄手品があるので、大型品と小型品の差が反映していると推定される。そして、これらが付近に官衙の存在を暗示する木簡とともに出土していることから、未知の官衙の建物の屋根に葺かれたものと推定される。しかし、栄山江流域においてはほかに泗泚系統の瓦が散布している遺跡はなく、順天市剣丹山城などの丸・平瓦は山城特有の在地系統のものであるので、栄山江流域とその周辺に当該期の寺院があった可能性はきわめて低いといえよう。

伏岩里遺跡より北の全羅北道金堤市に位置するが、泗泚期の百濟領内において当該期の蓮華文軒丸瓦（弁端点珠の星組で行基式丸瓦を接合、粘土紐巻き技法）と丸・平瓦が比較的まとまって発見されたのが、長華洞遺跡の2基の瓦窯跡とそれに隣接する瓦積み遺構である（財団法人全北文化財研究院・益山地方国道管理庁 2011）。これは武王が7世紀前葉に遷都した可能性のある益山・王宮里遺跡から南の全羅北道内においては、唯一の重要な発見である。おそらく、付近に供給地である官衙か寺院があったと推定されるので、その実態の追究は今後の大きな課題であり、期待でもある。

(3) 栄山江流域で寺院建設が遅れた原因

しかし、道路整備を含む各種の公共事業が展開しても、全羅北・南道の益山より南における百濟寺院の存在については、依然として不明な部分が多く、栄山江流域に至ってはなかった可能性が高い。韓国の研究者にその原因について尋ねたところ、この地域にシャーマニズムの伝統が根強く残っていて、仏教を受け入れなかったことが原因かもしれない、

という答えが返ってきた。しかし、伏岩里3号墳をはじめとする多くの古墳の発掘調査において、シャーマニズムの存在を裏付ける副葬品が発見されたという情報を知らない。栄山江流域で仏教を受け入れなかったシャーマニズム以外の他の思想・信仰的原因もあった可能性がある。それが伏岩里遺跡1号堅穴で木簡とともに出土した太極文様を墨で描いた木製品である。これを道教との関係で理解する案もある（国立羅州文化財研究所2010）。

栄山江流域を含む全羅南道で明確な仏教寺院が建設されたのは、統一新羅時代も9世紀になってからのことである。新羅は唐から禅宗を導入し、九山という中核寺院を全国9ヶ所に建設し、全羅南道長興郡にも宝林寺を、谷城郡にも泰安寺を、全羅北道南原市にも実相寺を建設した。このほかにも統一新羅時代末から高麗時代初期とされる石塔が全羅南・北道各地に残されているので、寺院建設活動がようやく活発化したのである。栄山江流域を含む全羅南道では、統一新羅時代になっても150年近く仏教を受け入れない在地の伝統的な思想・信仰が根強く存在したようである。

このような状況は、栄山江流域で例外的に認められるような現象ではなかったようである。6世紀前葉の新羅の碑文（浦項冷水里新羅碑など）には、中央政府や王が行政的な判決を行った後にシャーマニズム的な祭祀を行ったことが記述されている。それが6世紀中葉の真興王巡狩碑の碑文（摩雲嶺碑など）では、王の巡幸に僧が従い、その後ろに祭祀担当官が続いたことが記録されているからである（国立中央博物館2011）。仏教浸透・定着以前の各国の王室儀礼の実態と各地方の信仰の実態、そして仏教導入の過程についても、文献資料と考古学的資料によって考察する必要がある。とくに、地方への仏教導入の過程を追究することは、東アジア的に見ても重要な意義がある。

4. 律令国家形成期の陸奥国に照らして

栄山江流域が周縁諸国家と戦略的互惠関係を保持していた段階（大型甕棺墓や前方後円形墳があった6世紀前葉まで）から、百済の地方行政官庁が明確に設置された段階（6世紀末～7世紀前半）までの間の当該地域についても、強い関心もたれる。百済が、3号墳を含む伏岩里古墳群を約400年に渡って築造し続けた栄山江流域の有力な在地政治勢力とその居館を含む統治機構の所在地を、新たな政治体制における地方行政官庁の治所としたことは間違いのないところである。それに類似した状況は、律令国家形成期である7世紀中葉～8世紀初頭の陸奥国でも確認できる。

当時の陸奥国であった福島県内（正確には阿武隈川以南）の旧在地勢力である国造が評制と後の郡制に再編されていく過程は、磐城郡家跡と白河郡家跡と目される根岸遺跡と関和久遺跡の付近で発見された豪族居館跡と前方後円墳などの大型古墳、そして郡家跡と郡寺跡、さらには上円下方墳（野地久保古墳）の存在から明らかにされている（佐川2012）。しかし、宮城県大崎平野をおおむね北限（正確には岩手県胆沢平野の角塚古墳が

北端)とする前方後円墳をかつて築造した宮城県南部と中部の勢力は、国造制には組み込まれていなかった。かれらの7世紀後半や8世紀前葉の建郡段階における位置づけについても、榮山江流域の百濟化とだぶって見えてくるところがあるように思う。しかし、郡レベルまで仏教寺院を建設していく鎮護国家思想に基づく倭国中央政府の地域支配の徹底振りは、榮山江流域ではまったく認められない点であり、在地の思想・信仰を尊重した政策が採用されていたことが推定される。

そして、8世紀以後の陸奥国と出羽国における版図拡大戦略に伴い、長期間にわたる蝦夷勢力との抗争が存続した点も、榮山江流域では認められない。高句麗と新羅との激しい戦争に明け暮れた6~7世紀の百濟が、先の思想・信仰の尊重とともに、榮山江流域に対して柔軟な政治戦略を展開していたことを示すものであろう。この点について、今回はじめて古代陸奥国(多賀城跡から胆沢城跡まで)の諸遺跡を踏査した崔は、非常に強い、しかも新鮮な印象を抱いたという。崔は現在、京都大学大学院文学研究科の吉井秀夫教授の指導を受けながら博士論文を執筆中であるが、崔が得た新たな日本古代史の知見、とくに「周縁域史」の多様性を認識し、そのような視点での研究を韓国でも実践され、さらに韓国の多くの研究者に流布されることを期待したい。

参 考 文 献

- 金聖範 2009a 「羅州伏岩里遺跡出土百濟木簡とその他の文字関連遺物」『百濟学報』創刊号、韓国・百濟学会
- 金聖範 2009b 「羅州伏岩里遺跡出土百濟木簡」『學術會議「古代の木簡、そして山城」発表要旨』国立伽耶文化財研究所・国立扶餘文化財研究所
- 国立中央博物館 2011 『文字、それ以後(韓国古代文字展)』
- 国立扶餘文化財研究所 2011 『瓦 百濟泗泚期瓦研究 III』(国立扶餘文化財研究所學術研究叢書第60輯)
- 国立羅州文化財研究所 2006 『羅州伏岩里三号墳』
- 国立羅州文化財研究所 2010 『羅州伏岩里遺跡 I—1~3次発掘調査報告書一』
- 財団法人全北文化財研究院・益山地方国道管理庁 2011 『金堤 長華洞遺跡』(遺跡調査報告第58冊)
- 佐川正敏 2010 「飛鳥寺木塔心礎考」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざままで—』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 佐川正敏 2012 「寺院と瓦生産からみた律令国家形成期の陸奥国」『古代社会と地域間交流 II—寺院・官衙・瓦からみた関東と東北一』(国士館大学考古学研究会編)、六一書房
- 辻 秀人編著 2008 『百濟と倭国』高志書院
- 奈良国立文化財研究所 1958 『飛鳥寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報第5冊)
- パク・ウォンジ 2011 『瓦 百濟泗泚期瓦研究 III』国立扶餘文化財研究所

平成 24 年度 東北学院大学学術研究会評議員名簿

会 長	星宮 望
評 議 員 長	齋藤 善之
編 集 委 員 長	齋藤 善之
評 議 員	
文学部	[英] 遠藤 裕一 (編集)
	[総] 佐藤 司郎 (編集)
	[歴] 加藤 幸治 (編集)
経済学部	[共] 越智 洋三 (編集)
	[経] 泉 正樹 (会計)
	[共] 佐藤 滋 (編集)
経営学部	齋藤 善之 (評議員長・編集委員長)
	松岡 孝介 (会計)
	折橋 伸哉 (編集)
法 学 部	黒田 秀治 (庶務)
	白井 培嗣 (編集)
	木下 淑恵 (編集)
教養学部	[人] 鈴木 宏哉 (編集)
	[言] 伊藤 春樹 (編集)
	[情] 乙藤 岳志 (庶務)
	[地] 金菱 清 (編集)

東北学院大学論集 歴史と文化 第 50 号

2013 年 3 月 21 日 印刷
2013 年 3 月 25 日 発行 (非売品)

編集兼発行人 齋 藤 善 之
印 刷 者 笹 氣 幸 緒
印 刷 所 笹氣出版印刷株式会社
発 行 所 東北学院大学学術研究会
〒 981-8511
仙台市青葉区土樋一丁目 3 番 1 号
(東北学院大学内)